

42415

教科書文庫

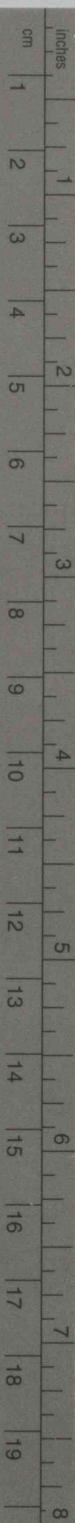
4
8/0
42-1938
2000 <sup>o</sup> 44855

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

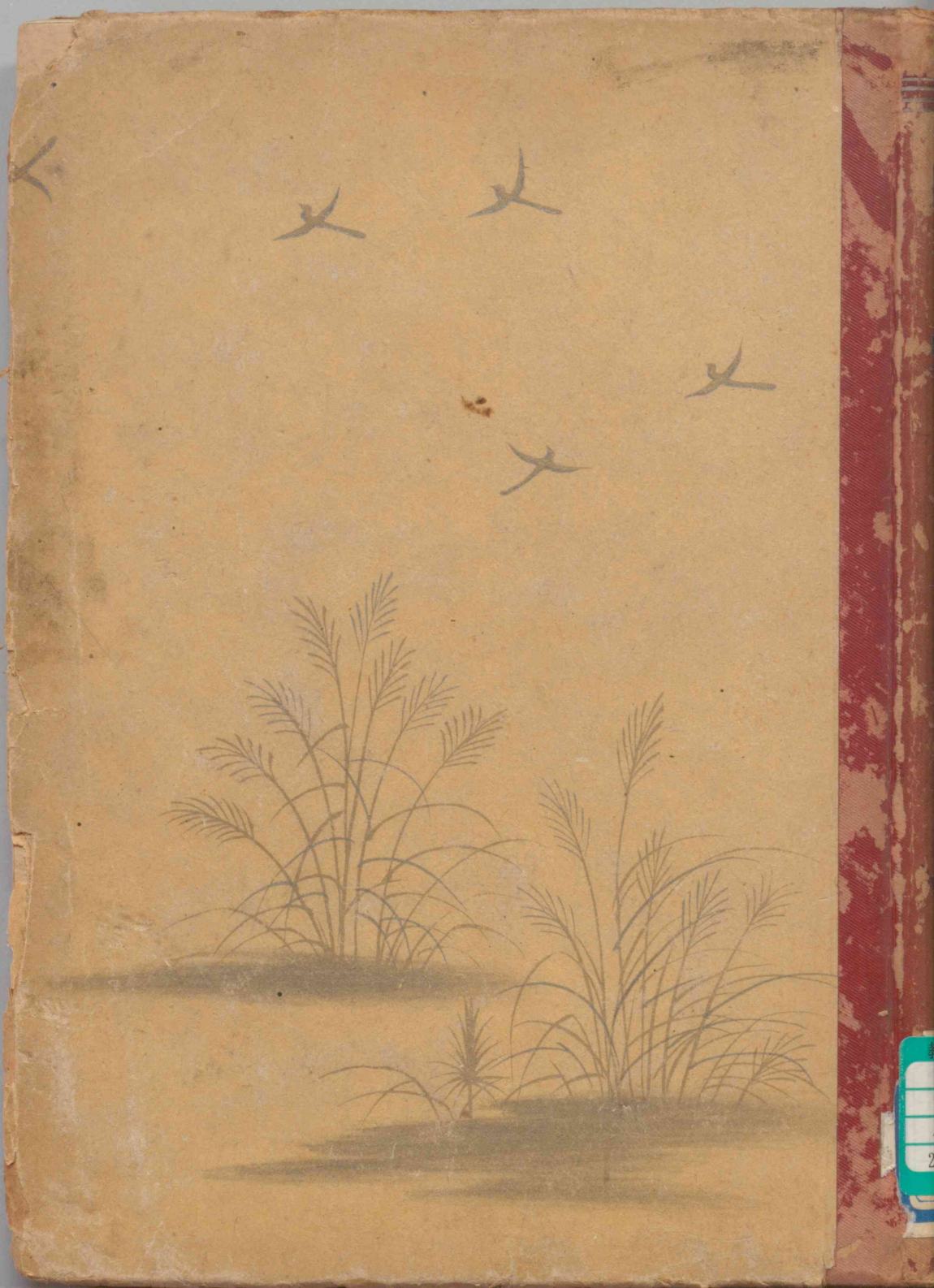
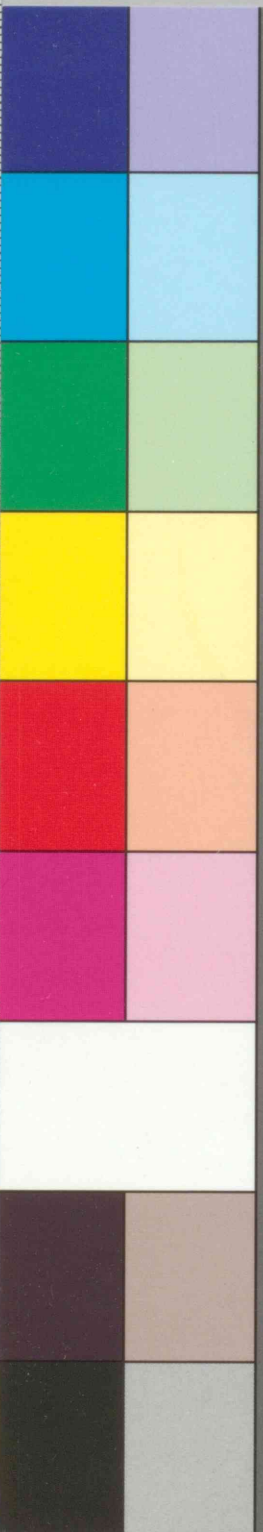
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



資

教科書文庫
4
810
42-1938
2000044855

375.9  
Ka9

700  
114  
8  
12

4  
14  
12  
1.6

46	4
45	
20	30
95	30
	50

文部省檢定

高等女子學校國語教科書 昭和三十三年八月八日

國文鑒

新制版

東京高等師範學校教授 垣內松三編

株式會社

文

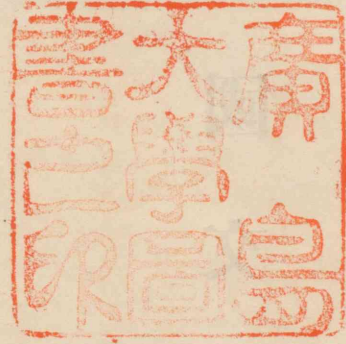
學

社

広島大学図書

2000044855





- 一 女子教育の最近の進歩と國語科の重要な使命とに鑑み程度を高めました。
- 二 教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。
- 三 縦に學年を貫き横に學期を連ねて組織的及び圓周的に教材を排列しました。
- 四 右編纂の大綱の外本書に關して必要な事項は別に趣意書に詳記しました。

目次 (卷五)

一 明・淨・直……………五十嵐 力……………四

二 大和國原……………武田祐吉……………一六

三 萬葉集鈔……………(萬葉集)……………二三

四 歌より物語へ……………芳賀矢一……………二九

五 かぐや姫……………(竹取物語)……………四〇

六 都 鳥……………(伊勢物語)……………四七

七 宇多の松原……………紀 貫之……………五五

八 須磨の秋……………紫 式部……………六〇

九 春は曙……………清少納言……………六四

一〇 菅公の左遷……………(大鏡)……………六九

一一 法成寺の造營……………(榮華物語)……………七五

一二 古今より新古今へ……………尾上柴舟……………八九

一三 光頼卿參内……………(平治物語)……………九六

一四 大原御幸……………(平家物語)……………一〇四

一五 愚禿親鸞……………西田幾多郎……………一〇七

一六 方丈記鈔……………鴨 長明……………一一一

甲乙丙丁  
七六  
七六

序  
万葉集  
歌より物語へ

一七 新島守……………(増鏡)……………一二四

一八 花はさかりに……………吉田兼好……………一三〇

一九 鉢の木……………(觀世語本)……………一三四

二〇 萩大名……………(狂言記)……………一四一

二一 自然愛の發達……………土居光知……………一五〇

二二 奥の細道……………(何れか)……………松尾芭蕉……………一五七

二三 曾我會稽山……………(わかたけ)……………近松門左衛門……………一七〇

二四 太 郎……………芥川龍之介……………一八二

二五 頼山陽……………朝比奈知泉……………二〇一

二六 蘭學事始……………杉田玄白……………二一一

二七 春を待ちつゝ……………島崎藤村……………二二九

二八 高瀬舟……………森 鷗外……………二三三

二九 文學復興の時期……………芳賀矢一……………二四六

三〇 臣 節…………………………二五二

附録

日本文學年表 (上古中古近古)  
同 (近世現代)

五十嵐 力  
文學博士。早  
稻田大學教授

文武天皇 第  
四十二代。紀  
元一三五年  
即位、在位十  
一年にして崩  
す、御壽二十  
五。

宣命 君命を  
臣下に宣る意  
より轉じて君  
命そのものを  
いふ。これが  
再變して漢文  
にて書きし君  
命を詔勅と呼  
ぶに對して、  
國文のものを  
宣命と稱する  
に至る。

古事記 三卷  
神代より推古  
天皇の朝まで  
の傳説・史實



を記録したる  
もの。元明天  
皇の和銅四年  
(一三七二)九  
月、太安麻呂  
勅を奉じて撰  
す。翌年正月  
成る。

日本紀 日本  
書紀。三十卷。  
神代より持統  
天皇の朝まで  
の傳説・史實  
を漢文にて記  
せり。元正天  
皇の朝舎人親  
王・太安麻呂・  
紀清人等勅を  
奉じて撰す。  
養老四年(一  
三八〇)五月  
成る。

萬葉集 二十  
卷。我が國最  
古の歌集。大  
伴家持の撰と  
す。

一 明・淨・直

五十嵐

力

文武天皇が即位の際に下された宣命の中に左の詞がある。  
是を以て百官人等四方の食國を治めまつれと任せ給へる  
國々の宰等に至るまでに、天皇が朝廷の敷き給ひ行ひ給へ  
る國の法を過ち犯す事なく、明き淨き直き誠の心もちて、い  
やすみいやすみて緩怠ることなく務め結りて仕へま  
つれと詔り給ふ大命を諸聞食へと詔る。

吾等は此の宣命に在る「明き」「淨き」「直き」といふのが、日本人  
の性質中の核となり、中心となるものであらうと思ふ。此の語は  
代々の詔勅に幾度も幾度も繰返されて居る。而も重きを措いて  
繰返されて居る。其の他古事記・日本紀・萬葉集等に於て、重々しい  
場合に幾たびも用ひられて居る。これは畢竟、吾等の祖先が心の

中に深く感じたこと、大和民族に最も濃く、最も多量に賦與され  
た性質が、自然に口を衝いて屢發した爲ではないか。世に大和民  
族の特性と稱せられる現實、光明活動向上、中庸快活、忠孝清廉、勇  
武、義侠、風雅等の諸性質は、概ね此の明・淨・直の三大性を基本とし  
て説明されるらしく、殊には三種の神器が此の三大性の標章とし  
て遺憾なきやうに思はれる。

鏡の性は明、其の徳は玲瓏透徹に物を映すにある。日本人は鏡  
のやうな明き心を以て、正しく事物を觀た。故にその見方は概し  
て公平無私で、赤い物は赤いとし、黒い物は黒いとし、善行に對し  
てはわれを忘れて歎美し、悪行を見ては敢然として排斥すると  
いふ傾があつた。天照大御神は、鏡を齋きて我が大御前を見るが  
如くせよと仰せられた。全國無數の神社には、その鏡が神體とし  
て齋かれてある。詔勅や祝詞や君臣應對の詞などに、「明き心」とい

祝詞 神に對  
して宜り申す  
詞。

ふ語が澤山に用ひられて居る。これ等はいづれも、此の性質が我が國民の心底に根深く植ゑつけられた證據になると思ふ。  
我が國民の中庸性、折衷性、調和性も、一面此の根本性質の結果であらう。我が國には政治、社會、宗教等の諸方面に互つて、諸外國に見るが如き非常な大衝突が無い。無いではないが割合に少く、またいつもよい加減に切上げて調和するといふ傾がある。例へば、異主義が新たに外國から入つて來る。毛色が變つて居るので暫くは争ふが、やがて御互に道理もあり、無理もあることが解ると、馬鹿らしくして争論がつゞけられなくなる。そこで騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停をする。萬事此の通りである。先づ儒教が入つて來た。至つて尤もらしい事をいふから、早速備聘して、我が固有の倫常に理窟をつけて貰ふ。かくて儒教は長へに我が國風の忠實なる辯護人となつた。佛教が入つて來た。

至尊の御身

聖武天皇。東大寺の大佛成るや佛前に向ひて自ら三寶の奴と稱し給へりといふ。  
兩部習合 眞言宗の教理を以て神道を解釋したるもの。主として最澄・空海等により確立せられたる思想。  
高僧 澤庵禪師。將軍家光の頃の禪僧。不動智神妙錄を著して禪・劍道の一如を説く

餘りに奇怪なので暫く押問答がある。やがて説き方の巧妙なのに打込むと、何等の芥蒂なく中心から歸依してしまふ。至尊の御身を以てさへ、自ら三寶の奴と名乗らせらるゝやうになる。けれども、天位の妖僧に歸するを見ては、さすがに黙つては居ぬ。かくて遂に兩部習合といふ伶俐な調和案が成りたつた。武家の世になつては、佛教を餘興扱ひして、老後の慰め、助命の口實とするやうになつた。徳川時代になつては、禪の修行に武士ほど都合よきものはなしなどと、釋迦如來の夢にも見ぬ調和説をとらふる高僧が現れた。基督教も二三度の喧嘩が濟んで、もうそろそろ日本の物に成りかけて來て居る。あの位の騒ぎで、明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆「明」といふ基本的國民性の賜ではないか。

馬上に天下を得た武將が文藝の獎勵に骨折るのも、専制國の

アリスト  
ル(前384年  
323)ヤケドニ  
ヤの哲學者。  
レトリック  
「辯證論」

陣中篝火のも  
とに 鳥津義  
久の臣新納忠  
元のこと。  
敵ぞとて 新  
納忠元の詠。

君主が國家人民の爲に立てたる君にて、君の爲に立てたる國家人民にあらず。などといふのも、一アリストートルはその名著「レトリック」に於て、政體を民主・寡頭・貴族、及び君主專制の四種に分ち、君主專制の目的は專制君主一身の保護にあり。」と説いて居る。國民の富めるを自らの富と看做された我が歴聖をはじめ、名君と呼ばれた諸大名の心掛が、西洋の君主のとは、まるで違つてゐるのも、一つは此の國民性の結果であると思はれる。一群雄割據の亂世に、陣中篝火の下に古今集を讀む武將のあるのも、同じ戰國に

敵ぞとて何かは人のにくからむ同じみくにの同じ  
身なれば

と詠んで、敵を同胞として愛した勇將のあるのも、武士が僧侶に親しみ、僧侶が武士に盡くすのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、

皆一つは事を見ること明かに、理に従ふこと流るゝが如き根本性によるのではないか。

大和民族は、十字軍や佛蘭西革命の如き極端な狂言を演ずるには、あまりに心が明る過ぎる傾がある。吾等は日本人を「公正」といひ、理に鋭し。といひ、感情の平靜を保つ。といひ、日本人は何事も受入るゝ胸懐洞然たる人種なり。というた外人の評が、決して、でたらめの空世辭ではないと思ふ。

清淨の徳は玉に於て絶好の標章を得て居る。淨と明とは似ては居るが、同じくない。其の異ふ趣は丁度鏡と玉との異ふ趣に似て居る。汚穢混濁を忌むことは清明共に同様であるが、清はそれ以上に味はひあり、温かみあることを要する。譬へば、鏡は空白にして正しく物を映ずれば足るが、玉は必ずしも空白物を映すを要とせずして、温潤の光、圓融の相、澄徹の趣あることを要するが

十字軍 中世  
末ヨーロッパ  
の基督教徒が  
エルサレムの  
聖地を回教徒  
たる土耳其人  
より奪ひ還さ  
んために起し  
たる戰。西紀  
一〇九六年よ  
り凡そ二世紀  
の間に、軍を  
起すこと前後  
七回に及びし  
も、遂に目的  
を達せずして  
止む。  
佛蘭西革命  
國王の專横、  
貴族・僧侶の  
跋扈に對し  
て、平民の權  
利を主張せん  
としてフラン



スに起りし大  
革命。その間  
幾多の慘劇を  
演ず。(一七  
八九—一七九  
三)

如きものである。

本來日本人は明かに事物を見る長所があるのみならず、外物を見るにも自己を發表するにも、一種の味はひある態度を具へて居た。其の明は空白の明ではなくして、温潤・圓融・澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくして、水晶・夜光珠の明である。我が國には古來襖・被が多く行はれ、廣く用ひられ、且重要視されて居た。祝詞・宣命を初として多くの歌詠・諷謠は、明き心を現しながら、趣味・風韻に富んで居た。しかも其の趣味や形容が諸外國例へば支那の文學に見るとき、張子の虎のやうな誇張の弊がなく、よく其の實を現し、中味に相應はしい修飾を纏うて居る。むくつけき武人にも、戰陣の間に花を翳し、歌詠を贈答し、或は胄に香を焼きしめるといふやうな嗜みがあつた。上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、それぞれ相應はしい文學をもつて

戰陣の間に云  
云 生田森の  
戦に、梶原景  
時梅花を胡飯  
にさして戦  
ふ。

歌詠を贈答し  
前九年の役に  
於ける源義家  
と安倍貞任の  
故事。  
胄に香を云々  
大阪夏陣に於  
ける木村重成  
の故事。

居る。外國出稼ぎの労働者が其の日の生活に窮しながらも、猶一  
二の植木鉢を持たぬはなく、しかしてこれは外國の労働者に絶  
えて見ぬ所といはれて居る。大工・指物屋の手に成る、はかなき家  
具や細工物も、西洋のが表面のみ美しく、裏面の粗末なのに反し、  
我が國のは見えぬ裏面まで手を盡くすといふ嗜みがあるとい  
はれる。是等は孰れも大和民族が清きを愛する根本性の現れた  
ものではないか。

吾等は、日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族  
より労働者に至るまで皆美術を愛翫す。』というた一外人の批評  
が、必ずしも虚妄でないと思ふ。

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味す  
る。其の厭ふ所は躊躇・緩慢・首鼠兩端である。曲ること、拗ること、邪  
なることである。叢雲の劍は其の標章として此の上なく相應は

父母を 萬葉集、山上憶良の歌。

海行かば 萬葉集、大伴家持の歌。「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、かへりみはせじ」

しい。

元來、直の徳の本領は、心の明かに見た所に向つて直前するにある。若し右の三徳を一括して之を一體と見れば、明は其の靜的方面即ち知の方面で、直は活動方面即ち意の方面である。知の明かに見たる所をば、意が直進して實現する。而して知の見方意の働き方に、潔くして言ひ知らぬ味はひのあるのが、邦人固有の性格ともいふべきであらう。明き心を以て、父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし愛し、故にその明き心の示す所に従ひ、直前して父母に事へ妻子を愛しむ。君を仰げば、八隅知し大君、現つ神として國に臨み給ふさまが限りなく高く貴い。故に直前して、海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍の獻身的奉公を致す。此の通りである。而して其の君父に事へ、妻子を愛するや、多くは水臭い思慮分別利害勘定の結果ではなくして、直實掬すべき趣があつた。此

眞淵 賀茂氏國學者。明和六年(二四二九)歿、年七十三。

宣長 本居氏國學者。享和元年(二四六一)歿、年七十二。

須佐男命 伊弉諾・伊弉冉二神の御子。天照大御神の御弟。  
櫛名田姫 土神足名稚・手名稚の女。

倭武尊 景行

處が眞淵・宣長等の國學者が感歎し、自負して措かなかつた所である。

無論何處の國にも、文化の進まぬ時代には、斯様な自然的の所があつたであらう。又日本民族にも利害勘定の行爲が無かつたとはいはれぬであらう。又自然直實の行爲に弊害が伴はぬともいはれぬであらう。けれども、我が民族の特長の一面は兎に角此處に在つたやうに思はれる。其の例は遠い昔では須佐男命、勝ちすさんでは前後を顧みず、皇祖に存分のいたづらして高天の原を震動させる。罪さるれば命を畏みて邊土に行かれる。出雲では櫛名田姫の不幸を見て、危険をも顧みず、直ちに八咫の大蛇を退治される。寶劍を得ると、これを先に敵なうた天照大御神に上られる。行り方がいかにも、はきはきとして、直斷決の文字そのままのやうではないか。次いで倭武尊、兄君を搥み批いで、手足

天皇の皇子、  
小碓命。(二  
課參照)。兄  
君 大碓命。

鎮西八郎爲朝  
源爲義の子。

千萬の 萬葉  
集、高橋蟲磨  
の歌。  
畠山重忠 源  
頼朝の臣。  
加藤清正 豊

を引つ闕いて、薦に裹んで投げ棄てるといふ亂暴者でありながら、一たび詔を承れば、劍に仗り、千里を獨往して東西の兇賊を平げられた。これ亦須佐男命系統の勇者である。それについては、鎮西八郎爲朝が、腕白、勘當、九國押領、召還、保元の勇戦、大島配流の一生、これも須佐男系の大立者。是等はいづれも向う見ずの亂暴者でありながら、妙に情に厚い所があり、君父の事とあれば水火も辭せず、直前するといふ風がある。直斷、決勇の權化で、たしかに大和民族固有性の一面を背負つて立つヒーローである。

其の他、蒙古の來寇に西海の將士が身命を棄てて防戦した態度を見よ。代々の武士が、

千萬の軍なりとも言擧げせず取りて來ぬべき男と

ぞおもふ

斷乎たる覺悟を見よ。畠山重忠、加藤清正の如き竹を割つたやう

臣秀吉の臣。  
曾我五郎 名  
は時致。河津  
祐泰の子。曾  
我祐信に養は  
る。  
朝比奈三郎  
名は義秀。和  
田義盛の子。  
禪宗、坐禪を  
主とする佛教  
の一派。  
金平淨瑠璃  
淨瑠璃節の一  
種。櫻井和泉  
太夫の創めし  
もの。必ず坂  
田金時の子金  
平を主人公と  
し、それが到  
る所に悪鬼や  
妖怪を退治す  
ることを筋と  
す。元祿以前  
江戸に流行せ  
り。

に正直な豪傑の、國民に尊崇さるゝを見よ。曾我の五郎、朝比奈三郎のごとき一徹者の、國民に愛さるゝを見よ。豁然大悟の禪宗が盛に行はれたるを見よ。おつと出せば、やつと受ける金平淨瑠璃の流行した趣を見よ。眞偽は知らねど、正直は一旦の依怙に非ずと雖も終に日月のあはれみを蒙る。謀計は眼前の利潤たりと雖も必ず神明の罰にあたる。といふ戒が、天照大御神の御言として、神道家に唱へられて居た。武士は、七息思案といふ格言があつて、分別も久しくすればねまる。武士は物事手取早にするものぞといふ事が、武士道の金戒になつて居た。

是等はいづれも直きを好む性質が、大和民族の心性の基本精髓を成して居る證據である。(新國文學史)



耳成山・畝傍山 奈良縣高市郡に在りて香具山と共に大和三山として有名なり。梶子 アカネ科の常緑灌木。莖は二・三米、葉は長楕圓形で、對生す。花は白色大形で香氣あり。齋瓮 古、酒を盛りて神に供へし陶器の壺。三輪山 奈良縣磯城郡三輪町の東に在る山。高取山 奈良縣高市郡の南境に峙ち吉野郡に跨る。葛城山 奈良縣と大阪府との分界なる金

猶存してゐる。天の香具山はその背後に高い山を控へてゐるので、やゝ目立たない。然し古代から最も人事と交渉の多い山で、神事にはこの山の眞榊を根こじにし、又この山の土を取つて齋瓮を作つたのである。

この三山の地が古代文化の中心地であつた。更に東方には三輪山から續いて、泊瀬の山々が聳え、南には多武高取の山、西方には葛城の連嶺が雲を凌いで、大和川を隔てて北方の生駒山脈に連なつてゐる。また多武高取の彼方には吉野川を隔てて吉野の群山がそゝり立つてゐる。たゞ北方のみはやゝ開けて奈良郡山の平原を控へてゐるが、それもその末は奈良山が霞をひいて遮つてゐる。かやうに四方山を以て圍まれた土地であるから、氣候は溫和であるが、寒暑の差はやゝ激しい。昨日まで青葉に茂つてゐた山も、一夜の雨に黄葉してしまふやうに感じられることも

剛山脈の一峰 高さ九六〇米 大和川 水源は泊瀬川、奈良盆地を北西流して大阪灣に注ぐ。近畿第二の大河。生駒山脈 奈良縣と大阪府との界をなせる山脈。奈良縣生駒郡の西に在り。吉野川 大臺ヶ原山を發し奈良縣吉野郡を経て、和歌山縣に入りて紀伊川となりて海に入る。奈良山 奈良市・添上郡佐保村・生駒郡都跡村の北なる丘嶺の總稱。弓月が嶽 卷向山の高峯の名。卷向山は

少くない。併し京都ほどの氣象の激變はなく、雨量は少く、風もさして烈しくはない。晴れて雲の退くまゝに仰ぎ見れば、遙かなる吉野山に今朝は雪の白きを見る。月は卷向の弓月が嶽より出て、玉くしげ二上山に沈む。この平和の郷に古聖帝は皇居を奠められたので、そこに住む人々の溫和な心は、そのかみの埴輪の目鼻にも偲ばれるのである。

元明天皇の和銅三年、天皇は都を最北の奈良平原に遷して、ここに平城宮を造營せられた。爾來七代七十餘年の間、この地は帝都として榮えたのである。この南方は大和川を隔てて飛鳥藤原の平野に接し、東には春日山・高圓山があり、佐保川はその溪谷の水を併せて、南流して大和川に注ぐ。北は奈良山を隔てて山城の國に接し、西は生駒の山脈を以て河内國に隣してゐる。その氣象や風光は三山の地と大差はないが、時の人は山遠き都と稱して、

奈良縣磯城郡  
經向村の東嶺  
二上山 金剛  
山脈の一峯  
高さ四七四米  
元明天皇 第  
四十三代(御  
在位一三六七  
—一三七四)  
飛鳥 奈良盆  
地南部、今の  
高市郡岡村よ  
り飛鳥村の邊  
の一帯の稱。  
藤原 奈良縣  
磯城郡香具山  
の山麓にあり  
しと傳へらる  
春日山 奈良  
市の東方。山  
麓に春日神社  
あり。  
高圓山 春日  
山の南方に隣  
れる山。  
佐保川 奈良  
市の東方高地  
を發し、市の  
北西方を經、

天空の開豁を喜んだのである。もしきの大宮人は佐保の内に  
邸宅を連ねて、馬酔木散る高圓の野邊に遊び、大君の三笠の山の  
親しき姿を仰ぎ見つゝ、ひたすら唐代の文物の移入に努めた。こ  
の間に古事記・日本書紀は成り、懷風藻は編せられ、律令は再び改  
修せられた。萬葉集の前身である多くの家集も、恐らくはこの時  
代の前半に成つたのであらう。時に都を山近き恭仁の宮、難波の  
京に移したこともあつたけれども、それも一時で、またもとの平  
城の京に還つた。時代はもう都を遷すには餘りに面倒な事情を  
伴ふふやうになつてゐたのであらう。

青丹よし奈良の都は咲く花の薫ふが如しと歌はれてゐる。香  
具山のふりにし里は鶉鳴く里と荒れたけれども、夏草の茂みを  
分けて草深百合の花咲みに咲ますを尋ぬる人もあらう。高取の  
山を越ゆれば、山峽の間を流れて吉野川は遠白く西に走る。後の

南西流して大  
和川に合す。  
三笠の山 嫩  
草山をいふ。  
春日山の北に  
在る全山美し  
き芝生の草山  
懷風藻 一卷  
我が國最初の  
漢詩集。孝謙  
天皇の御代に  
成る。  
恭仁の宮 京  
都府相樂郡、  
今の瓶原。加  
茂の二村、木  
津町の邊一帯  
を稱す。  
難波の京 現  
在の大阪市東  
部の丘上。  
青丹よし 青  
丹よし奈良の  
都は咲く花の  
匂ふが如くい  
ま盛りなり。  
(萬葉集)  
和歌の浦 和  
歌山市の南四

吉野朝の花は山上であるが、萬葉人の遊んだところは川の畔で  
あつた。鮎子さばしる瀧つ河内に離宮を建てられたのは昔から  
のことだ。天武天皇持統天皇以後も屢々この宮に行幸せられた。  
萬葉集頃の人々の通路は、葛城山の麓なる巨勢の野を通つて  
吉野川の溪谷に出た。それより下り眞土の山を越えて紀伊の和  
歌の浦へも出た。難波への往還は、奈良からは生駒山脈を越えた。  
峰の上に匂へる花を仰ぎ見つゝ、風な吹きそと龍田の神に言舉  
げして峠に出れば、かゞやく難波の海は眼の前に廣げられて、遣  
唐の船舶も、その岸の住吉の神を祈つて眞楫し々ぬき漕ぎわか  
れたのである。奈良より北へ奈良坂を越えれば、泉川の清流は鹿  
背山の間を流れて来る。さざなみの近江の國へはこれから通ず  
るので、北國への旅には必ず越えねばならぬ峠であつた。  
大君のまします時は即ち都であるが、天皇の御心が一旦その

料の海灣。龍田の神。風神たる天。御柱命。國柱。命を云ふ。生駒郡三郷村立野に官幣大社龍田神社として祀る。  
 任吉の神。古來、海路を守る神として漁業・航海業者の間に信仰ある神。  
 興福寺。法相宗の大本山。奈良市公園の地に在り。  
 立ち替りの歌。萬葉集卷六に出づ。  
 大極殿。大内裏八省院の中央にあり。天皇の朝政を見たまひました即位の大典を行はせられし正殿。

地を離れて北へ奈良坂を越え給へば、さしもとことにはにと思ひ定めて造られた奈良の都も、いつしか衰へて僅にその東部のみが興福寺の勢力の下に残つた。これが現在の奈良市である。  
 立ち替り古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり  
 これは天平の中ごろに、都を一時奈良から山城の恭仁に移した當時の作である。今の奈良に旅する人は麥圃の間にそのかみの平城宮の大極殿の礎石の遺跡を見て、また同じ感慨に浸るであらう。併し工作物は亡びても、いにしへ人の生活の躰は儼として今も残つてゐる。古人の残した文藝の力はたやすく吾人の心の上に古人の心を呼び起さしめる。文化の故郷を偲び祖先の心情を懐かしむ者に取つては、大和の國の一草一石も意味ある存在である。(上代日本文学史)

萬葉集 二十卷。撰者不詳。仁徳天皇の朝より淳仁天皇の朝に至る四百餘年間の和歌四千四百九十六首(短歌四千七百七十三、長歌二百六十二、旋頭歌六十一)を漢字の音訓を以て記録せるもの。持統天皇 第四十一代(御在位一三四六一一三五七)柿本人麿 傳不詳。持統・文武二天皇に仕ふ。世に歌聖と稱す。

三 萬葉集鈔

短 歌

春過ぎて夏きたるらし白たへの衣ほしたりあめの香具山

持統天皇

山

柿本人麿

ひさかたの天の香具山このゆふべ霞たなびく春立つら

しも

ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば

月かたむきぬ

山部赤人 傳  
不詳。聖武天皇に仕ふ。柿本人麿と名を齊しうす。  
和歌の浦 和歌山市の南四軒、今の和歌山市和歌浦町の江灣。

大伴旅人 養老二年、卑人を征して功あり。天平二年、大納言に任じ同三年(一三九一)歿、年六十七。  
山上憶良 寶三年入唐し、慶雲元年歸朝す。聖武天皇の朝筑前守に任じ、天平五年(一三九三)歿、年七十四。  
大伴の御津 御津は難波(今の大阪)で大伴はその邊の總名なり。  
大伴家持 旅人の子。延暦中中納言に任じ、征夷大將軍となりて蝦夷を征す。延暦四年(一四四五)歿。

山部赤人

和歌の浦に潮満ち來れば鴻を無み葦邊をさして田鶴鳴  
きわたる  
むかし見しふるき堤は草ふかみ池のなぎさに水草おひ  
にけり  
ぬば玉の夜のふけゆけばひさぎ生ふる清き河原に千鳥  
しば鳴く

大伴旅人

吾妹子が植ゑし梅の木見るとに心むせつつ涙しなが  
る  
わが丘に秋萩の花風をいたみ散るべくなりぬ見む人も  
がも

山上憶良

憶良らは今は罷らむ子泣くらむその彼の母も吾を待つ  
らむぞ  
いざ子どもはやく日本へ大伴の御津の濱松待ちこひぬ  
らむ

大伴家持

わが宿のいささ群竹吹くかぜのおとのかそけきこの夕  
かも  
うらうらに照れる春日に雲雀あがりこころかなしもひ  
とりし思へば



近江の荒都  
滋賀縣滋賀郡  
の地に在りし  
天智・弘文二  
天皇の帝都大  
津宮。  
橿原のひじり  
神武天皇。

平山 奈良市  
の西北にある  
歌姫越。  
天皇 天智天  
皇。

幸崎 滋賀縣  
滋賀郡に在  
り。

田兒の浦 靜  
岡縣富士郡の  
沿海。

長歌  
近江の荒都を過ぎし時作れる歌 柿本人麿作

玉櫛 畝火の山の 橿原の ひじりの御世ゆ あれ  
ましし 神のごとごと 樛の木の いや繼ぎ嗣ぎに  
天の下 知ろしめししを 天に滿つ 倭を置きて  
青丹よし 平山を越え いかさまに 念ほし食せか  
天離る 夷には有れど 石走る 淡海の國の 樂浪  
の 大津の宮に 天の下 知ろしめしけむ 天皇の  
神のみことの 大宮は 此處と聞けども 大殿は  
此處と云へども 春草の 茂く生ひたる 霞立つ  
春日の霧れる 百磯城の 大宮どころ 見れば悲し  
も

反歌

ささなみのしがの幸崎さきくあれど大宮人の船まちか  
ねつ  
ささなみのしがのおほわだ淀むとも昔の人にまたも逢  
はめやも

不盡山を望める歌 山部 赤人

天地の 分れし時ゆ 神さびて 高くたふとき 駿河  
なる 不盡の高嶺を 天の原 ふりさけ見れば わた  
る日の 影もかくろひ 照る月の 光も見えず 白雲  
も いゆきはばかり 時じくぞ 雪はふりける 語り  
つぎ 言ひつぎ往かむ 不盡の高嶺は

反歌

田兒の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪は

ふりける。

子等を思ふ歌

山上 憶良

瓜はめば 子どもおもほゆ 栗はめば まましてしぬば  
ゆ いづくより 來りしものぞ まなかひにもとな  
かかりて 安寝しなさぬ

反歌

しろ金もこがねも玉もなにせむにまされるたから子に  
しかめやも

#### 四 歌より物語へ

芳賀矢一

平安朝時代は支那文化の影響の次第にわが文化と融合したる時代にして、わが國特有の文化も亦次第に發展の氣運を見たる時代なりとす。所謂和魂漢才の語は、實にこの時代の造語なりしなり。就中文學上に最大の關係を有するは、假名文字の製作なり。奈良朝に於ては、漢字を音韻文字として使用せしが、この時代に至り、或は之を草體にし、或はその扁旁を割きて假名となし、音標文字として用ひたるより、漢文・漢詩の製作は朝廷の科擧に必要なる科目たりしに關らず、一面に於て國語を以て記せる純國文學の發生を促し來り、當時の建築・彫刻・繪畫等が日本式の發達をなしたると同じく、文學も亦特殊の發達をなして、支那の強大なる文化に壓伏せられざりし我が國民の元氣を發揮せり。假名

芳賀矢一 國文學者。文學博士。昭和二年歿。年六十一。  
平安朝 桓武天皇の延暦十四年（一四五五）平安奠都より、後鳥羽天皇の文治元年（一一八四）五）鎌倉幕府開創まで三百九十年間。  
清和 第五十六代天皇。  
（御在位一五三六）  
文德 第五十五代天皇。  
（御在位一五一〇—一五一八）

延喜の朝 醍醐天皇の御代。  
古今集 古今和歌集。二十卷、醍醐天皇の延喜五年（一五六五）四月、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑、勅を奉じて撰す。貫之の和文の序及び紀淑望の漢文の序あり。  
後撰集 後撰和歌集。二十

文字を以て一般に國語を寫すに至りしは、清和天皇・文徳天皇以後にあらんか。韻文としての和歌、散文としての物語は相前後して著しき發達をなし、平安朝の文學界を燦爛たらしめたり。

延喜の朝、始めて和歌勅撰集の舉あり。これを古今集とす。古今集は萬葉集以後の短歌を集め、尙當時の歌人の篇什を收む。萬葉集の歌には直覺の情を歌ひ、眼前の景色を敘せるもの多し。古今集の歌は、俯仰感懷、人生の無常を敘し、浮世の夢の如きを説く。三十一文字の歌體としては、頗る豐富なる内容を收め得たりといはざるべからず。萬葉集は概して敘景の歌に富み、古今集には、理窟の歌多し。修辭の法も、古今に至りては進歩著しく、譬喩・縁語・懸詞等最も巧妙に使用せらる。奈良朝と平安朝との言語の相違は、亦その歌調の相違を感じしむること尠からず。萬葉集は初心な

卷。村上天皇の天曆五年（一六一一）十月、大中原能宣・清原元輔等五人をして撰ばしめ給ひし歌集。萬葉集・古今集に入らざる新古の歌一三五六首を收む。  
拾遺集 拾遺和歌集。二十卷。古今集・後撰集に洩れたる歌一五三一首を收む。

紀貫之・土佐日記 第七課 參照。  
大堰河行幸和歌序 延喜五年九月宇多法皇の大堰川行幸の時、貫之

る趣ありて、簡古の味はひに富み、古今集は巧緻の境に進みて、勁健の趣なし。然り而して、自然と人生との融合はこの時代に確定せられ、春の鶯、夏の郭公、秋の蟲の音、鹿の聲、四時の景物に伴ふ禽獸も亦自ら一定し、春の花の盛りには、人生の樂しき朝を思ひ、萩の上の露には、はかなく消ゆる死の夕を悲しむ。和歌の約束悉くこゝに成立して、後の文學は皆これに則るに至れり。古今集に次ぎての撰集は後撰集にして、遺れるを拾へるものに拾遺集あり。相並びて三代集と稱す。

紀貫之は國文を以て始めて土佐日記を記し、大堰河行幸和歌序を記し、古今集の序文を作れり。かくの如きは、即ち假名文をして漢文と併行せしむる新例を開けるものにして、貫之が功勞、見識は實にこの點に存す。

其の他供奉の歌人の詠したる和歌の序。伊勢物語 六課参照。在五中將在原業平歌人。阿保親王の第五子。元慶四年(一五四〇)歿。年五十六。古今六帖 古今和歌六帖、十二卷。古今の名歌を六帖、二十餘題に分類して收む。貫之の女の撰といふ。新撰萬葉集 二卷。平安朝初期の短歌を萬葉假名にて書き、歌毎にその意を含める漢詩を添へたるもの。菅原道眞の撰と傳ふ。

大和物語 二卷。作者不詳。

蜻蛉日記 八卷。右大將藤原道綱の母の著。

和泉式部日記 一卷。著者泉式部は大江雅致の女。和泉守橘道貞に嫁し、小式部内侍を生む。道貞の死後藤原保昌に嫁す。

紫式部日記 二卷。紫式部が上東門院に宮仕せし時の記録。

竹取物語 第五課参照。

うつぼ物語 二十卷。作者不詳。異本多し。

伊勢物語は和歌に就いての傳説集なり。在五中將の初冠より書起して、その今はの時の歌を以て筆を收む。すべて歌を主として、その由來境遇を敘述せるものなり。然れども篇中の歌は萬葉集・古今六帖・新撰萬葉集中に見ゆるもの尠からず。或は多少その句を變更したるものあり。業平以後の作者の歌も亦加はれり。要するに、人口に膾炙せる古今の名歌を基礎として、その歌の由來を説き、これに説話を附加したるものなり。伊勢物語の後に大和物語あり。同じく歌物語にして、當時の名歌に關する説話を收め、又弘く古代の和歌傳説を収録せり。その伊勢物語と相並びて後の歌人に尊崇せられたるは、故ありといふべし。

歌物語は歌を主とす。もし一身のこの種々の境遇を記述すれば即ち日記となり、もしこの種々の境遇を總合して脚色を加ふれば即ち物語となる。この種の日記の最も古きを蜻蛉日記とす。

日記てふ名の下には、これより先、土佐日記あれども、こは紀行文なり。紀行文の日記も亦歌を主とせる事、尙歌物語の性質を失はずと雖も、女流日記の如く女子の生活を記したるものにあらず。和泉式部日記は、これと比較すれば、文辭も整はざるのみならず、輕佻浮華の本性はよくその筆端にあらはれたり。紫式部日記にも抒情の文多けれども、人事の筆を交へたる所尠からず。物語日記の、上流社會の人の妻として家庭の様を寫せるに反し、これは高家の召使として宮仕の様を寫せり。前者が自己の情緒をのみ筆述せるに對し、これは主家の榮華めでたきさまを寫せり。物語の祖と稱せらるゝ竹取物語は、月中女子の傳説を骨子として、後の物語類とはその性質を異にす。うつぼ物語の、主人公仲忠の父俊蔭の事を記するや、亦印度の宗教傳説によりて、奇怪の談多く、仲忠の生立、尋常ならざれども、以下は通常の搢紳貴女等

の物語となり了れり。源氏以前の物語としては、恐らく最も大部なるものなりしならん。その他の小物語に至りては、實に多數なりしなるべけれども、今傳はれるもの尠し。落窪物語も亦源氏以前の物語にして、繼子傳説を骨子とす。かくの如き物語、冊子の流行につれて源氏物語は成れり。源氏物語はこれらの物語を大成したるものといふべく、平安朝物語の白眉として、この時代の代表的傑作と見做すを得べし。

源氏物語は紫式部の著にして、前後五十四帖、前篇は光源氏を主人公とし、後篇の十帖は薫大將を主人公とす。卷數を以て、平安朝第一の大作たるのみならず、全篇貫通の脚色整然として紊れず。主人公を圍繞せる各種の人物の性格も明瞭に發揮せられ、局面の變化も亦頗る多し。平安時代の物語は宮廷を以て中心とす。源氏物語は實に平安朝の上流社會の心性を映寫し、艷美の筆能

く宮廷を圍繞せる貴紳生活の面影を傳へたり。大體に於て事實にして、傳奇的ならず。うつぼ物語に比すれば、一層現實的となり、唯佛教の因果則を認めたるのみ。源氏の大作たる所以は、その人物の描寫に於けると同じく、その自然を描ける文辭の絢爛精妙なる點に在り。人事の描寫の後には必ず自然の背景を添ふ。上古以來人事と自然とを融合せる詩的思想は、こゝに至りて最大の發達をなせるなり。その半面は和歌の趣味にして、地の文には必ず歌の景情を含めり。源氏は即ち和歌の最も大なるものなり。後世の歌人が源氏物語を以て歌人必讀の書となししも眞に故なきにあらず。

源氏物語の後に狹衣物語あり。源氏以後の物語として、この外に更科日記の著者、菅原孝標女の作といへる濱松中納言物語、及び藤原兼輔の作なりと稱せらるゝ堤中納言物語あり。作者に就



變の妙、即ち人を魅するに足るなり。或事柄に執着固定せずして一時に多方面の興味を惹起すの妙機を捕へ得たるは、即ちその文の輕妙洒脫の風を帶ぶる所以なり。この點に於て、後世の俳家に似たるところあり。頓智機智を貴ぶは當時の和歌の贈遺に於ける特徴として、歌人の最も苦心せる所なり。清少納言は才氣奔放、當意即妙の才に富めり。その性質最もよくこれに適したるなり。語を換へていへば、直ちにその時代の性格を代表する人物なりしなり。

平安朝時代初期の歌物語、一變して小説的物語となり、日記となり、再變して歴史物語を生ぜり。歴史物語としては、即ち榮華物語・大鏡等あり。榮華物語は全篇四十帖、村上天皇の月の宴に始まりて、紫野の卷に終るといへども、要は關白道長が一生の榮華を寫せるものなり。大鏡の藤原氏の榮華を寫すことは、全く榮華物

臣に至る。後一條天皇の萬壽四年(一六八七)歿、年六十二。  
大鏡 第十課 參照。  
雲林院 今の京都市上京區大宮の地にありし寺。夙く荒廢に歸す。

語に等し。しかも雲林院の菩提講に來り合へる大宅世繼・夏山繁樹二人の老翁の談話としてこれをしるし、まゝ傍聽者の意見を挿み、全體の構造、文學的にして飽くまでも物語たる性質を失はず。その文、稍勁健にして、筆端褒貶の意を含めるは、思ふに男子の作なるべし。この二書は、藤原氏時代の最後の文學として、藤原氏時代の最後の榮華を寫せるものなり。藤原氏の榮華は道長に至りて極まる。二書共に道長の盛世を寫すを主眼として、藤原氏の歴史を敘し來れるなり。

平安朝の世は平安の都の今を盛りと榮えたる時にして、上流の紳士は詩歌に、音樂に、舞踏に、風流閑雅の技を弄べり。その束帶の裾を引きて、頻繁なる年中行事に仕へし態や、如何に優美なりけん。これらの面影は各種物語の上に想見すべきなり。

五 かぐや姫

春の初よりかぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。或人の、月の顔見るは思むこと」と制しけれども、ともすれば、人まには月を見ていみじく泣き給ふ。

七月の望の月に出でゐて、せちに物思へるけしきなり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、かぐや姫、例も月をあはれがり給ひけれども、この頃となりては、たゞごとにも侍らざめり。いみじく思し歎くことあるべし。よくよく見奉らせ給へ」と言ふを聞きて、かぐや姫にいふやう、なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ、うましき世に」と言ふ。かぐや姫、月を見れば、世のなか心細くあはれに侍り。なでふ物をか歎き侍るべき」といふ。かぐや姫のある處に到りて見れば、なほ物思へるけし

きなり。これを見て、あが佛、何事を思ひ給ふぞ。思すらむこと何事ぞ。といへば、思ふこともなし。物なむ心細く覺ゆる。といへば、翁、月を見給ひそ。これを見給へば、物おほすけしきはあるぞ。といへば、いかでか月を見てはあらむ。とて、なほ月出づれば、出で居つゝ歎き思へり。夕闇には物思はぬけしきなり。月の程になりぬれば、なほ時々打歎き泣きなどす。これを見て、使ふものども、なほ物思す事あるべし。とさゝやけど、親を始めて何事とも知らず。

八月の望ばかりの月に出でゐて、かぐや姫といいたく泣き給ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも、何事ぞ。と問ひ騒ぐ。かぐや姫泣く泣くいふ、さきさきも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過し侍りつるなり。さのみやはとて打出で侍りぬるぞ。おのが身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり。それを、昔の契ありけるにより



てなむ、この世界にはまうて來りける。今は歸るべきになりにつ  
れば、この月のもちに、かの本の國よりむかへに人々まうて來む  
ず。さらずまかりぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春  
より思ひ歎き侍るなり。といひて、いみじう泣く。翁、こはなてふ事  
をのたまふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、菜種の大きき  
おはせしを、わが丈たち並ぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か  
迎へ聞えむ。まさに許さむや。といひて、われこそ死なぬ。とて、泣き  
ののしること、いと堪へ難げなり。かぐや姫のいはく、月の都の人  
にて、父母あり。片時の間とてかの國よりまうて來しかども、かく  
この國には數多の年を経ぬるになむありける。かの國の父母の  
事もおぼえず。こゝには、かく久しく遊び聞えてならひ奉れり。い  
みじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど、おのが心な  
らず罷りなむとする。といひて、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人

人も、年頃ならひて、立別れなむ事を、心ばへなどあてやかに、美し  
かりつることを見ならひて、戀しからむ事の堪へ難く、湯水も飲  
まれず、同じ心に歎かしがりけり。

かゝる程に、宵うち過ぎて子の時ばかりに、家のあたり晝の明  
さにも過ぎて光りたり。望月の明さを十あはせたるばかりにて、  
在る人の毛の孔さへ見ゆる程なり。大空より、人、雲に乗りて降り  
來て、地より五尺ばかりあがりたる程に立ちつらねたり。これを  
見て、内外なる人の心ども、ものに襲はるゝやうにて、相戦はむ心  
もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢を執りたてむとすれど、  
も、手に力もなくなりて、痿えかゞまりたる中に、心さかしきもの、  
念じて射むとすれども、外さまへ往きければ、荒れも戦はで、心地  
たゞしれに、しれて守りあへり。

立てる人どもは、裝束の清らなること物にも似ず、飛ぶ車一つ

具したり。羅蓋さしたり。その中に王とおぼしき人、家に造麻呂ま  
うて來。といふに、猛く思ひつる造麻呂も、物に酔ひたる心地して、  
うつぶしに伏せり。曰く、汝をさなき人、聊かなる功德を翁つくり  
けるによりて、汝が助にとて片時のほどとて降ししを、そこの  
年ごろ、そこの金賜ひて、身を更へたるが如くなりたり。かぐ  
や姫は罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許に暫し  
おはしつるなり。罪の限りはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎  
く、能はぬことなり。はや返し奉れ。といふ。翁答へて申す、かぐや姫  
を養ひ奉ること二十年餘りになりぬ。片時と宣ふに、怪しくなり  
侍りぬ。又他處にかぐや姫と申す人ぞおはしますらむ。といふ。こ  
こにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出しておはします  
まじ。と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車を寄せて、いざ、  
かぐや姫、穢なき處にいかでか久しくおはせむ。といふ。たて籠め

たるところの戸、即ちたゞあきにあきぬ。格子どもも、人はなくし  
てあきぬ。姫抱きてゐたるかぐや姫、外に出でぬ。えとゞむまじけ  
れば、たゞさし仰ぎて泣き居り。

竹取心惑ひて泣き伏せる處に寄りて、かぐや姫いふ、こゝにも、  
心にもあらでかく罷るに、昇らむをだに見送り給へ。といへども、  
何しに悲しきに見送り奉らむ。われをば如何にせよとて、捨てて  
は昇り給ふぞ。具して率ておはせね。と泣きて伏せれば、御心惑ひ  
ぬ。文を書き置きて罷らむ。戀しからむをり取り、取出でて見給へ。  
とて、打泣きて書くことは、この國に生れぬるとならば、歎かせ奉  
らぬ程まで侍るべきを侍らで過ぎ別れぬる事、返す返す本意な  
くこそ覺え侍れ。脱ぎ置く衣を形見と見給へ。月の出でたらむ夜  
は見おこせ給へ。見捨て奉りて罷る空よりも落ちぬべき心地す。  
と書き置く。

竹取物語一  
巻。かぐや姫  
物語、又は竹  
取の翁物語と  
もいふ。作者  
不詳。

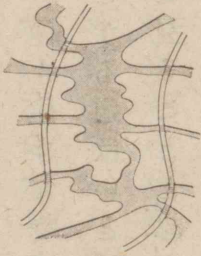
天人の中に持たせたる宮あり、天の羽衣入れり。又あるは不死の薬入れり。一人の天人いふ、壺なる御薬奉れ。穢き處の物聞し召したれば、御心地あしからむものぞ。とて持て寄りたれば、些か嘗め給ひて、少し形見とて、脱ぎ置く衣に包まむとすれば、ある天人包ませず、御衣を取出でて着せむとす。その時にかぐや姫、暫し待て。といひて、衣着つる人は心異になるなり。物一言いひ置くべき事あり。といひて文書く。

やがて天人、天の羽衣着せ奉りつれば、翁をいとほし悲しと思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思も無くなり、にければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して昇りぬ。その後翁、血の涙を流して惑へど、詮なし。あの書き置きし文を讀みて聞かせければ、何せむにや命も惜しからむ。誰が爲にか何事も益もなし。とて、やがて起きも上らず病み臥せり。(竹取物語による)

### 六都鳥

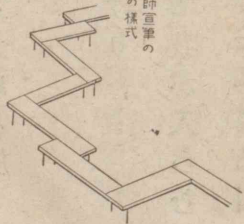
昔男ありけり。その男身を益なきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき國求めにとて往きけり。もとより友とする人一人二人して往きけり。道知れる人もな

古意の八橋の圖



くて惑ひ往きけり。三河の國八橋といふ所に到りぬ。そこを八橋といひけるは、水行く河の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋といひける。その澤の邊の木蔭におり居て、餉くひけり。その澤に杜若いとおもしろく咲きたり。それを見て、或人の曰く、かきつばたといふ五文字を句の上に据ゑて、旅

夏川師重筆の八橋の様式



見て、或人の曰く、かきつばたといふ五文字を句の上に据ゑて、旅

八橋 愛知縣  
碧海郡。今の  
知立町の東。

宇津の山 静岡  
岡縣安倍郡と  
志太郡との  
界。

の心を詠め。といひければよめる。

から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅  
をしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人餉の上に涙落して、ほとびにけり。

往き往きて駿河の國に到りぬ。宇津の山に到りて、我が入らむ  
とする道はいと暗う細きに、葛楓は茂り、物心細く、すゝろなる目  
を見ることと思ふに、修行者逢ひたり。かゝる道にはいかでかお  
はするといふを見れば、見し人なりけり。京にその人の許にとて、  
ふみ書きてつく。

駿河なるうつつの山邊のうつつにもゆめにも人の逢はぬ  
なりけり

富士の山をみれば、五月のつごもりに雪いと白う降りり。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の

ふるらむ

その山は、こゝに譬へば、比叡の山をはたちばかり重ねあげたら  
むほどして、なりは鹽尻のやうになむありける。

なほ往き往きて、武藏の國と下總の國との中に、いと大きな  
川あり。それを隅田川といふ。その川の邊りに群れゐて思ひやれ  
ば、限りなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや舟に  
乗れ。日も暮れぬ。といふに、乗りて渡らむとするに、皆人物わびし  
くて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と足  
とあかき、鳴の大ききなる、水の上に遊びつゝ、魚を喰ふ。京には見  
えぬ鳥なれば、皆人み知らず。渡守に問ひければ、これなむ都鳥。と  
いふを聞きて、

名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありや  
なしやと

比叡の山 京  
都の東北に峙  
ち、山城・近江  
兩國に跨る、  
高さ八百五十  
米。山上に延  
曆寺あり。  
隅田川 角田  
・住田等とも  
書く。東京市  
の東方を流る  
る川。昔は利  
根川之に合流  
し川幅現在よ  
りも廣かりし  
といふ。

惟喬親王 文  
德天皇の第一皇子。詩歌をよくす。貞觀十四年出家、寬平九年（一五五七）薨、御年五十四。水無瀬 今の大阪府三島郡島本村。右のうまのみ 在原業平。阿保親王の第五子。貞觀の頃、右馬頭に任じ、元慶年中、右近衛中將に進み、相模守、美濃守を兼ね。元慶四年（一五四〇）歿、年五十六。交野の渚の院

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

昔、惟喬親王とまをす皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ處に宮ありけり。年毎の櫻の花盛にはその宮になむおはしましける。その時右のうまのみなりける人を常に率ておはしましけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩は懇ろにもせて、酒をのみ飲みつゝ大和歌にかゝれりけり。今狩する交野の渚の院、その櫻ことにおもしろし。その木の下におりて居て、枝を折りて挿頭にさして、上中下みな歌よみけり。うまのみなりける人のよめる。

世の中にたえて櫻のなかりせば春のころはのどけからまし

となむ詠みたりける。また人の歌、

大阪府北河内郡牧野村。

散ればこそいとど櫻はめでたけれうき世になにかひさしかるべき

とて、その木の下は立ちて歸るに、日暮になりぬ。

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで酒飲み物語して、さてあるじの皇子酔ひて入り給ひなむとす。十一日の月も隠れなむとすれば、かのうまのかみのよめる。

あかなくにまだきも月のかくるるか山の端にげて入れずもあらなむ

かくしつゝ、もうで仕うまつりけるを、おもひの外に御髪おろさせ給ひて、小野といふ處に住み給ひけり。正月に拜み奉らむとて、もうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室にまうでて拜み奉るに、つれづれといと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、古のことなど思ひ出でて聞えけり。さて

小野 京都市左京区小野町比叡山の西麓にあり。

も侍ひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければ、え侍はで、  
夕暮に歸るとて、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君を見  
むとは

昔、男ありけり。身はいやしなから、母なむ宮なりける。その母、長  
岡といふ處に住み給ひけり。子は京に宮仕しければ、まうづとし  
けれど、しばしばえまうでず。一人子にさへありければ、いとかな  
しうし給ひけり。

さる程に、師走ばかりに、とみの事とて御文あり。驚きて見れば、  
歌あり。こと言はなくて、

老いぬればさらぬわかれのありといへばいよいよ見ま  
くほしき君かな

となむありける。これを見て馬にも乗りあへず參るとて、打泣き  
て道すがら思ひける。

世の中にさらぬわかれのなくもがな千代もといのる人  
の子のため

昔、月日のゆくをさへなげく男、三月のつごもりに、  
をしめども春のかぎりのけふの日の夕ぐれにさへなり  
にけるかな  
聞き知る人もなしや。

昔、男わづらひて、心ち死ぬべくおほえければ、  
つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思  
はざりしを

紀貫之 歌人。古今集撰者。御書所預。大内記・土佐守・支蕃頭・木工權頭に歴任。元慶九年（一六〇六）歿。年六十五。その年朱雀天皇の承平四年（一五九四）任む館國守の館。土佐の國府に長岡郡にありき。

八日 承平五年正月八日。

### 七 宇多の松原

紀貫之

54

男もすといふ日記といふものを、女もして見むとてするなり。その年の師走の二十日あまり一日の日の、戌の時に門出す。そのよしいさゝかものに書きつく。

ある人、縣あかたの四とせ五とせ果てて、例のことども皆しをへて、解ゆ由などとりて、住む館より出でて、舟に乗るべき處へ渡る。かれこれ知る知らぬ送りす。年ごろよく具しつる人々なむ、別れがたく思ひて、その日しきりにとかくしつゝのゝしるうちに夜更けぬ。八日。さばることありて、なほ同じ所なり。こよひ月は海にぞ入る。是を見て、業平のきみの山の端にげて入れずもあらなむといふ歌なむおぼゆる。もし海べにてよまましかば、波たちさへて入れずもあらなむともよみてましや。今この歌を思ひいでて、或

人のよめりける。

照る月の流るる見れば天の川出づるみなとは海にざりける

とや。

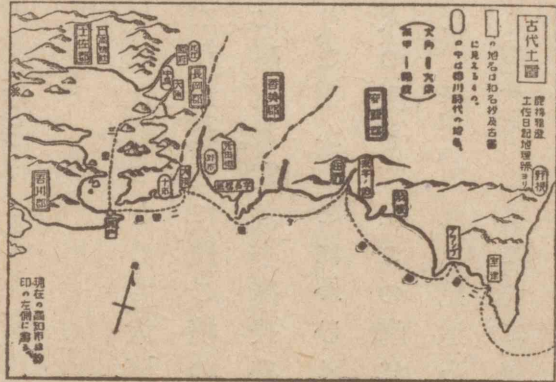
九日のつとめて、大湊より那波の泊を追はむとて漕出でけり。これかれ互に、國の境のうちはとて、見送りに來る人あまたが中に、藤原言實よき・橘季衡・長谷部行政等なむ、御館より出で給ひし日より、こゝかしこにおひくる。この人々ぞ志ある人なりける。この人の深き志はこの海にも劣らざるべし。これより今は漕ぎはなれて行く。これを見送らむとてぞ、この人どもはおひ來ける。かくて漕ぎゆくまにまに、海のほとりに留まれる人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にもいふ事あるべし。舟にも思ふことあれどかひなし。かゝれば、この歌をひとりごとにしてやみぬ。

大湊 高知縣  
長岡郡。  
那波 高知縣  
安藝郡。

55

宇多の松原  
高知縣香美郡  
岸本町宇田。

おもひやる心は海をわたれどもふみしなれば知らず  
やあるらむ



山も海も皆暮れ、夜更けて西東も見えずして、天氣の事楫取りの  
心に任せつ。男もならはぬはいとも心細し。まして女は舟底に頭

かくて宇多の松原をゆき過ぐ。その  
松の敷いくそばく、幾千年経たりと知  
らず。もと毎に浪うちよせ、枝毎に鶴ぞ  
とびかふ。おもしろしと見るに堪へず  
して、舟人のよめる歌。  
みわたせば松のうれ毎にすむ鶴は  
千代のどちとぞおもふべらなる  
とや。この歌は、處を見るにえまさらず。  
かくあるを見つゝ、漕ぎゆくまにまに、

をつきあてて、音をのみぞ泣く。

十六日。けふの夕つかた、京へのぼるついでに見れば、山崎の  
たななる小櫃の繪も、まがりのほらのかたもかはらざりけり。賣  
る人のこゝろをぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂  
にて人あるじしたり。かならずしもあるまじきわざなり。たちて  
行きし時よりは、くる時ぞ人はとかくありける。これにもかへり  
ごとす。

夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出で  
ぬ。桂川、月の明きにぞわたる。人々のいはく、この川飛鳥川にあら  
ねば、淵瀬さらにかはらざりけり」といひて、あるひとのよめる歌、  
ひさかたの月におひたる桂川、そこなる影もかはらざり

けり

又或人のいへる、

十六日 承平  
五年二月、  
山崎 京都府  
乙訓郡大山崎  
村。  
島坂 京都府  
乙訓郡向日町  
の西。

桂川 大堰川  
の下流。  
飛鳥川 奈良  
縣高市郡稻淵  
山に發し、飛  
鳥村を経て北  
流、大和川に  
合す。  
世のなかは何  
か常なる飛鳥  
川昨日の淵ぞ  
今日は瀬とな  
る(古今集)



あまぐものはるかなりつるかつら川袖をひでてもわた  
りぬるかな

又或人よめり。

かつら川わが心にも通はねどおなじ深さにながるべら  
なり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞおほかる。夜ふけて、ところ  
ところも見えず。京に入りたちてうれし。

家にいたりて門に入るに、月あかければいとよくありさま見  
ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれやぶれたる。家を  
あづけたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひと  
つ家のやうなれば、ぞみてあづかれるなり。さるは、たよりごと  
に物も絶えず得させたり。こよひかゝることと、こわだかにも  
もいはせず。いとほつらく見ゆれど、こゝろざしはせむとす。

土佐日記  
卷。紀貫之が  
任地土佐國よ  
り京都に歸る  
時の日記。

さて池めいてくぼまり、水づける所あり。ほとりに松もありき。  
五年六年のうち、千年やすぎにけむ、片枝はなくなりけり。今  
おひたるぞまじれる。おほかたみな荒れにたれば、あはれとぞ人  
人いふ。思ひ出でぬことなく思ひ戀しきがうちに、この家にて生  
れし女子のもろともにかへらねば、いかゞはかなしき。船人も皆  
子いだきてのゝしる。かゝるうちに、なほかなしみに堪へずして、  
ひそかに心しれる人といへりける歌、

うまれしもかへらぬものをわがやどに小松のあるを見  
るがかなしき  
とぞいへる。猶あかずやあらむ、又かくなむ。

見し人を松の千とせに見ましかば遠くかなしきわかれ  
せましや  
忘れがたくくちをしきこと多かれど、えつくさず。(土佐日記)

紫式部 藤原  
爲時の女。藤  
原宜孝に嫁  
す。宜孝の死  
後上東門院に  
仕ふ。  
須磨 兵庫縣  
神戸市の地。  
行平中納言  
平城天皇の皇  
子阿保親王の  
第二子。弟業  
平と共に在原  
の姓を賜は  
る。  
關吹き越ゆる  
「旅人は袂す  
ずしくなりに  
けり關吹きこ  
ゆる須磨の浦  
風」

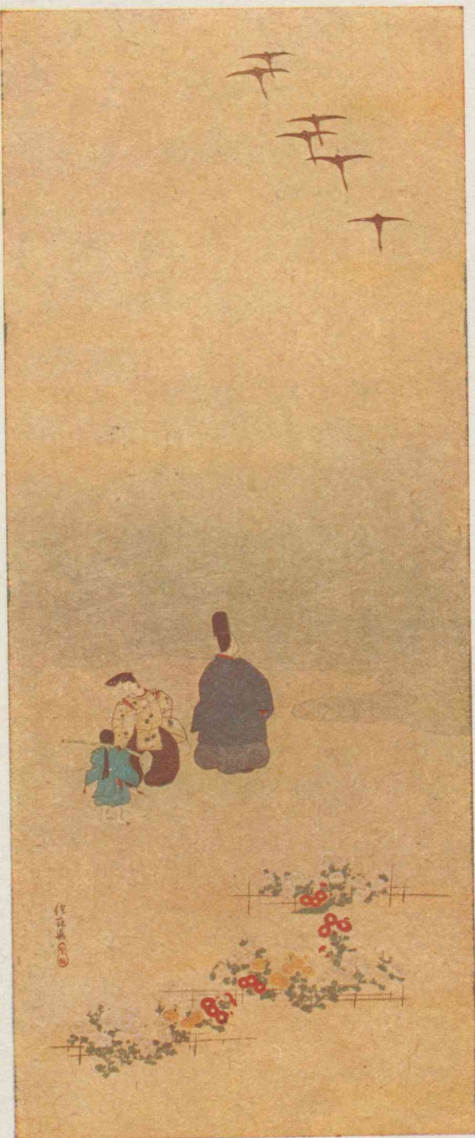
八 須磨の秋

紫 式 部

須磨にはいと心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の  
中納言の「關吹き越ゆる」と言ひけむ浦波、夜々は實にいと近く聞  
えて、又無く哀れなるものはかゝる所の秋なりけり。御前にいと  
人少なにて、打休み渡れるに、一人目を覺して、枕を欹てて四方の  
嵐を聞き給ふに、波たゞ此處もとに立ちくる心地して、涙落つと  
も覺えぬに枕浮く許りになりけり。琴を少し搔鳴らし給へる  
が、我ながらいと妻う聞ゆれば、弾きさし給ひて、

戀ひ侘びて泣く音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹く  
らむ

と謠ひ給へるに、人々驚きて、めでたう覺ゆるに、忍ばれて、あいな  
う起き居つゝ、鼻を忍びやかにかみ渡す。實に如何に思ふらむ、我



須磨 (酒井一筆)

千枝・常則  
當時の繪師  
傳不詳。

が身一つにより、親兄弟片時立ち離れ難く、程に付けつゝ思ふらむ家を別れて、斯く惑ひ合へると思すに、いみじくて、いと斯く思ひ沈む様を、心細しと思ふらむと思せば、晝は何くれと戲言打宣ひ紛らはし、つれづれなる儘に、色々の紙を繼ぎつゝ、手習をし給ひ、珍しき様なる唐の綾などに、様々の繪どもを書きすさび給へる屏風の面どもなど、いとめてたく見所あり。人々の語り聞えし海山の有様を、遙かに思し遣りしを、御目に近くては、實に及ばぬ磯のたゞずまひ、二なく書き集め給へり。此の頃の上手にすめる千枝常則など召して、作繪仕う奉らせばや。と心許ながりあへり。懐かしうめでたき御有様に世の物思ひ忘れて、近う馴れ仕う奉るを嬉しき事にて、四五人ばかりぞつと侍ひける。前裁の花いろいろ咲き亂れ、面白き夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて、佇み給ふ御様のゆゝしう清らなるに、所柄はましてこの世の物と

も見え給はず。白き綾のなよ、かなる紫苑色など奉りて、濃やかなる御直衣、帯しどけ無く打亂れ給へる御様にて、釋迦牟尼佛弟子と名告りて、緩かに讀み給へる、また世に知らず聞ゆ。沖より舟どもの謠ひの、しりて漕ぎ行くなども聞ゆ。仄かに、たゞ小さき鳥の浮かべると見やらるゝも心細げなるに、雁の連ねて鳴く聲、楫の音に紛へるを打眺め給ひて、御涙の零るゝを搔拂ひ給へる御手つき、黒木の御數珠に映え給へるは、故郷戀しき人々の心、皆慰みにけり。

初雁はこひしき人のつらなれや旅のそら飛ぶ聲のかな  
しき  
と宣へば、良清、

かきつらね昔の事ぞおもほゆる雁はその世の友ならねども

良清 播磨守の子、源良清の源氏の從者。  
民部大輔 名は惟光。源氏の從者。

の從者。

前の右近丞 伊豫介の子。源氏の從者。

民部大輔

心から常世を捨てて鳴く雁を雲の餘所にもおもひける

かな

前の右近丞

常世出でて旅の空なる雁がねも列におくれぬ程ぞなく

さむ

「友惑はしては如何に侍らまし。」と言ふ。親の常陸になりて下りしにも誘はれて、參れるなりけり。下には思ひ碎くべかめれど、誇りかにもてなして、つれなき様にしありく。

月のいと花やかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと  
思し出でて、殿上の御遊び戀しく、月の顔のみまもられ給ふ。二千  
里外古人心と誦じ給へる、例の涙も止められず、夜更け侍りぬと  
聞ゆれど、なほ入り給はず。(源氏物語による)

二千里外 三  
五夜中新月色  
二千里外故人  
心。(自樂天)  
源氏物語 五  
十四帖。紫式  
部の作。

清少納言 清  
原元輔の女。  
一條天皇の皇  
后定子に仕  
ふ。

カニ  
コ  
コ  
コ

九 春は曙

清

春は曙。やうやうしろくなりゆく山際すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。  
夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などのふるさへをかし。

秋は夕ぐれ。夕日花やかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥の寝どころへゆくとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風のおと蟲のねなど、いとあはれなり。

冬はつとめて。雪のふりたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらてもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もて渡るもいとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭

櫃火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

にくきもの いそぐ事ある折に、長言するまらうど。あなづらはしき人ならば、のちになどいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。硯に髪の入りてすられたる。又墨の中に石こもりて、きしきしときしみたる。俄にわづらふ人のあるに、驗者もとむるに、例ある所にはあらでほかにある、尋ねありくほどに、待遠に久しきを、辛うじて待ちつけて、喜びながら加持せさするに、この頃物のけに困じにけるにや、居るまゝにすなはちねぶり聲になりたる、いとにくし。火桶炭櫃などに、手の裏うち返し、皺おしのべなどしてあぶり居る者、いつかは若やかなる人などのさはしたりし。老いばみうたてあるものこそ、火桶のはたに足をさへもたげて、物いふまゝにおしすりなどもすらめ。

加  
持  
せ  
さ  
す

さやうの者は、人のもとに来て、居むとする所を、まづ扇して塵拂ひすてて、居もさだまらずひろめきて、狩衣の前しもさまにまくり入れても居るか。かし、かゝる事は、いひがひなき者のきはにやと思へど、少しよろしき者の、式部の大夫・駿河の前司などいひしがさせしなり。

物うらやみし、身のうへなげき、人のうへいひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、いひ知らせぬをば、怨あはじそしり、又わづかに聞きわたる事をば、われもとより知りたる事のやうにこと人にも語りしらべいふも、いとにくし。物聞かむと思ふほどに泣くちご。鳥の集りて飛びちがひ鳴きたる。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細聲に名のりて顔のもとに飛びありく。羽は風さへ身のほどにあるこそ、いとにくけれ。

物語などするに、さし出でてわれひとり、さいまくる者、すべて

さしいでは、わらはも大人おとなも、いとにくし。昔物語などするに、わが知りたりけるは、ふと出でていひくたしなどする、いとにくし。鼠のはしりありく、いとにくし。あからさまに來たる兒ども、わらはべをらうたがりて、をかしき物など取らするにならひて、常に來て居入りて、調度しらべやうち散しぬる、にくし。

うつくしきもの、ふりにかきたるちごの顔。雀の子のねずなきするに、をどりくる。又、へにつけて居すゑたれば、親雀の蟲なども來てくゝむる、いとらうたし。三つばかりなるちごの、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。尼にそぎたるちごの、目に髪のおほひたるを搔きは遣らで、うちかたぶきて物など見る、いとうつくし。たすきがけに

枕草子 異本  
多くして巻數  
一定せず。清  
少納言の隨  
筆。

時平 關白藤  
原基經の子。  
延喜九年(一  
五六九)歿。  
年三十九。  
菅原のおとど  
菅原道眞。是  
善の子。延喜  
三年(一五六  
三)謫地に歿。  
年五十九。

昌泰 醍醐天  
皇の最初の年  
號。その四年  
七月延喜と改  
元(一五六一)

ゆひたる腰のかみの、白うをかしげなるも、見るにうつくし。おほ  
きにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつ  
くし。をかしげなるちごの、あからさまに抱きてうつくしむ程に、  
かいつきて寝入りたるもらうたし。雛ひいなの調度蓮はぢの浮葉のいとち  
ひさきを、池より取りあげて見る。葵あおいのちひさきも、いとうつくし。  
何も何もちひさき物は、いとうつくし。いみじう肥えたるちごの  
二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍あざのうすものなど、衣長きぬ  
くて、たすきあげたるが、這ひ出でくるも、いとうつくし。八つ九つ  
十ばかりなるをのこの、聲をさなげにて文よみたる、いとうつく  
し。鶏にわとりの雛ひなの足高に、白うをかしげに、衣きぬみじかなるさまして、ひよ  
ひよとかしが、ましく鳴きて、人のしりに立ちてありくも、また親  
のもとにつれだちありく、見るもうつくし。かりの子。舍利せりの壺つぼ。瞿  
麥くわまいの花。(枕草子)

### 10 菅公の左遷

醍醐の帝の御時、時平のおとど、左大臣の位にて、年いと若うて  
おはします。菅原のおとどは右大臣の位にておはします。その折、  
みかど御歳いと若くおはします。左右の大臣に、世の政行ふべき  
宣旨下さしめ給へりしに、そのをり、左大臣御年二十八九ばかり  
なり。右大臣の御年五十七八ばかりにや、おはしけむ。共に世の政  
をせしめ給ひし程に、右大臣は、さえ世にすぐれ、めでたくおはし  
まし、御心おきても、殊の外にかしこくおはします。左大臣は御歳  
も若く、さえもことの外に劣り給へるによりて、右大臣の御おほ  
えことの外におはしましたるに、左大臣安からず思したるほど  
に、さるべきにや、おはしけむ。右大臣の御爲によからぬこと出で  
來て、昌泰四年正月二十五日、太宰權帥になし奉りて流され給ふ。

昌泰四年正月二十五日、太宰權帥になし奉りて流され給ふ。  
昌泰四年正月二十五日、太宰權帥になし奉りて流され給ふ。  
昌泰四年正月二十五日、太宰權帥になし奉りて流され給ふ。

この大臣、子ども數多おはせしに、女君たちは婿取し、男君だちは皆程々につけて位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君、女君たち、慕ひ泣きておはしければ、小さきはあへなむと、公も許さしめ給ひしかば、共に率て下り給ひしぞかし。帝の御掟極めて生憎におはしませば、この御子どもを、同じかたにだに遣はさざりけり。かたがたにいと悲しく思し召して、御前の梅の花を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春な  
わすれそ

又、亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れ行くわれは水屑になりはてぬ君しがらみとなりて  
とどめよ

なき事によりて、かく罪せられ給ふを、からく思し歎きて、やが

上りての院  
ゆかりの帝  
亭子の帝  
宇  
多天皇

山崎 今の京  
都府乙訓郡大  
山崎村山崎

て山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆくゆくもかくるるまでにかへりみ  
しはや

また播磨の國におはしましつきて、明石のうまやといふ處に、御宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、  
作らせ給へる詩いと哀し。

驛長無驚時、變改 一榮一落是春秋

かくて筑紫におはしまし着きて、あはれに心細く思さるゝ夕べ、遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶりなげきよりこそ燃え  
はじめけれ

また、雲の浮きて漂ふを御覽じても、

明石 兵庫縣  
明石市

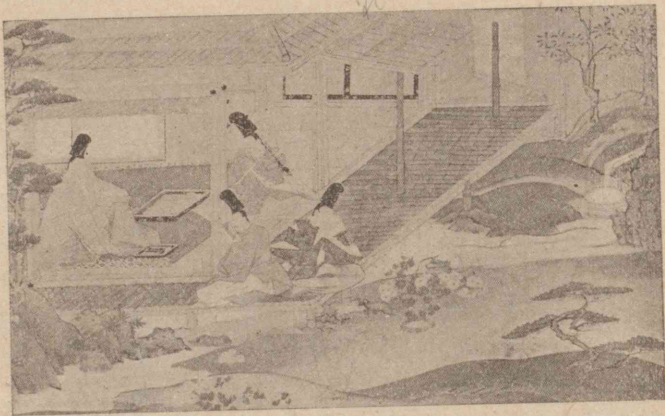


大貳の居所  
 太宰府の官  
 宅。時の太宰  
 大貳は藤原興  
 箱。  
 観音寺 正し  
 くは觀世音  
 寺。太宰府の  
 東二百餘米の  
 所にありし眞  
 言宗の寺。夙  
 く荒廢に歸す  
 文集 白氏文

山わかれ飛びゆく雲の歸り來るかけ見るときぞなほた  
 のまるる  
 さりとともと世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜  
 海ならずたたへる水の底までもきよきこころは月ぞて  
 らさむ  
 これ、いとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそはてらし  
 給はめとこそはあめれ。

筑紫におはします所の御門もかためておはします。大貳の居  
 所は遙かなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやら  
 れけるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をき  
 こしめして、作らせ給へる詩ぞかし。  
 都府樓、纒看瓦色、觀音寺、只聽鐘聲  
 これは、文集の白居易が「遺愛寺、鐘、欬、枕、聽、香、爐、峯、雪、撥、簾、看」とい

集。七十一卷。  
 白居易の詩文  
 集。  
 白居易 字は  
 樂天、唐の詩  
 人。官、刑部尙  
 書に至る。



(卷繪起緣神天崎松)圖の居謫公菅

ふ詩にもまさまに作らしめ給へ  
 りとこそ、昔の博士どもは申しけれ。  
 またかの筑紫にて九月十日、菊の  
 花を御覽じけるついでに、まだ京に  
 おはしましたし時、九月の今宵、内裏に  
 て菊の宴ありしに、この大臣の作ら  
 しめ給へりける詩を、御門かしこく  
 感じ給ひて、御衣を給へりしを、筑紫  
 にもて下らしめ給へりければ、御覽  
 ずるに、いとゞその折思しめしいて  
 て、作らせ給ひける。

去年、今夜侍、清涼  
 恩賜、御衣、今在此

秋思、詩篇、獨斷、腸  
 捧持、毎日、拜餘、香

後集 菅家後集 一卷。菅家文章の續篇。

北野の宮 官幣中社。京都の西北隅北野にあり。安樂寺 福岡縣筑紫郡太宰府町。大鏡 八卷。世繼物語といふ。文徳天皇より後一條天皇に至る百七十餘年間の歴史物語。

法成寺 京都の東北隅、京極土御門に道長の建てし寺。攝政殿 藤原頼通。道長の長子、世に宇治關白と稱す。承保元年(一七三三)歿、年八十三。殿の御前 藤原道長。

この詩いと畏く、人々感じ申されき。このことども、只散り散りなるにもあらず、かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを、書きて一卷とせしめ給ひて、後集と名づけられたり。また折々の歌を書きおかせ給へりける、自ら世に散りきこえしなり。

また雨の降る日、うちながめ給ひて、  
あめの下、かわける程のなければ、や着てしぬれぎぬひる  
よしもなき

やがて、かしこにてうせ給へり。

夜の中に、この北野に、これらの松をおほし給ひて、渡り住み給ふをこそは、唯今の北野の宮と申して、あら入神におはしますめれば、おほやけも行幸せしめ給ふ。いとかしこくあがめ奉り給ふめり。筑紫のおはしましたしところは安樂寺といひて、おほやけより別當所司などなさせ給ひて、いとやむごとなし。(大鏡)

### 二 法成寺の造營

今は御心地例さまになりはてさせ給ひぬれば、御堂の事思し急がせ給ふ。攝政殿、國々まで、さるべき公事をばさるものにて、まづこの御堂のことを先に仕うまつるべき。仰言のたまふ。殿の御前も、この度生きたるは別ことならず、この願の協ふべきなめり。とのたまはせて、他事なくたゞ御堂におはします。

方四町をこめて、大垣にして瓦葺きたり。さまざまに思しおきて急がせ給へば、夜の明るるも心もとなく、日の暮るゝも口惜しうおぼされて、夜もすがら、山を疊むべきやう、池を掘るべきやう、木を栽ゑなべさせ、さるべき御堂御堂、方々さまざま造りつけ給へり。御佛はなべての様に、やはおはします。丈六の金色の佛を數も知らず造りなべ、そなたをば北南と馬道をあけて、道をと

法皇の御心  
心障

御堂の御心障

御堂の御心障

とのへ造らせ給ひて、廊渡殿かず多く作らせなむと思し給ふに、  
鶏の鳴くも久しくおぼされ、宵曉の御行も懈らず、やすきいも大  
殿ごもらず、たゞこの御堂のことのみ深く御心にしませ給へり。  
日々に多くの人々参り罷て立ちこむ。さるべき殿ばらを始め  
奉りて、宮々の御封御莊どもより、一日に五六百人、千人の夫ども  
を奉るにも、人の數多かることをば賢きことに思したち、國々の  
守ども、地子官物は遅なはれども、只今はこの御堂の夫役材木檜  
皮瓦など多く参らすることを、我も我もと競ひ仕うまつる。大方  
近きも遠きも参りこみて、品々方々、あたりあたりに仕うまつる。  
或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかり並  
み居て仕うまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の  
上を見上ぐれば、工匠ども二三百人のほり居て、大きな木ども  
には太き綱をつけて、聲を合はせてえさまさと引き上げさわぐ。

御堂の御心障

大津 滋賀縣  
大津市  
梅津 京都府  
葛野郡梅津  
村。今京都市  
右京區に屬す。  
須達長者 釋  
迦在世當時の  
舍衛國の富

御堂の内を見れば、佛の御座造りかゞやかす。板敷を見れば、木賊  
椋の葉などして、四五十人手ごとに並み居て磨き拭ふ。檜皮葺壁  
塗瓦作なども數をつくしたり。又年老いたる翁などの、三尺ばか  
りの石を心に任せて切りとゞのふるもあり。池を掘るとて四五  
百人おりたち、山を疊むとて五六百人のほり立ち、又大路の方を  
見れば、力車にえもいはぬ大木どもに綱をつけて叫びのゝしり  
引きもてのぼる。鴨河の方を見れば、筏といふものに樽材木を入  
れて、棹さして心地よげに歌ひのゝしりてもてのぼる。大津  
梅津の心地するも、西は東といふことはこれなりけりと見ゆ。磐  
石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來れど沈まず。  
すべていろいろ様々いひ盡くし、まねびやるべき方なし。かの須  
達長者の祇園精舎造りけむもかくやありけむと見ゆるを、冬の  
室、夏の風、各ことごととなり。

者、波斯匿王の大臣。祇園精舎須達長者が建てて佛に奉りし中印度の寺。

長谷寺

奈良縣磯城郡初瀬町にあり。天武・聖武二天皇の御願によりて建てられし寺。

天王寺 聖徳太子が大阪に建てられし四天王寺。

榮華物語 四十卷。主として藤原氏の榮華を記せし歴史物語。作者につきては諸説一定せず。

尾上柴舟 名は八郎。文學博士。東京女子高等師範學校教授。古今和歌集二十卷。醍醐天皇の延喜五年四月、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑等勅を奉じて撰す。

かゝる御勢にそへて、入道せさせ給ひて後は、いと勝らせ給へりと見えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御有様かなと、近う見奉る人はたふとみ、遠う見奉る人は遙かに拜み参らす。今はこの御堂のあたりの木草ともならむと思へる人のみ多かり。そなたさまに赴けば、海の浪も柔かに立ちて、この御堂の物をもて運ばせ、河も水澄みて、快く浮かべもて参ると見ゆ。猶なべてこの世の事とは見えさせ給はず。まづは、先年に長谷寺にある僧の、御祈禱をいみじうして寐たりける夢に、大きにいかめしき男の出で来て、何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の佛法興隆の爲に生れ給へるなり。」とぞ見えさせ給ひける。又天王寺の聖徳太子の御日記には、「王城より東に佛法弘めむ人を我と知れ。」とこそは書きおかせ給ふなれ。いづれにてもおろかならぬ御事なり。(榮華物語)

古今より新古今へ

尾上柴舟

平安朝時代の歌風を完成したのは延喜の頃で、古今和歌集を以て代表せらるべき貫之・躬恒・友則・忠岑等の活躍した時代である。その歌風は舊套を脱し、新旗幟を樹立したもので、技巧と情緒とを巧みに結合した抒情詩である。こゝに形式も思想の範圍も大抵一定して、以後はこの外に出るものはなかつたのである。その後、寛弘の頃に至つて漸く新傾向が起り、従來の抒情詩的傾向に敘景的趣味を加へ、更に又排技巧の傾向を生じたが、なほ前期の權威は盛んなもので、容易にその範疇を脱することが出来なかつた。とはいへ、新進の氣は到底制せられるものではなく、漸次に古典的から現代的に移らうとして、こゝに一種の新派を生じた。金葉和歌集を撰んだ俊賴がその中心である。この新派は、

尾上柴舟 名は八郎。文學博士。東京女子高等師範學校教授。古今和歌集二十卷。醍醐天皇の延喜五年四月、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑等勅を奉じて撰す。

十卷。源俊賴が白河法皇の院宣を受けて撰進したるもの。

俊賴 源俊賴。源河・鳥羽・崇徳の三天皇に仕へ、左近衛少將兼木工權頭左京大夫たり。歌學上の著に無名抄、俊賴口傳等あり。

基俊 藤原基俊。官は左衛門佐に至る。歌學上の著に祝日抄あり。顯輔 藤原顯輔。皇后宮亮に至る。崇徳上皇の詔を奉じて詞花和歌集を撰す。

俊成 藤原俊成。後白河天皇の勅を奉じ

舊套中にありながら、俗語をも用ひて一種の新味を加へたものであるが、古典的な反對黨は基俊を代表としてこれに抗爭した。この間に又折衷派とも云ふべき顯輔の一派も生れて、歌界は餘程複雑になつた。併し要するに過去を理想とするものと現代を主とするものとの争であつた。亂が極まれば英雄が出る。時代は遂に俊成を生んだ。俊成は基俊に學び、しかも俊賴を慕ひ、又顯輔の傾向をも考へたのである。俊成の撰進した千載和歌集には、この三派併合の結果に成つた所の典雅があり、清新があり、殊に洗練せられた趣味の多い語句に富んでゐた。

この傾向はやがて定家が覇を唱へた鎌倉時代の初期に於て、技巧的な含蓄の深い歌となつて現れるに至つた。これを選集したのが新古今和歌集である。政權は既に武士に歸したとはいへ、それが爲に堂上は閑暇であつたので、公卿を中心とした歌道は

て千載和歌集を撰す。元久元年(一八六四)歿、年九十一。

千載和歌集 二十卷。文治三年九月、藤原俊成撰進す。定家・藤原定家。俊成の子。新古今和歌集・新勅撰和歌集の撰者。仁治二年(一九〇一)歿、年八十。

新古今和歌集 二十卷。建仁元年十一月後鳥羽上皇の詔を承けて、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經・僧寂蓮等が撰進せるもの。

愈その粹を發揮し、こゝに新古今和歌集は古今を綜合し千載に光被するの意氣を以て撰ばれ、歌道の發達を極めたのみならず、多大の影響を後世にまで及ぼしたのである。從來歌人に經典と崇められてゐた古今和歌集に新の字を冠せしめたのは、その撰者等の意氣を窺ふに足るものではないか。

平安朝時代ほど季節の變化を歌の題材とした時は無い。これは畢竟當時の歌人である公卿たちの生活に原因するのである。これらの歌人は殆ど都以外に足を踏出すことがなく、宮仕と遊樂と物詣とのみに日を過し月を送つて居たのであるから、季節とそれに伴ふ變化とが大事件となつて目に映つたのである。その季節に應じて咲き、散り、啼き、歌ふ花木、禽鳥がまた驚喜と悲嘆との好材料であつた。春の詩材としては鶯、梅、櫻を主とし、若菜、霞、柳、藤、山吹などの優美纖麗なものが選ばれた。秋には風の音、蟲

の聲月の色露の光星女郎花紅葉菊などの哀感を寄せるのに都合のよい繊細巧麗なものが主となつた。鐵を溶かさんばかりの暑さ、篠を束ぬる夕立などは、當時の人の詩材とするには餘りに峻烈であつた。冬は引籠りの候で、見るものの少い時節である。杜宇と雪とが夏と冬とに於て詩人の感興を惹いた殆ど全部であつたのである。

勿論季節に拘らぬものもあるが、概して前代にあつた所の材料の中で繊細なもののみを取り、殊に美しい麗しい方面を取つて詠じたのであるから、題材の範圍は非常に縮小し、貧弱とならざるを得なかつたが、この題材の範圍はその後永く斯道に嚴守せられたのであつた。併しその一つ一つの觀察に於ては、隨分微に入り細を穿つてゐた。

同じ道を何處までも進む。これに倦怠せぬ人は無いであらう。

必ず何か違つたものを求めて止まない。平安末期には既に自然の美の眞解と、漢詩の影響と、單調を厭ふ心と、繪畫の影響とが錯綜交雜して多くの客觀詩を出すに至つたのである。自然の美を認めてそれに深く思ひ入る。こゝに感ずるものは自分の身の幸不幸ではない、窮通ではない。奥の分らぬ味はひである。如何に名づくべきか、はた如何にして極むべきか、自分には分らない。たゞ語の幽趣微韻によつてのみその幾分を表はし得るのである。その情態を直寫してこゝに客觀詩は生じ、それに對する感想を披瀝してこゝに主觀詩は生じたのである。

鎌倉時代の繪畫は平安朝時代のそれに比して、單に山川草木を寫すのみではなく、その中に含まれてゐるものを寫す所にまで進んでゐた。これに對しこれに接して居れば、その得る所のものは決して淺薄な感想ではない。必ず深い何ものかがある。當時

の繪はその形體・傳彩から客觀詩を起したと共に、幽遠の趣致をも起したのである。

更にこれらの他に當時の人心に深く浸染したものは、榮枯盛衰が眼前に車輪の如く迅速に廻轉したことである。盛者必衰諸行無常が事實として現示せられた當時の人々は、また別種の感觸を起さざるを得ない。幾種の新宗教が唱道せられ、多くの渴仰者が忽ちに出來たことは、當時の人々が宗教希求の念の如何に熱烈であつたかを説明してゐる。その心を心とした當時の歌は、たゞ表面だけ宗教者めかして、無常らしいことを云ひ、悟了したらしいことを云ふ歌とは自ら選を異にせねばならぬ。その全體を通じて、美しい中に暗い趣深い味はひの見えるのは自然である。乃ち幽玄の趣致は又この佛教の弘通よりも現れたのである。而してこの幽玄の趣致は源を人の思想と感情との深遠な處

六歌仙 在原  
業平・僧正通  
昭・喜撰法師・  
大伴黑主・文  
屋康秀・小野  
小町をいふ。

に發するのであるから、その深遠の度が進むと共に普通の辭句では發表し得ないこととなる。乃ち從來の發表の仕方では靴を隔てて痒きを搔くが如く、到底十分に述べ盡くすことが出來なくなるのである。こゝに於て從來の制約を破り、更に新しい表現法を用ひて、極めて大膽に自己の思想感情を發表するものが現れた。此等の歌人の態度こそ實に敬服すべきものである。

平安朝時代に新旗幟を樹立した功に於て、典型を千載に残した功に於て、吾人は古今和歌集を尊び、その撰者や六歌仙を始め當時の歌人等を重んずる。それと共に又、紛亂の後を受けてこれを平定し、更に新しい典型を作り、歌をして至上の發達をなさしめた意氣に於て、新古今和歌集を崇め、その撰者を始め當時の歌人を尊敬して止まないものである。(古今と新古今による)

光頼 藤原顯頼の子。權大納言正二位に進み、剃髮して光然と稱す。高倉天皇の承安三年(一八三三)歿、年五十。同じき十九日二條天皇平治元年(一一八一)十二月。信頼 藤原忠隆の子。光頼の姪。後白河上皇の寵を蒙る。平治の亂、事敗れて斬らる。年二十七。

紫宸殿 大内

一三 光頼卿參内

さる程に、内裏には同じき十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、この程は信頼卿の振舞過分なりとて、不參にておはしましけるが、參内して承らん。とて、殊にあざやかに束帶ひき繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、傳子の桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雑色の装束にいてたゞせ、自然の事もあらば、人手にかくな、汝が手にかけて、光頼が首をば急ぎ取れ。とて、御身近く置き、その外清げなる雑色四五人めし具して、大軍陣を張りて、所々門々を堅く守護しけるを事ともせず、前高らかに追はせて入り給へば、兵どもも大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通し奉る。

紫宸殿の後を経て殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、そ

裏の正殿、一名南殿。殿上 清涼殿の殿上間。長方 藤原顯長の子。光頼と従兄弟。



武官東の帯の圖

の座の上薦たち皆下にぞ着かれたる。光頼卿、こは不思議のことかな。人はいかに振舞ふとも、あれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には着くまじきものを。と思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそ、世にしどけなう見え候へ。と色代して、しづしづと歩み、信頼卿の上にむずと着き給ふ。光頼卿は信頼卿の爲には母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿あなあさましと見給ふに、光





北にある布障子。  
惟方 光頼の弟。初め信頼に黨せしも、後、經宗と計り二條天皇を奉じて大内を脱す。  
先日 十二月十四日。  
少納言入道 藤原通憲。入道信西。平治の亂に信頼の命によりて斬首せらる。  
神樂岡 京都市上京區吉田町の東。  
勸修寺内大臣 藤原高藤。  
三條右大臣 藤原定方。  
延喜 醍醐天皇の御代の年號(一五六一—一五八三)。

めたる事もなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてある。傳へ承る如きは、その人皆當時の有職、然るべき人どもなり。その内に入らんこと甚だ面目なるべし。さても、先日右衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢の爲に神樂岡へ向はれることはいかに。以ての外然るべからざる振舞かな。近衛大將檢非違使別當は他に殊なる重職なり。その職に居ながら、人の車の尻に乗り給ふ事、先蹤もいまだ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならず。」と宣へば、別當、それは天氣にて候ひしかば。」とて赤面せられたり。

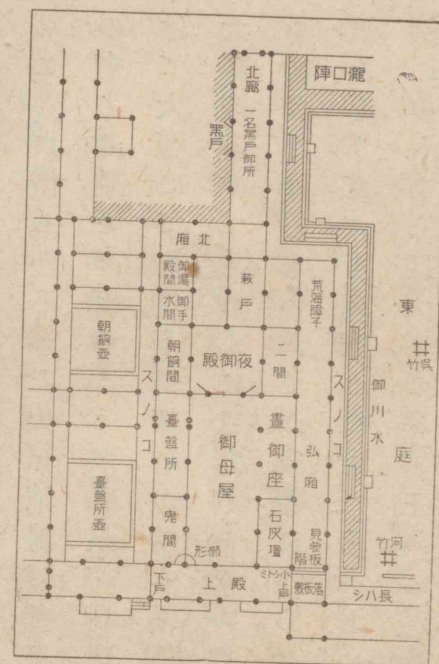
光頼卿重ねて、こはいかに勅諭なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖、勸修寺内大臣三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣又十一代、承り行ふことは、皆これ徳政なり、一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄には

清盛 十二月四日熊野參詣に出發。  
切目 和歌山縣日高郡切目村。  
主上 二條天皇。  
上皇 後白河上皇。  
黒戸御所 清涼殿の北方にあり。  
一本御書所 建春門内、侍從所の南にあり。世間よりの獻本を納められしところ。  
内侍所 神鏡

あらざれども、偏に有道の臣に伴なひて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝ程のことはなかりしに、御邊始めて暴惡の臣にかたらはれて、累家の佳名を失はんこと、口惜しかるべし。大貳清盛は、熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳せのぼるなるが、和泉紀伊伊賀伊勢の家人等待ちうけて大勢にてあなる。信頼卿が語らふ所の兵若干ならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をやめぐらすべき。もし又火などを懸けなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかに況や、君臣ともに自然の事もあらば天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべし。右衛門督は御邊に大小事を申し合はするとこそ聞ゆれ。相構へて相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに、思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。黒戸御所に。上皇は。一本御書

温明殿 紫宸殿の東にあり。  
 夜の御殿 清涼殿の中央にあり。  
 朝餉 主上の御食事の所。  
 櫛形の穴 清涼殿の御母屋の南壁と鬼の間との中間の柱を挟みて設けられたる櫛形をなせる窓。

所に。内侍所は。温明殿に。劍璽は何處に。夜の御殿に。と左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。  
 又朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。と



宣へば、それには右衛門督住み候へば、その方さまの女房などぞかげろひ候らん。と申されければ、光頼卿聞きもあへず、世の中は今ばかりござんなれ。

主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸御所に遷しまるらせたり。未代なれども、さすが日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神正八幡宮は王法をいかに守り給ひぬるぞ、異

許由 箕山の隠士。帝堯の國を譲らんといへるを聞き、耳汚れたりとて、潁川の水に耳を洗ひたりといふ平治物語 三卷。作者不詳。

國にはかやうの例ありと雖も、我が朝には未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。とて、のろのろしげに憚る所なく口説き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よに妻まじげにて立たれたれども、かつは悲しくて、われいかなる宿業に依つてかゝる世に生れ合ひ、憂きことをのみ見聞くらん昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼卿の座上に着かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出て給ひける。(平治物語)

黒戸は小松御門位につかせ給うて、昔たゞ人におはしましし時、まさな事せさせ給ひしを忘れ給はで、常にいとなませ給ひける間なり。御薪にすゝけたれば、黒戸といふとぞ。

(徒然草)

法皇 後白河  
院の御舅に當  
らせらる。

文治二年(一  
八四六)後鳥  
羽天皇の御  
代。

建禮門院 高  
倉天皇の中  
宮。平清盛の  
女徳子。安徳  
天皇の御生  
母。

大原 京都府  
愛宕郡の山村  
北祭 賀茂の  
祭。四月の中  
の酉の日。今  
は五月十五日

清原深養父  
清少納言の曾  
祖父。歌人。

補陀落寺 京  
都府愛宕郡靜  
原にありし  
寺。

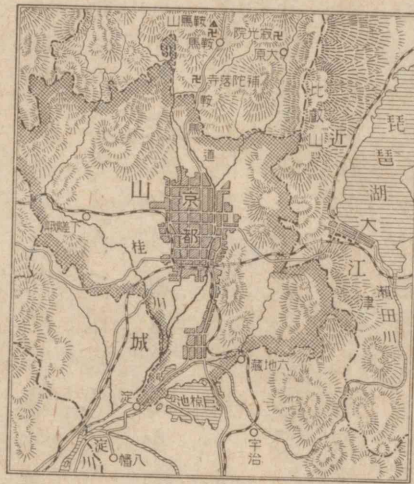
小野皇太后  
關白藤原教道

の女歡子。後  
冷泉帝の皇后  
出家して小野  
に住まる。

寂光院 大原  
村大字草生。  
天台宗延暦寺  
の別所。現在  
尼寺なり。  
變破れて 出  
所不明。

### 一四 大原御幸

かゝりし程に、法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の開居の御住居御覽ぜまほしう思し召されけれども、二月、彌生のほ



京 都 附 近 圖

どは嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつらゝもうち解けず。かくて春過ぎ夏立つて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人人には公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬通りの御幸なりければ、かの清原深養父が補陀落寺、小野皇太后宮の舊跡叡

覽あつて、それより御輿にぞ召されける。遠山にかゝる白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまる。頃は卯月二十日あまりの事なれば、夏草の茂みが末をわけ入らせたまふに、始めたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたる程も思し召し知られてあはれなり。

西の山の麓に一字の御堂あり。すなはち寂光院これなり。ふるう造りなせる泉水木立よしあるさまの處なり。藁破れては霧不斷の香を焚き、扉落ちては月常住の燈を挑ぐ。ともかやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉交りの遅櫻、はつ花よりも珍しく、岸の山吹さき亂れ、八重立つ雲のたえ間より、山郭公の一聲も、君のみゆきを待ちがほなり。法皇これを叡覽あつて、かうぞあそばされける。

飄簾屢空  
 飄簾屢空、草  
 滋、顏淵之巷、  
 藜藿深鎖、雨  
 濕、原憲之樞、  
 (橋直幹の申  
 文)

池水にみぎはの櫻ちりしきて波の花こそさかりなり  
 けれ

舊りにける岩の絶間より落ち来る水の音さへゆゑびよしあ  
 る處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪にかくとも筆も及び難し。さて女  
 院の御庵室を窺覽あるに、軒には葛朝顔はひかゝり、しのお交り  
 の忘れ草、飄簾屢空し、草顏淵が巷にしげく、藜藿深く鎖せり、雨原  
 憲が樞を濕す。ともいひつべし。杉の葺き目もまばらにて、時雨も  
 霜もおく露も洩る月影に争ひて、たまるべしとも見えざりけり。  
 後は山前は野べいさゝ、小笹に風さわぎ、世に立たぬ身のならひ  
 とて、うきふし茂き竹柱、都の方の言づては、間遠に結へるませ垣  
 や、わづかに言問ふものとは、峯に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の  
 斧の音、これらが音づれならては、まさきのかづら、青つゝら、くる  
 人稀なる處なり。

五戒 一に不  
 殺生、二に不  
 偷盜、三に不  
 邪淫、四に不  
 妄語、五に不  
 飲酒。  
 十善 不殺生、  
 不偷盜、不邪  
 淫、不妄語、不  
 兩舌、不惡口  
 不綺語、不貪  
 慾、不瞋恚、不  
 邪見。  
 捨身の行 捨  
 身、他生必生、  
 淨國。  
 (觀無量壽經)

法皇、人やある、人やある。と召されけれども、御いらへ申すもの  
 もなし。やゝあつて老い衰へたる尼一人参りたり。女院はいづく  
 へ御幸なりぬるぞ。と仰せければ、この上の山へ、花つみに入らせ  
 給ひて候。と申す。さこそ世を厭ふ御習とはいひながら、さやうの  
 事に仕へ奉る人もなきにや、御痛はしうこそ。と仰せければ、この  
 尼申しけるは、五戒十善の御果報盡きさせ給ふによつて、今かゝ  
 る御目を御覽ぜられ候にこそ、捨身の行に、なじかは御身を惜し  
 ませ給ひ候べき。とぞ申しける。この尼の有様を御覽ずれば、身に  
 は絹布のわきも見えぬ物を結びあつめてぞ着たりける。あの有  
 様にて、もかやうのことを申す不思議さよとおぼしめして、抑、汝  
 は如何なる者ぞ。と仰せければ、この尼さめざめと泣いて、しばし  
 は御返事にも及ばず。やゝあつて涙をおさへて、申すにつけて、憚  
 り覚え候へども、故少納言入道信西が女、阿波の内侍と申すもの

故少納言 俗名藤原通憲、前課參照。紀伊の二位紀伊守藤原範元の女朝子。藤原通憲の妻後白河法皇の御乳母。

來迎の三尊 阿彌陀如來、觀世音菩薩、勢至菩薩。中尊 此に於ては阿彌陀如來。

普賢 菩薩の名。諸佛の理徳を表はす。善導和尚 唐代の名僧。他力信仰の確立者。八軸の妙文 法華經八卷。九帖の御書 善導大師の著なる觀經疏四帖、淨土法事讚二卷、觀念法門一卷、往生禮讚一卷、般舟讚一卷。これを含めて九帖の書といひ、又五部九卷といふ。

鳥飼の中納言 藤原盛國の子

にて候なり。母は紀伊の二位、さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せむ方なうこそ候へ。とて、袖を顔に押當てて忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇、げにも汝は阿波の内侍にてあるござんなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、只夢とのみこそ思し召せ。とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、理にて申しけりとぞ、各、感じあはれける。

さてかなたこなたを觀覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかかりつゝ、その小田の水越えて、鳴立つひまも見えわかず。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子をひきあけて觀覽あるに、一間には來迎の三尊在します。中尊の御手には五色の絲をかけられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚並に先帝の御影を

かけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を觀覽あるに、御寢所とおほしく、竹の御竿に麻の御衣紙の衾など懸けられたり。さしも本朝漢土の妙なる類、數をつくしし綾羅錦繡の装も、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、まのあたり見奉りしことども、今のやうに覺えて、皆袖をぞ絞られける。や、あつて、上の山より濃き墨染の衣着たりける。尼二人、岩の崖路を傳ひつゝ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇、あれはいかなる者ぞ。と仰せければ、老尼涙をおさへて、花がたみ臂にかけ、岩つつじ取具して持たせ給ひて候は、女院にて渡らせ給ひ候。爪木に蕨折添へて持ちたるは、鳥飼の中納言維實が女、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言の佐の局。と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させたまへば、供奉の公卿殿上人も皆袖をぞ

大納言の佐の  
局 大納言邦  
綱の女、平重  
衡の室、輔子。

濡らされける。女院は、世を厭ふ御習といひながら、今かゝる有様  
を見えまゐらせむずらむ恥かしさよ。消えも失せばやと思し召  
せどもかひぞなき。宵々ごとの鬨伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、  
曉起きの袖の上、山路の露もしげくして、しほりやかねさせ給ひ  
けむ山へも返らせ給はず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あ  
ぎ北て立たせましましたる處に、内侍の尼参りつゝ、花筐をばた  
まはりけり。

世を厭ふ御習、何か苦しう候べき。はやや御見参ありて、還御  
なし参らせ候へ。と申されければ、女院御涙をおさへて御庵室に  
入らせおはします。一念の窓の前には、攝取の光明を期し、十念の  
柴の樞には、聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思ひの外の御幸かな。  
とて御見参ありけり。

や、あつて女院涙をおさへて申させ給ひけるは、今かゝる身

平相國 太政  
大臣平清盛。

佛名 佛名  
會。往時禁中  
及び寺院に  
て、十二月十  
九日より三日  
間、三世諸佛  
の名號を稱へ  
て罪業を懺悔  
せし法會。

になり候ことは、一旦の歎申すに及び候はねども、後生菩提のた  
めには悦とおぼえ候なり。いつの世にも忘れ難きは先帝の御面  
影、忘れむとすれども忘れられず、忍ばむとすれども忍ばれず。たゞ  
恩愛の道ほど悲しかりけることはなし。されば彼の御菩提のた  
めに、朝夕のつとめ怠ること候はず。これも然るべき善知識とお  
ぼえ候。と申させ給へば、法皇仰せなりけるは、人間のあだなる習、  
今更驚くべきには候はねども、御有様見参らせ候に、せん方なう  
こそ候へ。とて御涙せきあへさせ給はず。

女院重ねて申させ給ひけるは、我が身平相國の女として、天子  
の國母となりしかば、一天四海は皆掌のまゝなりき。されば拜禮  
の春のはじめより、色々の衣がへ、佛名の年の暮、攝籙以下の大  
臣、公卿にもてなされし有様は、六慾四禪の雲の上にて、八萬の諸天  
に圍繞せられ候らむやうに、百官悉く仰がぬものや候ひし。清涼

六慾・四禪  
佛教にいふ慾  
界中の六慾天  
と色界中の四  
禪天。共に人  
間以上の境界  
なり。  
南殿 紫宸殿  
の別稱。

蓬萊 支那傳  
説にて渤海中  
にありといふ  
仙山。  
壽永 安徳天  
皇の御代の年  
號（一八四二  
—一八四五）  
木曾義仲 源  
義賢の子。頼  
朝の從弟。  
須磨 兵庫縣  
神戸市。  
明石 兵庫縣  
明石市。

紫宸の床の上、玉の簾の内にもてなされ、春は南殿の櫻に心をとめて日を暮し、九夏三伏の暑き日は泉をむすびて心を慰め、秋は雲の上の月を獨り見む事を許されず、玄冬素雪の寒き夜は裾を重ねて暖かにす。長生不老の術を願ひ、蓬萊に不死の藥を尋ねても、たゞ久しからむ事を思へり。明けても暮れても、樂しみ榮え候ひしこと、天上の果報もこれには過ぎじとこそ覺え候ひしか。さても壽永の秋の初、木曾義仲とかやに襲はれて、一門の人々、住み馴れし都をば雲居のよそに顧みて、故郷を焼野が原とうち詠め、古は名をのみ聞きし須磨より明石の浦づたひ、さすがに哀に覺えて、晝は漫々たる大海に浪路を分けて袖をぬらし、夜は洲崎の千鳥と共に泣きあかす。浦々、島々よしある處を見しかども、故郷の事をば忘れず。

さても筑前の國太宰府とかやに着いて、少し心を延べしかば、

維義 緒方三  
郎維義。大分  
縣大野郡緒方  
村に宅趾あ  
り。

清經 平重盛  
の三男。壽永  
二年福岡縣企  
救郡柳が浦に  
て海に投じて  
死す。

鎮西 筑紫の  
稱。  
饑鬼道 饑鬼  
の世界。饑鬼  
とは常に饑渴  
の苦を受くる  
一類の鬼。  
室山 兵庫縣  
加東郡市場村  
の南、加古川  
に臨む山。  
水島 岡山縣  
淺口郡柏崎村  
の海邊。

維義とかやに九國の内をも追出され、山野廣しと雖も立寄り休むべき處もなし。同じ秋の暮にもなりしかば、昔は九重の雲の上にて見し月を、八重の潮路に詠めつゝ、明し暮し候ひし程に、神無月の頃ほひ、清經の中將が、都をば源氏がために攻落され、鎮西をば維義がために追出さる。網にかゝれる魚の如し、いづくへ行かば遁るべきかは、ながらへ果つべき身にもあらず。とて海に沈み候ひき。これこそ憂き事の始にて候ひしか。波の上にて日を暮し、船の中にて夜をあかす。貢物もなければ供御を備ふる事もなく、たまたま供御を備へむとすれども水なければ參らず。大海に浮かぶといへども潮なれば飲む事なし。これ又饑鬼道の苦しきとこそ覺え候ひしか。

かくて室山、水島二箇度の軍に勝ちしかば、一門の人々少し色直つて見え候ひし程に、攝津の國一谷とかやに城郭を構へ、各直



一谷 兵庫縣  
神戸市須磨。  
修羅 闘争を  
事とする一種  
の鬼神。常に  
帝釋と戦を交  
ふ。  
帝釋 忉利天  
の主。  
門司 福岡縣  
門司市。下關  
海峡の南岸に  
あり。  
赤間 山口縣  
豊浦郡。今下  
關市赤間町。  
下關海峡の北  
岸にあり。  
壇浦 山口縣  
豊浦郡。今下  
關市壇之浦  
町。下關海峡  
東口の北岸に  
あり。  
二位尼 平清  
盛の妻。從二  
位時子。

衣束帯を引替へて、鐵をのべて身にまとひ、明けても暮れても軍  
よばひの聲の絶ゆることもなかりしは、修羅の闘争、帝釋の争も  
これには過ぎじとこそ覺え候ひしか。一谷を攻落されて後、親は  
子におくれ、妻は夫にわかる。沖に釣する舟をば敵の舟かと肝を  
消し、遠き松に白鷺の群れあるを見ては、源氏の旗かと心を盡く  
す。かくて門司赤間壇浦の軍に、既に今日を限りと見えしかば、二  
位の尼泣く泣く申し候ひしは、此の世の中の有様、今はかうと覺  
ゆるなり。今度の軍に男の命の生き残らむことは、千萬が一もあ  
りがたし。たとひ又遠きゆかりは、おのづから生き残ることあり  
といふとも、妾が後生弔はむ事もありがたし。昔より女は殺さぬ  
習なれば、如何にもしてながらへて主上の御菩提を弔ひ、われら  
が後生をも助け給へ。と申し候ひしを、夢の心地して覺え候ひし  
程に、風忽ちに吹き、浮雲厚くたなびき、つはものどもの心を迷は

西方淨土 阿  
彌陀佛の淨土  
又極樂淨土と  
もいふ。

し、天運盡きて人の力にも及びがたし。  
既にかうと見えしかば、二位の尼先帝を抱き參らせて舷に出  
でし時、あきれたる御有様にて、抑、尼前、われをばいづちへ具して  
行かむとするぞ。と仰せければ、二位の尼、涙をはらはらと流して、  
幼き君に向ひ參らせて、君は未だ知し召され候はずや。前世の十  
善戒行の御力によつて、今萬乘の主とは生れさせ給へども、惡縁  
に引かれて、御運既に盡きさせ給ひ候ひぬ。まづ東に向はせ給ひ  
て、伊勢大神宮伏し拜ませおはしまし、その後西方淨土の來迎に  
預らむと誓はせおはしまして、御念佛候べし。この國は粟散邊土  
と申して、心憂き境にて候。あの波の底にこそ、極樂淨土と申して  
めでたき都の候。それへ具し參らせ候ぞ。とやうやうに慰め參ら  
せしかば、山鳩色の御衣に、びんづら結はせ給ひて、御涙におぼれ、  
ちひさう美しき御手を合はせ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神

叫喚・大叫喚  
無間 共に八  
熱地獄の一。  
阿鼻は梵語、  
漢譯して無間  
といふ。無間  
阿鼻とは漢梵  
重ねいへるな  
り。

平家物語 十  
二卷。異本多  
し。平氏の興  
起より滅亡ま  
でを記す。  
作者不詳。

浄土宗の  
浄土宗の  
浄土宗の

愚禿 親鸞の  
自稱。愚なる  
カムロの意。  
親鸞 浄土眞  
宗の開祖。弘  
長二年(一九  
二二)歿。年  
九十。  
西田幾多郎  
哲學者、文學  
博士。京都帝  
國大學名譽教  
授。明治三年  
生。  
眞宗 阿彌陀  
の本願を信  
じ、念佛によ  
りて救はるゝ  
とする佛教の  
一派。

宮に御暇申させ給ひ、其の後西に向はせ給ひて、御念佛ありしかば、二位の尼、先帝を抱きまゐらせて、海に沈みし有様、目もくれ心も消えはてて、忘れむとすれども忘られず、忍ばむとすれども忍ばれず。かくて生き残りたる者どもをめぐり、叫びし有様は、叫喚・大叫喚、無間阿鼻、焔の底の罪人も、是には過ぎじとこそ覺え候ひしか。さて、も武士どものあらけなきにとらはれて、都にこそ上り候へ。とぞ仰せける。

「さる程に寂光院の鐘の聲、今日も暮れぬとうち知られ、夕陽西に傾けば、御名残盡きせず思し召されけれども、御涙をおさへて還御ならせたまひけり。女院はいつしか昔をや思し召し出でさせ給ひけむ、しのびあへぬ御涙に袖のしがらみせきあへさせ給はず、御後を遙かに御覽じ送つて、還御もやうやう延びさせ給へば、御庵室に入らせたまひけり。(平家物語)

### 一五 愚禿親鸞

西田幾多郎

余は眞宗の家に生れ、余の母は眞宗の信者であるに拘らず、余自身は眞宗の信者でもなければ、また眞宗に就いて多く知るものでもない。たゞ聖人が在世の時、自ら愚禿と稱し、此の二字に重きを置かれたといふ話から、余の知る所を以て推すと、愚禿の二字は能く聖人の人となりを表すと共に、眞宗の教義を標榜し、兼ねて宗教そのものの本質を示すものではなからうか。

人間には智者もあり、愚者もあり、徳者もあり、不徳者もある。併しいかに大なりとも、人間の智は人間の智であり、人間の徳は人間の徳である。三角形の邊はいかに長くとも、總べての角の和が二直角に等しいといふには、何の變りもなからう。たゞ翻身一回、此の智、此の徳を捨てた所に、新な智を得、新な徳を具へ、新な生命



日蓮上人。日蓮宗の開祖。親鸞と略々同時代の人。小島の主云々高祖遺文録卷之二十。若し我兩所に云々。親鸞傳繪鈔。吉水一門。東山の吉水にて浄土宗を説きし法然上人の門下。北國の隅に親鸞は承元年(八六七)賊後に流され五年にして赦さる。

りけり。』といはれたのが其の極意を示したものであらう。終りに宗祖其の人の人格に就いて見ても、彼の日蓮上人が意氣冲天、他宗を罵倒し、北條氏を目して、小島の主等が云々』と壯語せしに比べて吉水一門の奇禍に連なり、北國の隅に流されながら、若し我配所に赴かずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん。』といつて、法を見て人を見なかつた親鸞聖人の人格は、頗る趣を異にしたものと謂はねばならぬ。風號び雲走り、怒濤朝天の間立つて、動かざること巖の如き日蓮上人の意氣は壯なことは壯てはあるが、煙波渺茫、風靜かに波動かざる親鸞聖人の胸懷は、また何となく奥床しいではないか。(思索と體驗)

鴨 長明 通稱菊太夫。鎌倉時代の歌人。没年不詳。

一六 方丈記鈔

行く川のながれ

鴨 長 明

かつ消えかつ結びて云々。こゝに消えかしこに結ぶ水のあわらき世にめぐる身にこそありけり。(藤原公任)

朝に死し。朝有ニ紅額一。誇三世路一暮。爲ニ白骨一朽ニ。郊原一。(和漢朗詠集)

行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人と住家とまたかくの如し。玉敷の都の中に、棟を並べ藁を争へる、たかき卑しき人の住居は、代々を経てつきせぬものなれども、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年焼けて今年に造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に僅かに一人二人なり。朝に死に、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。

朝顔の露云々  
何かおもふな  
にかはなげく  
世の中はたゞ  
朝顔の花の上  
のつゆ  
(新古今集)

知らず、生れ死ぬる人、何方どこより來りて、何方へか去る。又知らず、假のやどり、誰が爲にか心を惱まし、何によりてか目を悦ばしむる。そのあるじと住家と無常を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。あるは露おちて花残れり。残るといへども朝日に枯れぬ。あるは花萎みて露なほ消えず。消えずといへども夕を待つことなし。

一期の月影

一期の月影云々  
ながむれば  
月かたぶきぬ  
あばれ我が  
この世の程も  
かばかりぞか  
し(後拾遺集)  
三途 火途(地獄道)・刀途

そもそも一期の月影傾きて、餘算、山の端に近し。忽ちに三途の闇に向はむとす。何のわざをかかこたむとする。佛の教へたまふ趣は、事にふれて執心なかれとなり。今草庵を愛するも科かとす。閑寂に著するも障なるべし。いかゞ用なき樂しみをのべて、空しくあたら時を過ぐさむ。靜かなる曉、此のことわりを思ひ續けて、自

(俄鬼道)・血途(畜生道)・十惡業を作りし者の赴く所。  
淨名居士 維摩詰。釋迦と同時代の印度の人。方丈の室に住し、在俗のまゝにて道を樂しみし大悟の士。  
周梨槃特 釋迦弟子中第一の魯鈍者。  
方丈記 一卷。鴨長明の隨筆。

ら心に問ひて曰く、世を遁れて山林にまじはるは、心を修めて道を行はむがためなり。しかるを汝が姿は聖に似て、心は濁にしめり。住家は即ち淨名居士の跡をけがせりといへども、保つところには僅かに周梨槃特が行にだに及ばず。もしこれ貧賤の報の自ら悩ますか、はた又妄心の至りて狂はせるか。其の時心更に答ふることなし。たゞかたはらに舌根をやとひて、不請ふせうの念佛兩三返を申して止みぬ。(方丈記)

石川やせみの小川の清ければ月もながれを尋ねてぞすむ  
鴨長明

一七 新島守

いつの年よりも五月雨霽間なくて、富士川・天龍などえもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻めのぼる武者どももあやしく艱めりか、れども遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出立つ。其の勢六萬餘騎とかや。宇治瀬田へ分ち遣はす。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉も及ばず、まねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落下り、すべて安げなく騒ぎみちたり。いかゞあらむと、君も御心亂れておぼし惑ふ。豫ては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたる様ども、頼もしげなし。

六月二十日あまりにや、いくばくの戦だになくて、遂に味方の軍敗れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂

六月 仲恭天皇の承久三年。(一八八) 泰時 北條義時の長子。後鎌倉二代の執権となる。時房 北條義時の弟。

本院 後鳥羽天皇。鳥羽殿 離宮。宮址は京都市伏見區竹田・下鳥羽兩町に跨る。ものにもがや とりかへすものにもがなや世の中ありしながらのわが身と思はむ。(源氏物語河海抄繪木) 信實 藤原氏。右京權大夫。繪卷物・肖像畫をよくす。七條院 典侍藤原殖子。後鳥羽天皇の御生母。新院 順徳上

れ入りぬれば、いはむ方なくあきれて、上下たゞ物にぞ當り惑ふ。あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍計らひおきてつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院宮々、處々におぼし惑ふこと更なり。本院は隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせたまふ。今日を限りの御ありき、あさましうあはれなり。ものにもがなやと、おぼさるゝもかひなし。その日、やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせたまふらむ。まだいと惜しかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はむとなり。かくて同じき十三日に御船に奉りて、遙かなる波路を凌ぎおはします御心地、この世の同じ御身ともおぼされず。いみじういかなりける代々の報にかとうらめし。新院も佐渡の國に遷らせ給ふ。まことや七月九日、帝をもおろし



菟姑射の山  
上皇の御所。  
仙洞。  
雲の洞 仙洞  
御所。

柴の庵の  
づくにもす  
れずばたす  
まであらむ柴  
のいほりのし  
ばしなる世に  
(西行)

柴の庵の  
づくにもす  
れずばたす  
まであらむ柴  
のいほりのし  
ばしなる世に  
(西行)

き。菟姑射の山の峯の松も、やうやう枝をつらねて千代に八千代  
をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を経て空ゆく月日の限り知  
らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありありてよしな  
きひとふしに、今はかく花の都をさへ立ち別れ、おのがちりぢり  
にさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからこと問ふもの  
とては、浦に釣するあま小舟、鹽やく煙の靡く方をも、わが故郷の  
しるべかとはばかり眺めすごさせたまふ御すまひどもは、それま  
でと月日をかぎりたらむだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、  
いと心細かるべし。まいて何時をはてとか廻り逢ふべき限りだ  
になく、雲の波、煙の波の幾重とも知らぬ境に世を盡くし給ふべ  
き御様ども、口惜しといふもおろかなり。  
このおはします處は、人ばなれ里遠き島の中なり。海づらより  
は少し引入りて、山蔭にかたそへて、大きやかなる巖のそばだて

水無瀬殿 本  
院の造らせら  
れし殿舎。今  
の大阪府三島  
郡島本村廣瀬

増鏡 十卷。  
後鳥羽天皇よ  
り後醍醐天皇  
に至る約百五  
十年間の史實  
を記せり。作  
者不詳。

るをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかりことそ  
ぎたり。誠に、柴の庵のたゞしし。と、かりそめに見えたる御宿り  
なれど、さるかたになまめかしく、故づきてしなさせたまへり。水  
無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになむ。はるばると見やらるゝ  
海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今更めきたり。潮風  
のいとこちたく吹きくるを聞しめして、  
われこそは、新島守よおきの海のあらしき波風こころして  
吹け

(増鏡)

増鏡 十卷  
後鳥羽天皇よ  
り後醍醐天皇  
に至る約百五  
十年間の史實  
を記せり。作  
者不詳。

作者増鏡

二卷目  
一巻 經嗣

増鏡

増鏡 編年体  
大 列傳行

三鏡  
水大  
増鏡

三鏡  
水大  
増鏡



吉田兼好 本  
姓卜部氏。  
後村上天皇の  
正平五年（二  
〇一〇）歿、  
年六十九。  
垂れこめて春  
のゆくへも知  
らぬ間に待ち  
し櫻も移ろひ  
にけり（古今  
集、藤原因香）

一八 花はさかりに

吉田兼好

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨に對ひて月を戀ひ、垂れこめて春のゆくへ知らぬも、猶あはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見所おほけれ。歌の詞書にも、花見にまかれりけるに、早く散りすぎにければ、とも、障る事ありてまからで、なども書けるは、花を見て、といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひは、さる事なれど、殊にかたくななる人ぞ、この枝、かの枝、散りにけり。今は見所なし。などはいふめる。

よろづの事も、はじめ終こそをかしけれ。望月の隈なきを、千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の

影、うちしぐれたる叢雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴白樫などの濡れたるやうなる葉の上、にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都戀しう覺ゆれ。

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家をたち去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしかれ。

よき人は、ひとへに好けるさまにも見えぬ、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色濃くよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢ寄りたち寄り、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては大きな枝、心なく折取りぬ。泉には手足さし浸して、雪にはおり立ちてあとなつかけなど、よろづのもの、よそながら見ることなし。

さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。見ごといと

祭 賀茂神社  
の祭。四月、  
中の酉の日。

明けはなれぬほど、忍びてよする車どものゆかしきを、それかかれかなと思ひよすれば、牛飼下部などの見知れるもあり。をかしくも、きらきらしくも、さまざまにゆきかふ、見るもつれづれならず。暮るゝ程には、たてならべつる車ども、所なくなみあつる人もいづかたへか行きつらむ程なくまれになりて、くるまどもものうがはしさもすみぬれば、簾疊もとりはらひ、目の前にさびしげになりゆくこそ、世のためしも思ひ知られて、あはれなれ。大路みたるこそ、祭見たるにてはあれ。(徒然草)

そし。そのほどは、棧敷不用なり。とて、奥なる屋にて、酒飲み、物くひ、圍碁雙六など遊びて、棧敷には人を置きたれば、渡り候。といふ時に、各肝つふるゝやうに争ひ走りのぼりて、落ちぬべきまで簾はり出でておし合ひつゝ、一事も見もらさじとまもりて、とあり、かゝり。と、物毎にいひて、渡り過ぎぬれば、また渡らむまで。といひておりぬ。唯物をのみ見むとするなるべし。都の人のゆゝしげなるは、睡りていとも見ず。若く末々なるは、宮仕に立ちゐ、人の後にさぶらふは、様悪しくも及びかゝらず、わりなく見むとする人もなし。

何となく葵かけわたしてなまめかしきに、



(卷繪事行中年) 圖の祭茂賀

「語る部分。詞といふ。」  
 「論ぶ部分。次第、序歌ともいふべきもの。一曲の気分情調を表はす。」  
 道行 叙景抒情を加へつゝ、旅程を述ぶる歌詞。  
 歌 論ぶ部分の一種。上音に始まるを上歌、下音に始まるを下歌といふ。  
 クセ 曲舞節にて論ぶ部分。  
 ロンギ 僧家の論義より出で、問答の體をなす部分。  
 地 役者以外の數人(地方)合唱する部分

一九鉢の木

作者  
 鎌倉 藤原 義朝  
 (義朝の孫)

人物	所	時
シテ 佐野常世	前段 上野國佐野	鎌倉中期 前段は十二月
ツレ 同 妻	後段 相模國鎌倉	
ワキ 旅僧(最明寺時頼)		
後ワキ 最明寺時頼		
ワキヅレ 時頼の近侍		
狂言 從者		

ワキ 次弟  
 「行方定めぬ道なれば、來し方もいづくならまし。」  
 ワキ 「これは一處不住の沙門にて候。われこの程は信濃の國に候

大井山・伴の里(伴野庄)。  
 離坂・碓氷川。  
 板鼻 信濃より碓氷峠を経て上野高崎に到る途中の地名。  
 佐野の渡り 群馬縣群馬郡佐野村。

ひしが、餘りに雪深くなり候程に、まづこの度は鎌倉に上り、春になり修行に出てばやと思ひ候。  
 道行 信濃なる、淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき伴の里、今ぞ浮世を離坂、墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡りに着きにけり。  
 ワキ 「急ぎ候ほどに、上野の國佐野の渡りに着きて候。あら笑止や、また雪の降り來りて候。此の所に宿を借らばやと思ひ候。  
 「いかに此の屋の内へ案内申し候。  
 ツレ 「誰にてわたり候ぞ。  
 ワキ 「これは修行者にて候。一夜の宿を御かし候へ、  
 ツレ 「易き御事にて候へども、主の御留守にて候ほどに、お宿は叶ひ候まじ。  
 ワキ 「さらば御歸りまで是に待ち申さうずるにて候。」

雪は鶴毛に  
雪似し鶴毛に飛  
散亂し人被し鶴  
髦立徘徊  
(白氏文集)  
細布衣 陸奥  
希婦(けふ)の  
里の名産。

ツレ「それはともかくもにて候。わらはは外面へ出てむかひ、此の由を申さばやと思ひ候。

シテ「あゝ降つたる雪かな。いかに世にある人の面白う候らん。それ雪は鶴毛に似て飛んで散亂し、人は鶴髦を着て立つて徘徊すといへり。されば今ふる雪も、もと見し雪に變らねども、われは鶴髦を着て立つて徘徊すべき。袂も朽ちて袖せばき、細布衣陸奥の、今日の寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな。

「あら思寄らずや、この大雪に何とて是に佇みて御入り候ぞ。ツレ「さん候。修行者の御入り候が、一夜のお宿と仰せ候ほどに、御留守の由申して候へば、御歸りまで御待ちあらうずるよし仰せ候ほどに、是まで参りて候。

シテ「さてその修行者はいづくに渡り候ぞ。

ツレ「あれに御入り候。

ワキ「我等が事にて候。未だ日は高く候へども、餘りの大雪にて前

あ降のたる雪のいかに世ある

人の面白う候らん。それ雪は鶴

毛に似て飛んで散亂し、人の鶴髦

を着て立つて徘徊すといへり。

あれは今降る雪も、もと見し雪

みゆらねども、われは鶴髦を着

て立つて徘徊す。袂も朽ちて袖

せき、細布衣陸奥の、今日の寒

さを如何にせん。あら面白から

ずの雪の日や、あら思ひよらずや

後を忘れて候程に、一夜の

お宿を御かし候へ。

シテ「やすき御事にて候へども、

餘りに見苦しく候程に、お

宿は叶ひ候まじ。

ワキ「いやいや、見苦しきは苦し

からぬ事にて候。ひらに一

夜を御貸し候へ。

シテ「泊め申したくは候へども、我等夫婦さへ住みかねたる體にて候ほどに、中々お宿は思ひもよらぬ事にて候。是より十八



廬生 蜀の國に廬生といふ貧しき青年あり、邯鄲の旅舎にて道士呂翁の枕を借りて眠り、榮華五十年の夢を見しが、それは僅に主人が黄梁を炊ぐ間に過ぎざりと。

シテ「さらばその由申し候べし。

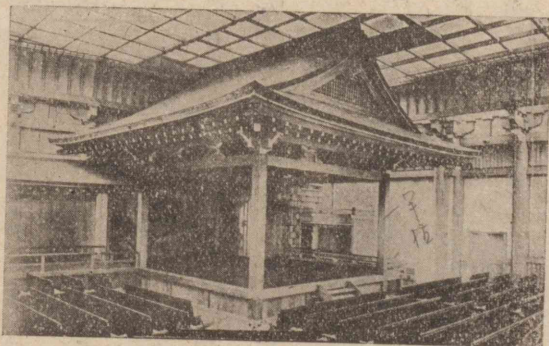
「いかに申し候。お宿をば參らせて候へども、何にても參らせうずる物もなく候。折ふしこれに粟の飯のある由申し候。苦しからずはきこし召され候へ。」

ワキ「それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ。」

シテ「なう、きこし召されうずると仰せ候。急いで參らせられ候へ。」

ツレ「心得申し候。」

シテ「總じてこの粟と申す物は、いにしへ世にありし時は、歌によみ、詩に作りたるをこそ承りて候に、今はこの粟を以て身命を繼ぎ候。げにや廬生が見し榮華



(堂樂能生寶) 臺 舞 能

の夢は五十年、その邯鄲の假枕、一炊の夢のさめしも粟飯炊ぐ程ぞかし。あはれや、げに我もうちも寝て、夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに、「なう御覽ぜよ、かほどまで住みうかれたる故郷の、松風寒き夜もすがら、寝られねば夢も見ず。何思ひ出のあるべき。」

シテ「夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に焚いてあてまゐらせ候べきや、思ひ出だしたる事の候。鉢の木を持ちて候。これを切り、火に焚いてあて申し候べし。」

ワキ「げにげに鉢の木の候よ。」

シテ「さん候。それがし世にありし時は、鉢の木に好き、數多木を集めもちて候ひしを、かやうの體にまかりなり、いやいや木好きも無用と存じ、皆人に參らせて候。さりながら、今も梅櫻、松を持ちて候。あの雪もちたる木にて候。某が祕藏にて候へど

埋木の花咲く  
埋木の花さく  
こともなかり  
しに身のなる  
はてぞあはれ  
なりける  
(源頼政)

雲山 印度北  
嶺に聳ゆる大  
山。釋迦過去  
世に於て苦行  
せしといふ山

窓の梅の北面  
池凍東頭風度  
解、窓梅北面  
雪封塞(和漢  
即詠集)  
見じといふ  
山里の折かけ  
垣の梅の花い  
かなる人の見  
じといふら  
む(菅家後  
集)

松はもとより  
原作には「松  
はもとより煙  
にて、薪とな  
るも理や」と  
あり。徳川時  
代に改作せし  
もの。

も、今夜のおもてなしに、これを火に焚きあて申さうずるに  
て候。

ワキ「いやいや、これは思ひもよらぬ事にて候。御志はありがたう  
候へども、自然又おこと世に出て給はん時の御慰にて候間、  
なかなか思ひもよらず候。

シテ「いや、とても此の身は埋木の、花咲く世にあはんこと、今この  
身にてはあひがたし。

ツレ「たゞ徒なる鉢の木を、御身の爲に焚くならば、

シテ「これぞまことに難行の法の薪とおぼしめせ。

ツレ「しかもこの程雪降りて、

シテ「仙人に仕へし雪山の薪、

ツレ「かくこそあらめ。

シテ「われも身を

地

「捨人のための鉢の木、切るとてもよしや惜しからじと、雪う  
ち拂ひて見れば、面白や、いかにせん。まづ冬木より咲きそむ  
る、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木よりまづさきだ  
てば、梅を切りやそむべき。見じといふ人こそ憂けれ、山里の  
折りかけ垣の梅をだに、情なしと惜みしに、今更薪になすべ  
しとかねて思ひきや。

地  
クセ

「櫻を見れば春ごとに花少し遅ければ、此の木や佗ぶると心  
を盡し育てしに、今はわれのみ佗びて住む、家櫻切りくべて、  
緋櫻になすぞ悲しき。

シテ

「さて松はさしもげに、

「枝をため、葉をすかして、かゝりあれと植ゑ置きし、そのかひ  
今は嵐吹く、松はもとより常磐にて、薪となるは梅櫻、切りく  
べて今ぞ御垣守、衛士の焚く火はおためなり、よくよりてあ

御垣守 御垣  
守衛士の焚く  
火の夜は燃え  
盡は消えつゝ  
物をこそ思  
へ(詞花集)

大甲

たり給へや。

ワキ「近頃よき火にあたり、寒さを忘れて候。

シテ「御出てにより我等も火にあたりて候。

ワキ「いかに申し候。主の御名字をば何と申し候ぞ、承りたく候。

シテ「いや、某は名字もなき者にて候。

ワキ「何と仰せ候とも、唯人とは見え給はず候。自然の時の爲にて候。何の苦しう候べき。御名字を承り候べし。

シテ「この上は何をかつゝみ候べき。是こそ佐野の源左衛門尉常世がなれる果にて候。

ワキ「それは何とてかやうの散々の體にはなり給ひて候ぞ。

シテ「その事にて候。一族どもに横領せられて、かやうの身となりて候。

ワキ「なう、それは何とて鎌倉へ御上り候ひて、その御沙汰は候は

ぬぞ。

シテ「運の盡くる處は、最明寺殿さへ修行に御出で候上は候。かや

うにおちぶれては候へども、御覽候へ、是に物の具一領、長刀

一えだ、又あれに馬をも一匹つないで持ちて候。これは、唯今

にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりともこの具足

取つて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、瘦せたりともあ

の馬に乗り、一番に馳せ参じ、着到につき、<sup>あつ</sup>「さて合戦始らば、

地「敵大勢ありとても、一番に破つて入り、思ふ敵と寄りあひ、打

ちあひて死なん此の身の此のまゝならば、徒に飢に疲れて

死なん命、なんぼう無念のことさふぞ。

ワキ「よしや身の、かくては果てじ、只頼め、われ世の中にあらん程、

ツレ「またこそまゐり候はめ。暇申して出づるなり。  
シテ「名残惜しの御事や。はじめはつゝ、む我が宿の、さも見苦しく

最明寺殿 北  
條時頼。鎌倉  
五代の執權。  
剃髮して最明  
寺入道とい  
ふ。弘長三年  
(一九二三)  
歿、年三十七。

只頼め なほ  
頼めしめぢが  
原のさしも草  
われ世の中に  
あらむ限りは  
(新古今集)



候へど、しばしは留りたまへや。

ワキ『留る名残のまゝならば、さて幾度か雪の日の、  
ツレテ』空牙え寒きこの暮に、

ワキ『いづくに宿をかり衣、  
ツレテ』

ツレテ『今日ばかりとまりたまへや。  
ツレテ』

ツレテ『なごりは宿にとまれども、暇申して、  
ツレテ』

地『さらばよ、常世。  
ツレテ』

ツレテ『またお入り。  
ツレテ』

地『自然鎌倉に御のぼりあらばお尋ねあれけうがる法師なり。  
かひがひしくはなけれども、披露の縁になり申さん。御沙汰  
捨てさせ給ふなと言捨てて、出て船のともにも名残や惜しむ  
らん。』

(中入)

東八箇國相  
模・武蔵・安  
房・上總・下  
野・常陸・上

後ジテ『いかにあれなる旅人、鎌倉へ勢の上るといふはまことか。  
なに、おびたゞしく上る。さぞあるらん。東八箇國の大名小名  
思ひ思ひの鎌倉入り、さぞ見事にて候らん。白金物打つたる  
絲毛の具足に、金銀を展べたる太刀刀、飼ひに飼うたる馬に  
のり、乗替中間、さらびやかにかに、うち連れうち連れのぼる中に、  
常世が常にかはりたる、馬物の具や打物の物、そのものにあ  
らざる氣色、』さぞ笑ふらん。さり乍ら、所存は誰にも劣るま  
じと、心許りは勇めども、勇みかねたる瘦馬の、あら道おそや。

東八箇國相  
模・武蔵・安  
房・上總・下  
野・常陸・上

地『急げども急げども、弱きに弱き柳の絲の、  
シテ』

シテ『よれによれたる瘦馬なれば、  
シテ』

地『うてどもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、乗り力なけれ  
ば追ひかけたり。』

後ワキ「いかに誰かある。

ワキヅレ「御前に候。

ワキ「國々の軍勢どもは皆々來りてあるか。

ワキヅレ「さん候。悉くまゐりて候。

ワキ「その諸軍勢のなかに、いかにもちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いでこなたへ來れと申し候へ。

ワキヅレ「畏つて候。

「いかに誰かある。

狂言「御前に候。

ワキヅレ「君よりの御説には、諸軍勢のなかに、ちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者あ

るべし。急いで尋ねて御前へ參れとの御ことにて候。

狂言「畏つて候。

「いかに申し候。

シテ「何事にて候ぞ。

狂言「上意にて候。急いで御前へ御參り候へ。」

シテ「何と、某に御前へ參れと候や。

狂言「なかなかの事。

シテ「あら思ひよらずや。これは定めて人たがへにて候べし。

狂言「いやいや、そなたの事にて候。その仔細は、諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者をつれて參れとの御事にて候が、見申せば、其方ほど見苦しき武者も候はぬ程に、さて申し候。急いで御參り候へ。

シテ「何と、たとへば諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者に參れ

と候や。

狂言「なかなかのこと。」

シテ「さては某が事にて候べし。畏つたと御申し候へ。」

狂言「心得申し候。」

シテ「げにげにこれも心得たり。某が敵人、叛謀人と申し上げ、御前へめし出だされ、頭を刎ねられんためな。よしよし、それも力なし。いでいで御前に參らんと、『大床さして見渡せば、

地「今度の早打に上り集まる兵、きら星の如く並み居たり。さて御前には諸侍、その外數人並み居つゝ、目をひき、指をさし、笑ひあへるその中に、

シテ「横縫のちぎれたる

地「古腹巻に錆長刀やうやうに横たへ、わるびれたる氣色もなく、參りて御前にかしこまる。」

ワキ「やあ、いかにあれなるは佐野の源左衛門尉常世か。これこそいつぞやの大雪に宿かりし修行者よ。見わすれてあるか。いで、汝佐野にて申せしよな。今にてもあれ鎌倉に御大事あるならば、ちぎれたりともその具足取つて投げかけ、錆びたりともその長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ參るべきよし申しつる。言葉の末を違へずして、參りたるこそ神妙なれ。まづまづ今度の勢づかひ、全く餘の儀にあらず。常世が言葉の末、眞か偽か知らん爲なり。又當參の人々も訴訟あらば申すべし。理非によつてその沙汰いたすべきところなり。まづまづ沙汰のはじめには、常世が本領佐野の庄、三十餘郷返し與ふるところなり。又なによりも切なりしは、大雪ふつて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を切り、火にたきあてし志をば、いつの世にかは忘るべき。いでその時の鉢の木

梅田 石川縣  
河北郡森本村  
大字梅田。  
櫻井 富山縣  
下新川郡三日  
市町邊の舊  
名。  
松井田 群馬  
縣碓氷郡松井  
田。

は梅・櫻・松にてありしよな。その返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、あはせて三箇の庄子々孫々にいたるまで、相違あらざる自筆の狀、「安堵に取り添へたびければ、

シテ「常世はこれを賜はりて、

地「三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ、始め笑ひしともがらも、これほどの御氣色、さぞ羨ましがるらん。さて國々の諸軍勢、皆御暇賜はり、古里へとてぞ歸りける。

シテ「その中に常世は、

地「よろこびの眉を開きつゝ、今こそ勇め、この馬に打乗りて上野や佐野の船橋、とりはなれし本領に安堵して歸るぞうれしかりける。

(觀世謠本による)

### 二 萩 大名

能狂言 狂言の詞章は、謡曲と共に室町文學の中心をなし、我が國の滑稽文學の前驅をなすもの。多くは短篇にして、全篇は對話と獨白とより成り、當時の口語を用ひたり。

大名 立烏帽子、素襖、袴、小き刀。  
冠者 半袴。  
亭主 長袴。

西山 京都市の西方に連なる一帯の山地。

東山 京都市の東方に連なる

大名、罷り出でたるは隠れもない大名。この中、御前に詰めてあれば、心が何とやら屈してござる。太郎冠者を呼出し、何方へぞ遊山に參らうと存ずる。あるかやい。御前に。大名、汝を呼出すは別儀ではない。何方へぞ遊山に行かうと思ふが、何とあらう。内々は御意なうても、申し上げたら存ずる所に、一段でござりませう。大名、よからうな。冠者は、

大名、何と、西山、東山はいつもの事、様子の違つた所へ行きたいが、何處もとがよからうな。冠者、まことに御意の通り、西山、東山はいつもの事でござる。されば何處もとがようござりませうぞ。はあ、思ひつけてござる。これよりも下京邊に、心やさなたな御方がござる。殊の外の庭ずきでござる。これへの御遊山がようござりませう。

れる一帯の山地。  
下京 京都市の南部。  
上京 京都市の北部。

せう。大名おう、これが一段よかる。それへ向けて行かうぞ。冠者は、さりながら、これへござればお歌をなされねばなりません。大名「それは如何やうなことを詠むぞ。冠者、三十一文字の言の葉を傳へた事てござる。大名あゝ、こりやなるまいに。冠者は、申し上げます。大名、何とした。冠者、某上京邊を通つてござれば、若い衆の見物にござらうとあつて、萩の花について句づくろひをなされたを聞いて参りましたてござる。御前に教へませう。大名、やい冠者。其の庭にも萩の花があらうかな。冠者、殊に亭主好きまするのが萩てござりまする。大名、ふん。其の儀ならば急いで教へい。冠者、畏つてござる。七重八重九重とこそ思ひしに、とよ咲出づる萩の花かな」と申す事てござる。大名、ふん。してそればかりか。冠者はあ。大名「いや、これほどの事ならば詠まうほどに、急いで來い。冠者、畏つてござる。」

大名、來い來い。やい冠者。して今の歌のいひ出しは何であつたぞ。冠者、忘れさつしやれてござるか。七重八重てござりまする。大名、おう、それぢや。して、其の後は。冠者、申し、殿様。これではなりません。大名、おう、なるまいわい。急いで戻れ。冠者、申し、殿様。大名、何ぢや。冠者「さりながら、ものによそへたら覚えさつしやれませうか。大名、よそへものによつて覚えらうぞ。冠者、即ち扇の骨によそへませう。七重八重」と申す時に、七本八本廣げませう。九重」と申す時に九本廣げませう。とよ咲き」と申す時に、皆廣げませう。大名、おう、これはよいよそへものぢやわい。やい、して又其の後があるぞよ。冠者はあ。これは猶よそへものてござる。大名、それは何によそへるぞ。冠者「すなはち身共をば、臍脛ばかり伸び居つて、厚く折檻なされまする。其の脛をば思ひ出さつしやれませう。大名、おう、是が一段ぢや。來い來い。」

冠者、疾つとござりました。すなはちこれでござりまする。それに待たしやれませ。大名、やい、冠者、亭主に、大名ぢやほどに、これへ迎へに出よといへ。冠者、畏つてござる。御亭内にござるか。亭主、い、冠者殿、何としてござつたぞ。冠者、其の事てござる。頼うた人が此方の庭を聞及うで、見物にてござる程に、表へ迎へに出さつしやれい。亭主、心得ましてござる。はつ。これは又、見苦しい所へ御腰掛けられうとござりまする。辱うこそござりますれ。大名、やい、冠者、ありや亭主か。冠者、はあ。大名、御亭、不案内におぢやる。かう通りまする。亭主、はつ。大名、やい、太郎冠者、床机、床机。冠者、はつ。大名、やい、亭主にこれへ出られいといへ。冠者、はつ。御亭、これへ出さつしやれい。亭主、畏つてござる。大名、御亭、御亭、聞及うだよりも、いかう庭が見ごとでおぢやる。亭主、はつ。この申は手入もいたさぬによつて、いかう汚穢うござりまする。大名、いやいや、さうもおぢやらぬい

の。なう御亭。あの向うな松は、女松でおぢやるか、男松でおぢやるか。亭主、いや、あれは男松でござりまする。大名、ふん、いかう見事でおぢやる。やい、冠者、見ごとなな。冠者、はつ。大名、あの左の方へすと出た枝を見たか。冠者、なかなか。見ましてござる。大名、鋸おくせい。ひつ切つて心に立てうに。冠者、は。大名、は。御亭、不案内におぢやる。

亭主、これこれ。冠者、何でかござるぞ。亭主、いや、あの殿様に仰しやれませうには、いづれもの御腰掛けられては、あの萩の花につけて短冊を掛けさつしやる。殿様にも遊ばしませいと仰しやれい。冠者、心得ましてござる。申しまする。大名、何とした。冠者、亭主申しまするのには、いづれもが短冊をなされまする程に、花につけてお歌をば詠まつしやれいと申しまする。大名、ふん、亭主にこれへ出よといへ。冠者、はつ。大名、御亭、只今は歌を詠めと仰しやる。久しう



土居光知 東京帝國大學英文科出身。東  
北帝國大學教授。  
山部赤人 歌人。聖武天皇に仕ふ。傳未詳。  
西行 俗名佐藤義清。出家して圓位といひ、又西行といふ。歌集を「山家集」といふ。後鳥羽天皇の建久元年（一八五〇）歿、年七十三。  
芭蕉 第二十二課參照。  
田子の浦 靜岡縣庵原郡。

## 二 自然愛の發達

土居光知

わが國最初の自然詩人は山部赤人である。西行や芭蕉もこの點に於て赤人を祖としてゐる。赤人の歌を讀んで特に注意されることは、瀨の音ぞ清き、清き白濱等、清きといふ語が續出するところである。彼が愛したのは清淨な自然である。

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ富士の高嶺に  
雪は降りける

の歌に於て彼が讚美したのも清淨な神々しさであつて、今日の登山家が喜ぶやうな、偉大な力の感じを中心にした山岳美ではなかつた。彼以前に歌はれた自然は、人生の裝飾或は背景としての自然、官能的に快感を與へる自然であつた。赤人が始めて清き自然を汚れたる人生に對立するものとして愛したのである。彼

が西行及び芭蕉の先達となり、最初の自然詩人とせられるのは、彼がかくの如き精神的な自然の發見者であるからである。かくて彼の自然の歌は、曾てなき清新幽玄なるものとなつた。

鳥羽玉の夜のふけ行けば久木生ふる清き河原に千  
鳥しばなく

春の野に蒐つみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜  
ねにける

西行は人を想ふ心をそのまゝに移して自然を愛した。  
吉野山梢の花を見し日より心は身にもそはずなり

にき  
ひとりすむ片山かけの友なれや嵐にはる冬の夜

の月  
彼はかく自然を友として愛すれば愛する程寂しくなつた。そ



○この五十年の執着と苦悶の  
かき消れしやうたりの身は  
もつとも吐き出すやうな  
夕暮の趣の深きもの  
もつとも吐き出すやうな  
感

してこの心に調和する淋しき自然を友としようとした。  
心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ澤の秋の  
夕暮

訪ふ人も思ひたえたる山里の寂しさなくば住みう  
からまし

彼は寂しさを友とし、その奥深くたどつて行つたのであるが、

寂しさの奥には尙深刻な寂しさがあるのみであつた。

雪ふれば野路も山路も埋もれて遠近知らぬ旅の空

かな

秋ふかみ弱るは蟲の聲のみか聞く我とてもたのみ

やはある

かくの如く西行は寂しさの奥へ奥へとたどつて行つたが、そ  
れは輝く光明の道ではなかつた。何となれば當時の時代思潮に

○淋しさをこころとつとほむな  
外に一人ある物もあ  
さうならん庵をとりへ  
そのあはれを思ふに  
うらむる

於て、人間性の愛と自然の愛とは相對立するものであつて、自然  
の愛は、心情の願の否定であつたからである。西行はこの寂し  
さにたへかねて、また「人」をなつかしく思つた。

の山里

花も枯れ紅葉も散りぬ山里は淋しさをまた訪ふ人

もがな

しかし當時の厭世觀のうちには育ち、それを超越することので  
きなかつた彼は、人間の愛に歸つてゆくことができなかった。

わだの原はるかに波をへだて來て都にいでし月を

見るかな

吉野山やがて出でじとおもふ身を花散りなばと人

やまつらむ

○吉野山の花を思ふ  
さきさきそなた入りの  
そなたいつとよそそ  
と心そそるる身を  
又帰つてまよふ

かくて彼はまばゆき光明にも、大なる歡喜にも、力強い信仰にも接することなく、未來に對する淡い希望と、自然の寂しい慰藉とのうちに生を終へたのである。

もろともに我をも具して散りね花うき世を厭ふ心

ある身ぞ  
ねがはくは花の下にて春死なむそのきさらぎのも

ち月のころ

西行の偉大なる點は、厭世脱俗の態度を誇示し瘖我慢をすることなく、かゝる自然の愛によつて慰められずして、人間を慕ひ、何物かを眞に愛さなければならぬなかつた點に、心の奥底から寂しがつた點にある。これは安價な、愛なきさとりに安住し、寂しさを弄び、寂しさを茶化し、或はまた洒落でごまかしたりする人達とは比較にもならぬ。さびしいといふことは愛せずにはなら

春のきさらぎもこの月のころと花の下にてとて  
死なむのころなりとてとて

れない詩人の運命である。要するに西行の自然愛は、赤人が歌つた如き清淨なる自然としての愛と、人間愛の感情を移入した自然の愛とが合一されたものであつたと云ふことができよう。

うき我をさびしがらせよ閑古鳥

この道やゆく人なしに秋の暮  
の如き句をのこした芭蕉の途も、西行のたどつた道とあまり變らなかつた。たゞ態度の推移がある。私はこゝに二三の簡単な例

歌を以て赤人・西行・芭蕉の態度を説明してみよう。  
春の野に堇つみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜  
ねにける 赤人

かきわけて折れば露こそこぼれけれ淺茅にまじる  
撫子の花 (西行)

山路きて何やらゆかし堇草 (芭蕉)

詩の例  
詩の例

大澤のあふみとて  
山路きて何やらゆかし堇草



三 奥の細道

松尾芭蕉

門出

月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。船の上  
 生涯をうかべ、馬の口とらへて、老をむかふる者は、日々旅にして  
 旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、  
 片雲の風にさそはれて、漂泊の思やまず。海濱にさすらひ、去年の  
 秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やゝ年も暮れ、春立てる  
 霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神のものにつきて心をくる  
 はせ、道祖神のまねきにあひて、取るもの手につかず。股引の破れ  
 をつゞり、笠の緒付けかへて、三里に灸するより、松島の月先づ  
 心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅にうつるに、  
 草の戸も住替る代ぞ、雛の家

奥の細道 一  
 卷。芭蕉が弟  
 子曾良を伴な  
 ひ、元禄二年  
 三月江戸を發  
 し、東北を廻  
 り、越後・越中  
 加賀・美濃に  
 至るまでの約  
 二四〇〇軒、  
 百五十日間の  
 紀行。  
 松尾芭蕉 俳  
 諧正風の祖。  
 伊賀に生る。  
 元禄七年(二  
 三五四)歿、年  
 五十一。  
 月日は 天地  
 者萬物之逆旅  
 光陰者百代之  
 過客(李白)





行者の像を安置する堂。  
雲岸寺、臨濟宗の名刹、雲巖寺。那須郡東山にあり。佛頂禪師始め深川長慶寺に住す。芭蕉參禪の師。正徳五年(二三七五)寂。年八十七。

妙禪師、原妙禪師のこと。南宋の高僧。法雲法師、梁代の高僧。

殺生石 那須温泉湯本附近。

清水ながるゝ道のべに清水ながるゝ柳蔭しばしとてこそ立ち止りつれ(新古今集西行法師) 蘆野の里 那須郡蘆野町。白川の關 福島縣磐城郡白河の附近にありし關。いかで都へ告げやらむ今日白川の關は越えぬと(拾遺集、平兼盛) 三關 念珠(扇)・白川・三關を東國の三關といふ。

夏山に足駄を拜む首途かな  
當國雲岸寺のおくに、佛頂和尚山居の跡あり。

堅横の五尺にたらぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して岩に書付け侍りと、いつぞや聞え給ふ。其の跡見んと雲岸寺に杖を曳けば、人々すゝんで共にいざなひ、若き人多く道のほどうちさわぎて、おぼえず彼の麓に至る。山は奥あるけしきにて、谷道遙かに、松杉黒く、苦したゝりて、卯月の天今猶寒し。十景盡くる所、橋をわたつて山門に入る。さてかの跡はいづくのほどにやと、後の山によちのほれば、石上の小庵岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室を見るがごとし。

木啄も庵はやぶらず夏木立と、とりあへぬ一句を柱に残し侍りし。

是より殺生石に行く。館代より馬にておくらる。此の口付のこの短冊得させよと乞ふ。やさしき事を望み侍るものかなと、

野を横に馬ひきむけよほととぎす  
殺生石は温泉のいづる山かげにあり。石の毒氣いまだほろびず。蜂蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬほど重なり死す。又清水ながるるの柳は、蘆野の里にありて田の畔に残る。此の所の郡守、戸部某の、此の柳見せばやなど、折々にたまひ聞え給ふを、いづくのほどにやと思ひしを、今日此の柳のかげにこそ立ちより侍りつれ。  
田一枚うゑて立去る柳かな

白川

心許なき日かず重なるまゝに、白川の關にかゝりて旅心定りぬ。いかで都へと便り求めしもことわりなり。中にも此の關は三關の一にして、風騒の人心をとむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤に

秋風を 都を  
ば霞と共に立  
ちしかど秋風  
ぞ吹く白河の  
關(後拾遺集  
能因法師)  
紅葉を 都に  
はまだ青葉に  
て見しかども  
紅葉散りしく  
白河の關(千  
載集、源賴政)  
古人冠を正し  
竹田大夫國行  
の故事。  
清輔 藤原氏  
二條天皇の頃  
の歌人。續詞  
花和歌集撰  
者。  
阿武隈川 奥  
羽地方の東雨  
部を流る。  
會津根 磐梯  
山。福島縣岩  
代郡。  
岩城・相馬・三  
春の庄 岩城

して、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそ  
ひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裝を改めし事な  
ど、清輔の筆にもとゞめおかれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着かな

曾良

とかくして越え行くまゝに、あぶくま川を渡る。左に會津根高  
く、右に岩城・相馬・三春の庄、常陸下野の地をさかひて山つらなる。  
かけ沼と云ふ所を行くに、今日は空曇りて物影うつらず。すか川  
の驛に等躬といふものを尋ねて、四五日とゞめらる。先づ白川の  
關いかにこえつるやと問ふ。長途のくるしみ身心つかれ、且は風  
景に魂うばはれ、懷舊に腸を斷ちて、はかばかしう思ひめぐらさ  
ず。

風流のはじめやおくの田植うた

無下にこえんもさすがにと語れば、脇第三とつゞけて三卷とな

は平町を、相  
馬は中村町  
を、三春は三  
春町を中心と  
する地方。何  
れも福島縣に  
あり。  
かけ沼 福島  
縣岩瀬郡須賀  
川町の南方。  
須賀川 白河  
より二十六  
軒。  
等躬 須賀川  
の人、相良氏。  
通稱伊右衛門  
芭蕉の弟子。  
僧 可伸。俳  
號は栗齋。等  
躬の詩友。  
鹽がまの明神  
宮城縣宮城郡  
鹽釜町の西北  
今國幣中社。  
國守 伊達政  
宗。  
文治三年 後  
鳥羽天皇の御

しぬ。此の宿の傍に大きな栗の木蔭をたのみて、世をいとふ僧  
あり。椽拾ふ深山もかくやと間に覺えられて、ものに書付け侍る。  
其の詞

栗といふ文字は、西の木と書きて西方淨土  
に便ありと、行基菩薩の、一生杖にも柱にも

此の木を用ひ給ふとかや。

世の人の見付けぬ花や軒の栗

松島

早朝、鹽がまの明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱ふとしく、彩  
椽きらびやかに、石の階九段に重なり、朝日あけの玉がきをか  
やかす。かゝる道のはて、塵土の境まで、神靈あらたにましますこ  
そ、我が國の風俗なれといと貴けれ。神前に古き寶燈有り。かねの  
戸びらの面に、文治三年和泉三郎寄進とあり。五百年來の俤、今日



代(二八四七) 和泉三郎 藤原秀衡の三男 忠衡。父の遺命により義經に味方し、兄泰衡に殺さる。松島 宮城縣 宮城郡 雄島の磯 松島灣内竹浦の東南、御島ともかく。歌枕。洞庭湖 西湖 洞庭湖は支那湖南省、西湖は浙江省にあり。浙江 浙江省にあり。錢塘江ともいふ。大山つみ 大 山津見神。伊弉諾・伊弉冉二神の御子。山を司る。

雲居禪師 京都妙心寺の僧。寛永十三年伊達忠宗に聘せられて瑞巖寺を中興す。萬治二年(二三一九)寂。年七十八。別室 把不住軒といふ亭。素堂 山口信章、芭蕉の友人。原安適 江戸深川の醫師。芭蕉の友人。濁子 中川氏。美濃の人。芭蕉の門人。瑞岩寺 松島村松島にある妙心寺派の寺。眞壁平四郎 僧名法身。入宋歸朝の後、北條時頼の命により入山。

の前にかかびてそゞろに珍らし。彼は勇義忠孝の士なり。佳名今に至りてしたはずといふ事なし。まことに人能く道を勤め義を守るべし。名もまた是にしたがふと云へり。日既に午にちかし。船をかりて松島にわたる。其の間二里餘、雄島の磯につく。

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭、西湖に耻ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數をつくして、欵つものは天を指さし、伏すものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重にたゞみて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するがごとし。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるがごとし。其の氣色窅然として、美人の顔を粧ふ。ちはやぶる神の昔、大山つみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を盡くさん。

雄島が磯は地つゞきて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有り。はた、松の木蔭に世をいとふ人も稀れ稀れ見え侍りて、落穂松笠など打ちけぶりたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とはしられずながら、まづなつかしく立寄るほどに、月海にうつりて、晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求めむれば、窓をひらき二階を作りて、風雲の中に旅寝すること、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほととぎす。予は口をとちて眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゝ時、素堂松島の詩あり、原安適松がうらしまの和歌をおくらす。袋を解いてこよひの友とす。かつ杉風濁子が發句あり。十一日、瑞岩寺に詣づ。當寺三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して、入唐歸朝の後開山す。其の後に雲居禪師の徳化に依つて、七堂

見佛聖 見佛上人。鳥羽天皇の頃雄島に庵居せし高徳平泉 岩手縣西磐井郡。あねはの松 岩手縣栗原郡澤邊村にありきと。緒だえの橋 宮城縣志田郡古川町にある小板橋。雉兔・菟蕪 孟子、梁惠王下、文王之囿方七十里、芻蕘者往、雉兔者往。石の巻 宮城縣石巻市。こがね花咲く すめらぎの御代榮えむとあづまなるみちのくやまにこがね花さく

藁改りて金壁莊嚴光を輝かし、佛土成就の大伽藍とはなれりける。彼の見佛聖の寺はいづくにやとしたはる。

平泉

十二日、平泉と心ざし、あねはの松緒だえの橋など聞傳へて、人跡稀に、雉兔蕪蕪の往きかふ道そこともわかず、終に路ふみたがへて石の巻といふ港に出づ。こがね花咲くとよみて奉りたる金花山海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、籠の煙立ちつゞけたり。思ひがけず斯る所にも來れるかなと、宿からんとすれど更に宿かす人なし。漸くまどしき小家に一夜をあかして、明くれば又しらぬ道まよひ行く。袖のわたり尾ぶちの牧、まの萱はらなどよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸井麻といふところに一宿して平泉に至る。其の間廿餘里程とおほゆ。

(萬葉集、大伴家持) 金花山 牡鹿半島の東南の小島。袖のわたり 北上川に臨み、石巻の北にあり。歌枕。尾ぶちの牧 石巻の東にありし牧場。まの芽はら 歌枕。石巻の東北。戸井麻 歌枕。今の登米郡登米町。三代 藤原清衡・基衡・秀衡。金雞山 高館の西南。高館 衣川館。平泉縣の北。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野に成りて、金雞山のみ形を残す。先づ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は、衣が關を隔てて南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり。偕も義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷きて時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡  
卯の花に兼房見ゆる白毛かな  
兼て耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を残し、光堂はやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢と成るべきを、四面新たに圍んで、藁を覆うて、風雨を凌ぐ。暫時千歳の記念とはな

衣川 平泉の北を東流し、高館の北にて北上川に合す。  
和泉が城 和泉三郎の居城  
泰衡 秀衡の二男。  
衣が關 關趾衣川の東北にあり。  
南部 平泉地方より盛岡地方へ通ずる關門。  
國破れて 國破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心、烽火連三月、家書抵萬金、白頭搔更短、渾欲不勝簪。(杜甫)  
兼房 増尾十

れり。

五月雨のふり残してや光堂

尿前の關

南部道遙かにみやりて、岩手の里に泊る。小黑崎・みつの小島を過ぎて、なるこの湯より尿前トキマの關にかゝりて、出羽の國に越えんとす。此の道、旅人稀なる所なれば、關守にあやしめられて、漸うとして關をこす。大山をのぼりて日既に暮れければ、封人の家を見かけて、舍りをもとむ。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿するまくらもと

あるじの云ふ、是より出羽の國に大山を隔てて道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇差をよこたへ、檜の杖を携へて我々が先に立つて行く。けふこそ必ず危き目にもあふべき日

郎兼房。義經の老臣。白髮を亂して奮戦こゝに死す。  
經堂 天仁二年(一七六九)清衡の建立。  
光堂 又金色堂。天仁二年清衡の建立。  
三將 三代清衡・基衡・秀尊。  
三尊 彌陀三尊。  
岩手の里 宮城縣玉造郡。平泉より西南五十六軒餘。  
小黑崎・みつの小島 共に岩手山より鳴子に至る沿道の小驛。  
なるこの湯 今の鳴子温泉。玉造郡温泉村。尿前 鳴子の

なれと、辛き思をなして後について行く。あるじの言ふにたがはず、高山森々として一鳥聲きかず、木の下闇茂りあひて夜行くがごとし。雲端につちふる心地して、篠の中踏分け踏分け、水をわたり岩に蹶ツツきて、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せしをのこの云ふやう、此の道必ず不用の事有り、恙なう送りまゐらせて仕合したりと、悦びてわかれぬ。跡に聞きてさへ胸とどろくのみなり

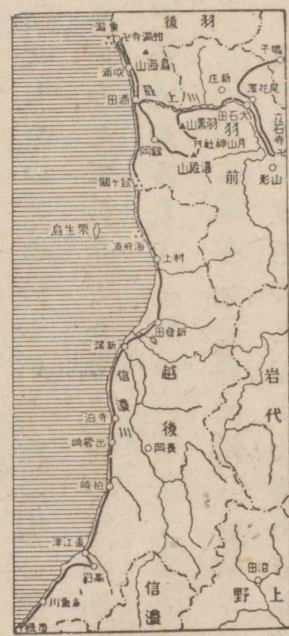
立石寺

山形領に立石寺と云ふ山寺あり。慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地なり。一見すべきよし人々のすゝむるによりて、尾花澤よりとつてかへし、其の間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。麓の坊に宿かり置きて、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土石老いて苔滑かに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音きこ

西二軒、舊藤。大山、鳴子より羽前へ越ゆる中山越といふ山路。一鳥鑿きかず、一鳥不レ鳴山更幽。(王安石) 雲端に土ふる。已レ入レ風燈。霧ニ雲端。最上の庄山形縣最上郡新庄。立石寺、山形縣東村山郡山寺村。天台宗。慈覺大師名は圓仁。天台第二の座主。尾花澤、山形縣北村山郡。ごてん、御殿林。山形縣東田川郡。はやぶさ、隼

えず。岸をめぐり岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行くのみおぼゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲  
最上川



(二其) 圖地行旅燕芭

北を流れて、果は酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。これに稻つみたるをや稻舟といふならし。白糸の瀧は青葉の隙々に落ちて、仙人掌岸に臨みて立つ。水みなぎりて舟あやふし。五月雨をあつめて早し最上川

最上川はみちのくより出て、山形を水上とす。ごてんはやぶさなど云ふおそろしき難所あり。板敷山の

雨  
天  
行

の瀧。東村山郡鹽川の北。板敷山、山形縣最上・東田川兩郡の界。酒田、山形縣飽海郡酒田港。稻舟、最上川のぼればくだる稻舟のいなにはあらずこの月ばかり。(古今集、東歌)

象 潟

江山水陸の風光數をつくして、今象潟に方寸を責む。酒田の湊より東北の方山を越え、磯を傳ひ、いさごをふみて、其の際十里、日影や、かたぶく頃、汐風眞砂を吹上げ、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に摸索して、雨も又奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蟹の苦屋に膝をいれて、雨の晴るゝを待つ。其の朝天能く霽れて、朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟を浮かぶ。先づ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡を訪らひ、むかふの岸に舟を上げば、花の上こごとよまれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。江上に御陵あり、神功皇后の御墓といふ。寺を干満珠寺と云ふ。此處に行幸ありし事いまだ聞かず、いかなる事にや。

此の寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさへ、其の蔭うつりて江にあり。西はむやむやの關

五月雨の頃。  
(兼好法師集)  
 象潟 秋田縣  
 由利郡鹽越  
 村。  
 鳥海の山 山  
 形縣飽海郡の  
 北境の山。  
 雨も又奇  
 水光激瀾チヂミ  
 好、山色空濛  
 雨亦奇。(蘇  
 東坡)  
 能因島 能因  
 法師の住みし  
 所といふ。  
 花の上こ  
 きさがたの櫻  
 け波にうづも  
 れて花の上こ  
 ぐあまのつり  
 ぶね(西行の  
 歌と傳ふ)  
 干満珠寺 蚌  
 満寺。延暦中、  
 慈覺大師の建  
 立。今曹洞宗。  
 むやむやの關

山形縣飽海郡  
 と秋田縣由利  
 郡との境なる  
 三崎峠にあり  
 しと。歌枕。  
 象潟や 前掲  
 蘇東坡の詩の  
 後聯、若把三西  
 湖一比二西子、  
 淡粧濃沫總相  
 宜。  
 西施 支那越  
 の國の美女。  
 加賀の府 石  
 川縣金澤市。  
 鼠の關 山形  
 縣西田川郡念  
 珠ヶ關村。  
 一ぶりの關  
 市振關。實は  
 越中境なる越  
 後の地。  
 卯の花山 富  
 山縣礪波郡藪  
 波村の南にあ  
 り。  
 くりからが谷  
 石川縣と富山

路をかぎり、東に堤を築きて秋田に通ふ道遙かに海北にかまへ  
 て浪打ち入る所を汐ごしと云ふ。江の縦横一里ばかり、俤松島に  
 かよひて又異なり。松島は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとし。  
 寂しさに悲しみをくはへて、地勢魂をなやますに似たり。  
 象潟や雨に西施がねぶの花  
 汐越や鶴はぎぬれて海涼し  
 佐 渡  
 酒田の名残日を重ねて、北陸道の雲に望む遙々のおもひ胸を  
 いたましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。鼠の關をこゆれば、  
 越後の地に歩行を改めて、越中の國一ぶりの關に到る。此の間九  
 日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。  
 文月や六日も常の夜には似ず  
 荒海や佐渡によこたふ天の川

金 澤

卯の花山くりからが谷をこえて、金澤は七月中の五日なり。爰  
 に大阪よりかよふ商人何處といふ者あり。それが旅宿を俱にす。  
 一笑と云ふものは此の道にすける名のほのぼの聞えて、世に知  
 る人も侍りしに、去年の冬早世したりとて、其の兄追善を催すに、  
 塚も動け我が泣く聲は秋の風  
 ある草庵にいざなはれて、  
 秋涼し手毎にむけや瓜茄子  
 途中吟、

あかあかと日は難面もあきの風  
 全昌寺  
 曾良は腹を病みて、伊勢の國長島といふ所にゆかりあれば、先  
 立ちて行くに、

縣の境にあ  
 何處 猿蓑集  
 中の作者。姓  
 名不詳。  
 一笑 金澤の  
 人、小杉氏、  
 通稱茶屋新  
 七、芭蕉の門  
 人。元祿元年  
 一月十六日  
 歿、年三十六。  
 長島 三重縣  
 桑名郡長島  
 村。  
 ゆきゆきて  
 いづくにか眠  
 り眠りて倒れ  
 ふさんと思ふ  
 悲しき道芝の  
 露 (山家集)  
 雙鳥の  
 雙鳥 俱北飛。  
 一鳥 獨南翔。  
 子富留 斯館。  
 我富 歸 故  
 郷。(漢書、蘇

武別 李陵  
 詩)  
 大聖寺 石川  
 縣江沼郡大聖  
 寺町。  
 全昌寺 大聖  
 寺町の南方に  
 ある禪宗の小  
 寺。  
 種の濱 福井  
 縣敦賀郡敦賀  
 灣の西岸。  
 ますほの小貝  
 汐染むるます  
 ほの小貝ひる  
 ふとて色の濱  
 とはいふにや  
 あるらむ(山  
 家集)  
 天屋何某 姓  
 名不詳。俳名  
 大翅なるもの  
 の祖父なり  
 と。  
 法華寺 日蓮  
 宗の寺。  
 路通 忌部氏。  
 美濃の人。芭  
 蕉の門人。



(三其) 圖地行旅蕉芭

ゆきゆきてたふれ伏すとも萩の原  
 と書置きたり行くものの悲しび、残るもののうらみ、雙鳥のわか  
 れて雲にまよふが如し。予も亦、  
 けふよりや書付消さん笠の露  
 大聖寺の城外、全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地なり。曾良  
 も前の夜此の寺にとまりて、  
 終宵秋風聞くやうらの山  
 と残す。一夜の隔て千里に同じ。吾  
 も秋風を聞きつゝ衆寮に臥せば、  
 明ぼのの空近う讀經聲すむまゝ  
 に、鐘板鳴つて食堂に入る。けふは  
 越前の國へと心早卒にして堂下  
 に下るを、若き僧ども紙硯をかゝへ階のもとまで追ひ來る。折ふ

し庭中の柳ちれば、  
 庭掃いて出づるや寺に散る柳  
 どりあへぬさまして草鞋ながら書捨つ。

種の濱

十六日、空霽れたれば、ますほの小貝拾はんと、種の濱に舟を走  
 す。海上七里あり。天屋何某と云ふもの、破籠、小竹筒などこまやか  
 にしたゝめさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風時のまに吹き着  
 けぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、佗しき法華寺あり。爰に茶  
 を飲み酒をあたゝめて、夕ぐれのさびしさ感に堪へたり。

寂しさや須磨にかちたる濱の秋  
 浪の間や小貝にまじる萩の塵

大垣

路通も此の湊まで出むかひて、美濃の國へと伴なふ。駒にたす

大垣庄 岐阜縣大垣市。  
越人 越智氏。越後の人。名古屋に住し芭蕉十哲の一人如行 近藤氏。大垣藩士、芭蕉の門人。  
前川子 津田氏。大垣の人。芭蕉の門人。  
荊口 宮崎氏。又東宇とも號し大垣藩士、蕉門の老參。子に此筋。千川。文鳥あり。  
蛤の 今ぞ知る二見の浦の蛤を貝合せとておほふなりけり(山家集)

けられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より來り合ひ、越人も馬をとばせて、如行が家に入り集る。前川子荊口父子、其の外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふが如く、かつ悦びかついたはる。

旅のものうさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の

遷宮拜まんと又舟にのりて、

蛤のふた見にわかれ行く秋ぞ

あやめ草足に結ばん草鞋の緒

暑き日を海に入れたり最上川

むざんやな甲の下のさりざりす

石山の石より白し秋の風

月清し遊行のもてる砂の上

芭蕉

同

同

同

*Handwritten notes in cursive script, including the text of the poems and additional commentary.*

曾我會稽山 一册。近松門左衛門の著。享保三年七月初めて興行す。國姓爺合戦「雪女五枚羽子板」と共に近松の三傑作と稱せらる。  
近松門左衛門 本名杉森信盛。新淨瑠璃の創始者。享保九年(二三八四)歿。年七十二。  
富士の御狩 建久四年(一八五三)。  
祐成 曾我十郎。幼名一萬。伊東祐泰の子。父の死後曾我祐信に養はる。建久四年歿。年二十

二三 曾我會稽山

近松門左衛門

名に高き富士の裾野の御狩の御遊、鎌倉の騒動にて、急ぎ歸御あるべしとの時刻も雨に事延びて、假屋の騒ぎもいつしかに、辻の篝も影薄く、晝の疲の手枕に、短き夜半を鐘の聲、夢より夢を結びけり。

時節よしと曾我殿原、出立つ祐成が装束は、母上より給はりし、秋の野に草盡し縫うたる練貫の單衣、村千鳥の直垂の袖を結んで肩にかけ、黒鞆卷の太刀を佩き、竹子笠の紐強く、上に下部の青合羽、陣松明に道照らせ、先に進めば五郎時致、是も母より給はつたる、白綾に鶴の丸縫うたる袷、揚羽の蝶の直垂、赤木の柄の腰差、源氏重代友切丸、肩に打ちかけ紙合羽、しめたる笠の怯れじと、後に續いて出立つたり。

二。時致 幼名宮王。兄と共に父の復讐を遂げて死す。年二十。  
友切丸 源頼光以来の源家の重寶。  
御寮 頼朝公。蒲殿 源範頼。祐經 工藤左衛門尉祐經。伊東祐次の子。  
天魔 第六天の魔王。其の名を波旬といふ。無量の眷屬あり。常に佛道を障礙す。破旬は梵語の轉訛。殺者悪者と譯す。

いかに時致、母の御恩を徒らに、今宵敵を討たずんば、不幸といひ世の人口、生きたる甲斐もあるまじきに、天の恵か降る雨に、御寮の御立ちは延引す、狩場の用意も事靜まる、殊には蒲殿の貸し給はつたるこの割符、頼朝公の膝元へも、通路自由と聞くなれば、祐經を討つは案の内、雨はいつも降りながら、今宵の雨ぞ身には染む、討死せしと聞えなば、思ひ切つたる御心にも、母の歎はいかばかり、悲しさよと涙ぐむ。仰にや及ぶべき、祐經は籠中の鳥、網代の魚、やはか洩し候べき、恐らくはこの時致、天魔破旬に出合ふとも、ちつとも怯まぬ魂、今宵の雨は身にかゝり、ぞつこん徹つてわぢわぢと、物悲しう罷りなる、敵に出合ひ働かば、所々の死を遂げんも計られず、最期の盃一つ飲うて給はれと、腰に付けたる懸烏帽子に、降來る雨を受溜めて、祐成が手に渡せば、なう、七度結びて兄となり、六度契りて弟となると傳へ聞く、死に變り生き變り兄

秩父 秩父の住人、畠山重忠。  
本田次郎 重忠の臣。一谷の戦に戦功ありし人。

弟の縁は切るまじと、さらりと乾して指しければ、時致とつて押戴き、兄は親にて候へば、母上の御盃も是に籠り、天の甘露、仙家の漿、この酒に勝らんやと、受けて飲みけるその中に、五月雨のいつか一しきりおだやみて、空さりげなく清々と、北斗の光鮮かに晴れ渡る。斯る所に假屋俄に騒ぎ立ち、お先手は發足の御觸あり、馬よ鞍よと犇けば、兄弟彌、氣も急かれ、祐經が假屋とてもさぞあらん、これ迄忍びし甲斐もなく、此の雨の降止む事、神明にも見放され、よつく武運に盡きしかと、拳を握り齒を鳴らし、虚空を睨んで立つたる所に、秩父の執權本田の次郎近經、小具足に身を固め、本陣の夜廻りしてけるが、曾我殿原と見るよりも、近々と歩み來る。兄弟誰そと咎むれば、波に揺らるゝ沖津船、知る邊の磯は此方ぞと、囁く聲に祐成はつと嬉しく、重忠公の御情、又は御身の御懇情、この度に限らねども、御禮申す事もなく、禮儀知らずとや思さ



會稽の恥 越  
王勾踐の父、  
吳王闔閭に破  
らる。勾踐因  
りて闔閭を破  
る。闔閭の子  
夫差勾踐を會  
稽山に破り、  
勾踐和を乞  
ふ。之を會稽  
の恥といふ。  
其の後勾踐、  
范蠡を謀臣と  
し、臥薪嘗膽  
の苦を積み、  
遂に夫差を敗  
りて會稽の恥  
を雪ぐ。  
伊東 名は祐  
親。曾我兄弟  
の祖父。

れん、今宵年來の大望達せんと存ずる所、俄に雨晴れ假屋假屋は  
出足の用意、この騒ぎには覺束なし、この儘歸つていつの時をか  
期すべき、無二無三に切込んで、兄弟屍を晒す所存、重忠公へ一生  
積る御禮は、貴殿の執成頼み入ると言ひければ、兄弟の耳に口を  
寄せ、氣遣ひばしし給ふな、祐經は明日君の御馬の御供、それ故假  
屋も寢靜まる、此方へ此方へ靜かにと、道の案内の杖柱、嬉しさ類  
ひはなかりけり。是こそ祐經が臥床なり、心靜かに本意を遂げ、會  
稽の恥を雪がれよと、いと懇ろの詞に縋り、御案内の程、五百生の  
體を焼くともいかでか報じ盡くすべき、随つて通路のこの割符、  
蒲殿より密かに拜借せしかど、御切腹のあとなれば、返辨申さん  
様もなし。我々が死骸にあれば、蒲殿こそ御勘氣の伊東が末の曾  
我に與し、反逆の族よと、死後の虚名に御骸を瀆さん事、御恩を却  
つて仇にて報ずる理、近經殿に預け置く、然るべく頼み存ずると、

二枚の小札を手に渡せば、尤も尤も、近經に任されよ、主人重忠惡  
しくは計らひ申されまじ、老母の事もゆめゆめ鹿略候まじ、今暫  
くと存ずれども、役目なれば知らぬ顔、弓矢の禮儀これまでと、本  
田は假屋に入りけり。

今は何をか期すべきと、兄弟合羽なぐり捨て、本田が教へし敵  
の假屋は是なりと、木戸駒寄せを飛超え跳超え、兄弟莞爾と打笑  
ひ、天にも上る心地にて、難なく臥床に討つて入る。次に臥したる  
宿直の侍、足音に目を覺し、すは盗人よと呼ばはつて逃出づる。假  
屋假屋に聞付けて、そりや盗人よ御立ちよと、騒ぎの上に又混亂、  
相圖響かす太鼓鉦、かんかんどん、どんくさい、又雨が延びて  
來たお立ちが降ると入るもあり、雨の足音さつさつさ、人の足音  
どろどろどろ、右往左往にもてかへす。其の際に兄弟は、敵工藤祐  
經を思ひのまゝに討ちおほせ、門外に走り出で、袂を絞つて喉を



お、よい敵ござめり、仁田なればとて必ず勝つに極らず、人穴の地獄の鬼猪おしなど相手にしたとは違ふべし、十郎祐成の手並を見よと打つて懸る。え、無分別者は是非なしと、閃く太刀影、雨夜の星、電火を飛ばして切結ぶ。更に勝負もなかりし所に、花やかに鎧うたる武者一人、坂東聲を打揚げ、あら穢らはし、我が名を盗む曲者、高名を貪るか、伊豆の國の住人、仁田の四郎忠常とは我が事見参せんと呼ばはつたり。祐成飛退り、六十餘州は廣けれども、頼朝の幕下に仁田ならで、武士は無きか、あら仰々し、瘦浪人一人か、二人討たんとて、彼も仁田此も仁田、にたにたしき表裏者、二人とも餘さじものと打つて懸る。

やあ後から出て仁田とは人真似か、祐成は討たせじと懸隔たれば、掻い潜り、打付くれば懸隔て、祐成一人に仁田は二人、入亂れて揉合ひしが、陽に開いて打つ太刀を、後の仁田が陰に閉ぢ、受流

して裾を薙ぐ。祐成が馬手の高股膝口かけて切落され、弓手ばかりの片足立、二打ち三打ち打つかひも、百手を碎く氣も弱り、犬居にどうと轉まびしが、弟の時致はいづくにぞ、祐成こそ打たれたれ、死出の山にて待つべきぞ、言ふ事もこれまで、さあいづれなりとも首を打て、臆おそれたるかと思懸くる。いや、討手の實ぢ否ご紛らはしく、黄泉よみの障も悼はしし、誠の仁田が面を見せ、名字盗みを面縛させん、松明出せと呼ばはれば、忠常が下部ども、提灯取つて差上ぐる。仁田と仁田が顔さし合はせ、やあ二の宮、以前仁田と名乗りつるは御邊よな、さて浅間しや、やい、兎死すれば狐是を悲しむとは、同じ類に禍の來らんことを悼む故、元縁者の端くれ、御咎の飛ばしる掛らん事を痛み、祐成を討つて一味せぬ身の言分とは、はて能い思案、女房を離別せしは他人に成つて、兄弟が力とならん心底、尤も斯くあるべき事と感心せしに、さては立身の爲の離別か、

彌猴が云々  
愚人が賢者を  
罵る譬、帝釋  
天は佛教に所  
謂六欲天の第  
二天(忉利天)  
の主にて須彌  
山の頂に居る  
といふ。

御分別御分別、由なき仁田呼ばはりが奇怪さ、思はず駈合はせ、あつたら若者を手に懸けし残念さよと、大きに怒つて恥ぢしむる。  
二の宮からからと笑ひ、彌猴が帝釋天を嘲るとやら、己が足らざるを以て、人の大智を計らんとして、却つて愚痴が顯はるゝ、二の宮が曾我を討たんと思はば、けふまで何の待つべきぞ、慙か功ある男子と思ひ、名字を借つて追散らし、某他人になつたる徳、天下晴れて匿ひ置き、時節を待つて世に出さんと、手を取つて引かぬばかりにあしらへども、祐成たじろかねば詮方なし。手柄はしたし怖くはあり、二の宮が聲を後楯に駈合はせ、溢れ幸、指果報、あつたら若者を思はず討つて残念などとは、義を知つた武士の言ふこと、猪に乗つて高名とする、獵師風情の言分には、過ぎた過ぎたと言はせも敢へず、やあ小舅をしとめんとする程の不仁もの、武士の情は存じも寄るまい、祐成が首は御邊急ぎ討つて手柄に

せい、いや人に貰うて手柄にする安清ならず、御邊討つて手柄にせい、いや二の宮討て、仁田討て、二の宮討てと責めかけられ、おゝ小舅の曾我を討つ刀、二の宮は持合はせず、これで討てれば御邊討てと、祐成と切合はせし、太刀をからりと投出す。  
忠常おつ取り、提灯に透して見ればこは如何に、物打より切先まで刃を石にてたゞき潰し、打ちみしやいだる榎同前、むゝ最前よりこの太刀にて打つ眞似したるか、あつあ頼もしとも優しとも、弓矢取る身の手本ぞや、雑言御免二の宮殿、それこそ互、悪口御免、仁田殿、和殿の如く情ある友を持つたる五郎十郎、御分の如く誠ある縁者を持つたる曾我殿原、一生花實も咲かざりし、天運の拙さよと、二人不覺の落涙に、鎧の袖をぞ絞りける。  
今を限りの祐成起直り、縁者と申すも元は他人の二の宮殿、よしみなき仁田殿御芳志は、五百生生き變り死に變るとも忘るま

曾我會稽山  
曾我兄弟の復讐を骨子として作れる淨瑠璃。

じ、御手に懸り討たるゝこと、祐成はなんぼう果報の者、首討つてたべ疾く疾く、といへども二人涙に暮れ、さし俯いて居るところに、御所の方より聲々に、曾我の五郎時致、御前近く亂れ入り、御所の五郎丸が組みとめ、御假屋安穩なりと呼ばはる聲に、祐成、あれ聞き給へ、時致は召捕られしとや、祐成が最期いかにと案ずべし、疾く首討つて、兄が最期清かりしと、悦ばせてたべ仁田殿頼み入る、南無阿彌陀佛、彌陀佛と、首さし伸べて目を閉づる。

名ざしの上は承る、御心易かれと、太刀拔持つて後に廻り、振上ぐれば、祐成が首は前にぞをちかたに、はや曉の八つの鐘、鳥も啼く啼く人も泣く、ねをなく千鳥の直垂に、首よ涙よ包みても、洩れて名高き富士の嶽、曾我兄弟が會稽山、骸は裾野に埋めども、譽は三穗の松の風、他の國まで吹傳へ、昔語を今の世の、人のねぶりを覺しける。(曾我會稽山)

## 二四 太郎

芥川龍之介

芥川龍之介  
東京帝國大學  
英文科出身。  
俳號我鬼、小説家。昭和二年歿、年三十六。  
畢山 渡邊氏。通稱は登。名は定靜。三河國田原侯の臣。幕木の志士。畫家。天保十二年(二五〇一)歿、年四十八。  
八犬傳 南總里見八犬傳。百六卷。

畢山が歸つた後で、馬琴はまだ残つてゐる興奮を力に、八犬傳の稿を續けるべく、平生のやうに机に向つた。先を書續ける前に、昨日書いた所を一通り讀返すのが、彼の昔からの習慣である。そこで、今日も彼は細い行の間へ、べた一面に朱を入れた何枚かの原稿を、氣を付けてゆつくり讀返した。

すると、何故か書いてあることが自分の心持とびつたりしない。字と字との間に不純な雜音が潜んでゐて、それが到る處で全體の調和を破つてゐる。彼は最初それを彼の痼が昂ぶつてゐるからだと解釋した。

「今の俺の心持が悪いのだ、書いてあることは、どうにか書切れ、る所まで書切つてゐる筈だから。」

さう思つて、彼はもう一度讀返したが、調子の狂つてゐることは、前と一向變りがない。彼は老人とは思はれないほど、心の中で狼狽し出した。

「このもう一つ前はどうかだらう。」

彼は其の前に書いた所へ眼を通した。すると、これも亦徒らに粗雑な文句ばかりが、雑然として散らかつてゐる。彼は更に其の前を讀んだ。さうして又その前の前を讀んだ。

併し、讀むに従つて、拙劣な布置と亂脈な文章とは、次第に眼の前に展開して來る。そこには何等の映像をも與へない敘景があつた。何等の感激をも含まない詠嘆があつた。さうして又何等の理路をも辿らない論辯があつた。彼が數日を費して書上げた何回分かの原稿は、今の彼の眼から見ると、悉く無用の饒舌としか思はれない。彼は急に心を刺されるやうな苦痛を感じた。

「これは初から書直すより外はない。」

彼は心の中で斯う叫びながら、忌々しさうに原稿を向うへ突きやると、片肘ついてころりと横になつたが、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼は此の机の上で、弓張月を書き、南柯の夢を書き、さうして今は、八犬傳（白、黒、赤、青、黄、白、黒、赤、青、黄）を書いた。この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎮、臺の形をした銅の水差、獅子と牡丹を浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立、さういふ一切の文房具は、皆久しい以前から彼の創作の苦しみに親しんでゐる。それらの物を見るにつけても、彼は自ら今の失敗が彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな、彼自身の實力が根本的に怪しいやうな、思はしい不安を禁ずることが出來ない。

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり事によると人並に己惚の一つだつたかも

弓張月 棟説  
弓張月三十  
卷。

南柯の夢 三  
七全傳南柯の  
夢。六卷。

端溪 支那廣  
東省にある硯  
石の名産地。  
蹲螭 蹲まれ  
る螭（みづち）  
の形。

比倫 比倫

知れない。」

かういふ不安は、彼の上に何よりも堪へ難い、落莫たる孤獨の情を齎した。

彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜であることを忘れるものでないが、それだけに、又同時代の屑々たる作者輩に對しては、傲慢であると共に飽くまでも不遜である。その彼が、結局自分も彼等と同じ能力の所有者だつたといふことを、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたといふことを、どうして易々と認められよう。而も彼の強大な「我」は「悟り」と「諦め」とに避難するには、餘りに情熱に溢れてゐる。

彼は机の前に身を横たへたまゝ、親船の沈むのを見る難破船の船長のやうな眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戦ひ續けた。若し此の時、彼の後の襖がけたゝましく開け

遼東の豕  
東有豕、生、子、白頭、異、而、獻、之、行、至、河、東、見、之、群、豕、皆、白、懷、慙、還。  
(後漢書朱浮傳)

放されなかつたら、さうして、お祖父様只今。」といふ聲と共に柔かい小さな手が彼の頸へ抱付かな

八犬傳挿繪



かつたら、彼は恐らく此の憂鬱な気分の中に何時までも鎖されてゐたことであらうが、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供だけが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よく飛上つた。

「お祖父様只今。」

「おゝ、よく早く歸つて來たな。」

この語と共に「八犬傳」の著者の皺だらけの顔には、別人のやうな悦が輝いた。

茶の間の方では、痛高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の聲が、賑やかに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から伴の宗伯も歸り合はせたらしい。太郎は祖父の膝に跨がりながら、それを聞きすましてもするやうに、わざと眞面目な顔をして天井を眺めた。外氣にさらされた頬が赤くなつて、小さな鼻のまはりが息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね。」

栗梅の小さな紋付を着た太郎は、突然かう言出した。考へようとする努力と、笑ひたいのを怵へようとする努力とで、鬢が何度も消えたり出来たりする。それが馬琴には自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日?」

「御勉強なさい。」

馬琴はとうとう噴出した。しかし、笑の中ですぐ又語を繼ぎながら、

「それから?」

「それから、えゝと痼癢を起しちやいけませんつて。」

「おやおやそれきりかい。」

「まだあるの。」

太郎は斯う言つて、絲鬢奴の頭を仰向けながら、自分も亦笑ひ出した。眼を細くして白い齒を出して、小さな鬢を寄せて笑つてゐるのを見ると、これが大きくなつて世間の人間のやうな憐むべき顔にならうとは、どうしても思はれない。馬琴は幸福の意識に溺れながら、こんなことを考へた。さうして、それが更に又彼の心をくすぐつた。



「まだ何かあるかい？」

「まだね、いろんなことがあるの。」

「どんなことが？」

「え、とお祖父様はね、今にもつと偉くなりますからね。」

「偉くなりますから？」

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」

馬琴は思はず眞面目な聲を出した。

「もつと、もつと、よく辛抱なさいつて。」

「誰がそんなことを言つたのだい。」

「それはね。」

太郎は悪戯いたづらさうに、ちよいと彼の顔を見た、さうして笑つた。

「だあれだ？」

「さうさな、今日は御佛参に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて来たのだらう。」

「違ふ。」

断然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰を擡げながら、顔を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「浅草の観音様がさういつたの。」

かう言ふと共に、この子供は家内中に聞えさうな聲で嬉しさに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛退いた。さうして、うまく祖父をかついだ面白さに、小さな手を叩きながら、轉げるやうにして茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心中に、嚴肅な何物かが刹那に閃いたのは此の時である。彼の脣には幸福な微笑が浮かんだ。それと共に、彼の眼には何時か涙が一杯になつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふ所でない。この時この孫の口から斯ういふ語を聞いたのが不思議なのである。  
「觀音様がさう言つたか。勉強しろ。癩癩を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歳かの老藝術家は涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。(傀儡師)

四月十五日 丁酉 晴

予、今日入湯、且太郎机邊を去らずにつき水  
辭後傳評、僅かに四丁これを稿し四時就寢。

(馬琴日記天保二年)

朝比奈知泉  
元東京日日新  
聞主筆。評論  
家。文久三年  
生。

## 二五 賴山陽

朝比奈知泉

徳川氏の季年は、それ猶歐洲第十七世紀の末葉の如きか。彼に在りては、文學再興して、古文辭その盛行の極に達したれども、近世國語の文辭は猶幼稚なるを免れず。我に在りては、戰國の餘習已に脱して、文教は靡然として海隅に遍く、漢土の儒學、詞藝その秀を鍾め、その華を競ひたれども、わが近世文學は纔かに萌芽を發したるのみ。若しこの時に方り、一世の偉才を生じて以て我が文學を振ふものあらんか、その風動は全國に影響して、感化は到る處に行はれ、或は獎勵せられ、或は誘導せられ、或は挑發せられて、才俊の士は彬々として輩出し、以て文藝の圃に遊ぶべく、我が文學の黄金時代は必ず三四十年前に來りしならん。

チョーサー (1630-1660) 英國の詩人。  
 スペンサー (1552-1596) 英國の詩人。  
 ミルトン (1608-1674) 英國の詩人。  
 シェークスピア (1564-1616) 英國の劇作家。  
 ゲーテ (1749-1832) 獨逸の詩人。  
 シルレル (1759-1805) 獨逸の劇詩人。  
 レッティング (1729-1771) 獨逸の文學者批評家。  
 ダンテ (1265-1321) 伊太利の詩人。  
 ペトラルカ (1304-1374) 伊太利の詩人。

抵詩人ならざるはなく、その衰を振ふもの亦詩人ならざるはなし。チョーサー・スペンサー・ミルトン・シェークスピアの英文學に於ける、ゲーテ・シルレル・レッティングの獨逸文學に於ける、ダンテ・ペトラルカの伊太利文學に於ける、皆然らざるはなし。乃ちわが文學を振へる張本も亦詩人に求めざるべからず。余は古體詩家に於て眞淵・景樹二翁を得、近體詩家に於て近松・竹田二叟を得たれども、出づるに或はその時を得ず、學或はその道に適せず、才或はその志に合はず。是を以てその勢力の及ぶところ局限せられて、未だ文學の全體に向つてその積衰を振ふこと能はざりしを見る。余はかの諸家の外に於て、その才學よく權度を得て、恰當の時世に遭遇しながら、稀世の偉才を抱いてその用處を誤りたるが爲に、日本文學の泰斗たる名譽を得そこなひ、徒らに史家なり、策家なり、文家なり、詩家なりといはれたるのみにて、冠するに絶

眞淵 賀茂氏。號は縣居。前出。  
 景樹 香川氏。號は桂園。天保十四年(二五〇三)歿。年七十六。  
 近松 通稱門左衛門。號は巢林子。前出。  
 竹田 初代出雲掾の子。  
 賴山陽 名は襄。字は子成。久太郎と稱す。安藝の人。天保三年(二四九二)歿。年五十三。  
 老博士 儒者柴野栗山。文化四年(二四六七)歿。年七十四。

世絶代の文豪を以てせらるゝに至らず、萬能達して一心足らず。といふが如き嘲をも受くるに至りたる一人物を發見し、未だ曾てその人と、その才とを痛惜せずんばあらず。余は今日世人が猶その人を崇拜するを見て、聊か自ら慰むる所なきにしもあらずといへども、退いてこれを再考すれば、更に深く惜しむ所なかるべからず。その人を誰とかする。山陽賴氏はなり。

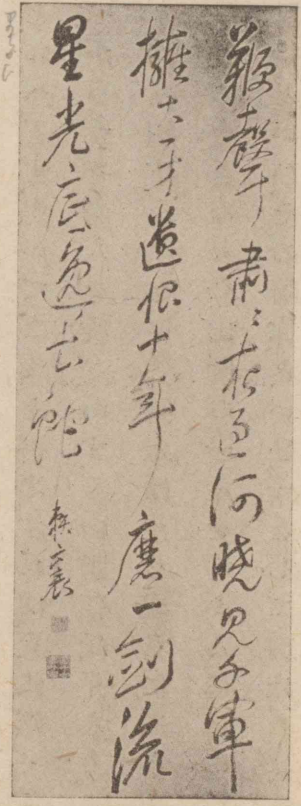
「詩は別才なり。」といひ、詩人は生る、成るにあらず。といふは、東西一般の金言なり。今山陽の一生を考ふるに、その性格といひ、その言行といひ、その著作といひ、一として詩ならざるはなし。その童歲に當り、夙成を以て老博士を驚かしたるは詩なり。その父母を懷ふに厚く、その王室を懷ふに厚く、天下國家を懷ふに厚く、情の熱するところ、常に理の冷かなるに勝ちたるは詩なり。その北馬南船、行李卸さざるところなく、春花秋月、遊屐遍からざるところ

政記 日本政  
記十六卷。神  
武天皇より後  
陽成天皇に至  
る二千二百年  
間の編年史。  
外史 日本外  
史二十二卷。  
源平二氏より  
徳川氏に至る  
武家諸代の歴  
史。  
山陽筆蹟  
鞭聲蕭々夜過  
河。曉見千軍  
擁大牙。遺恨  
十年磨二劍。  
流星光底逸  
長蛇。

頼襄

なきは詩なり。その吟域を撤して諸生を待ち、禮貌を外にして王侯に接するは詩なり。山陽の性格言行、誰かこれを詩にあらざといはん。

試にその著作の史篇を見よ。政記の一書は固より多とするに



山陽筆蹟

足らず。外史何の取る所ぞ。その議論は平凡のみ。その事實は

謬誤のみ。その體裁は偏失のみ。然れどもその筆墨の靈妙活動、殆ど天馬空を行く趣あり。敘事或は精、或は疎、或は長、或は短。精にして長なるときは、微として穿たざるなく、細として及ばざるなし。疎にして短なる時は、或は脈々の餘情を含み、或は嫻々の餘韻を

存す。争戦を敘すれば讀者をして汗を握らしめ、別離を敘すれば讀者をして涙に咽ばしむ。而してその敘論の如き、俯仰低回、感慨淋漓、誠に讀者をして一唱三歎せしむるものあり。是等の文字、是等の思想、果して如何なる天才より流出したるものぞ。その題目を擇ぶに源平以後の争戦記を採りたるが如き、その事實に於ては博引旁搜と明證確説とを主として、猶讀者を了悟せしむるを務めず、専らその文章の靈動して讀者をして感激せしめんとしたるが如き、特に王室と忠臣とを思ふ情の切なるより、正記を立つる標準一定ならずして、その體裁に前後の矛盾を來せるを顧みざりしが如き、半生の精力を費して編述したる二十二卷の外史は、看來れば一篇無韻の敘事詩たるのみ。

試にその論策文章を見よ。民政といひ、市糶トキといひ、水利といひ、邊防といひ、迂疎空濶にして實用に施すべからざるもの比々と

雁の字中にも物  
列を多形に  
重の樹園  
とんりのりさ  
新機の後(七)

して皆是なれども、その熱情の溢れたる、その文勢の壯なる、頗る少年の大聲放語するに似たるものあり、而して外史以前の文章に就きてその精華を求むるに、その寸鐵人を殺すの妙、多くは小品の文字にあり。その形體は即ち論策たり、文章たり。その本質は即ち想像のみ、詩詞のみ。去りてその詩を見よ。雄健なるものあり、典雅なるものあり、適麗なるものあり、輕妙なるものあり。而してその最長を見るは歌行にあり、樂府にあり。料を史傳に取りてこれを詩詞に寓したるものあり。山陽亦自ら以て得意とし、余不欲詠物、詠物不若詠史。史中有無數好題目、隨讀淺深皆可成眞詩。舍之而曰雁字鶯梭、無爲也。とはその平常の持論なりき。亦以てその才の日本の文學を振ふに足りしを見るべきなり。余嘗てその戯に作れる今様を読み、その跌宕飄逸、自ら不群の趣あるに服し、思へらく、この詩才に加ふるに彼の史傳の嗜好あり。もし馳驟縱橫、

李北地 名は  
夢陽。明代復  
古學の大家、  
詩人。  
嚴海珊 名は  
遂成。海珊は  
號。清の詩人。

奇想を天外に飛ばし、その事實に拘泥することなく演義述作する所あらしめば、その造詣何ぞ唯李北地嚴海珊にして止まんや。わが史傳は未だ多く題詠に入らず。潛心好案を求め、研精妙句を探り、その外史に灑きたる心血を傾倒して、これを詩賦に注がんか、儼然たる敘事詩を作りて、わが文學世界を風靡せんこと難からざりしならん。惜しいかな、漢土の詩に僻して固有の天才を萎縮し、經濟の學に志を奪はれて専ら功力を詩に用ひざりしこと。余が山陽の専ら詩人とならざりしを惜しむ理由頗る多し。今且く之を擧げんか。詩は別才なり。而して詩才敏妙、その天稟に出づ。これ一なり。詩人は料を取るに自ら新機軸を求むべし。而して史傳を以て料とすることその卓識に發す。これ二なり。詩人は愛情の熱肺腸なかるべからず。而して尊王の誠と忠臣義士を思ふ情とは、面に溢れて背に洩し。これ三なり。而して余が特に表彰せ

江木鰐水 名  
は、山陽の  
門人。明治十  
四年、年七  
十二。

前兵兒話 衣  
至、肝、袖、衣

腕、腰間、秋水  
鐵可、斷、人、觸

斬、人、馬、觸、斬  
馬、十八、結

交、健、兒、社、北  
客、能、來、何、以

酬、彈、丸、耐、藥  
是、購、產、客、若

不、屬、塵、好  
以、實、刀、加、三

彼、頭、カ、本  
蒙、古、來、日、本

樂、府、の、一、弘  
安、四、年、蒙、古、入

寇、の、事、を、詠、じ  
た、る、もの。

古、賀、穀、堂、名  
は、謙、佐、賀、藩

ざるべからざる第四の理由あり。余曾て江木鰐水の作りたる山陽先生行狀を讀み、その常曰「謂我才子未悉我者也、謂我能刻苦者、眞知我矣」といふに至り、竊にその實を失へるにあらざるかを訝りしが、後、かの前兵兒話並に蒙古來の原稿を見るに及び、その苦心經營一句も苟もせざりし實跡を審にし、かつその古賀穀堂を訪ひ、初、その千言立ちどころに成る敏才に驚きしが、數月を隔てて再び訪ひたる時、その文稿の依然として改刪する所なかりしを見て、茲に與し易きのみを念を起したりしといふ逸事を聞き、その意匠慘澹、勉勵刻苦の勞を厭はざる忍耐あるを明認し、坐ろに景慕の情を催したり。蓋し創意の才は必ず刻苦の力と相俟ちて後、始めて絢爛の華彩を發すべし。余が山陽を惜しむ第四の理由とするは、即ち斯の經營刻苦の氣力のみ。

又山陽が當時の儒者の如くに經義に耽り、章句訓詁の末を爭

の儒者。天保  
七年(二四九  
六)歿、年五  
十九。

ふ風なかりしは、頗るその才の發達に便なりしなるべしと雖も、かの經濟實用を以て學問の唯一本旨なりと考ふるに至りては、山陽亦その常套を襲ふを免れず。つらつら山陽の才幹を窺ふに、政治吏務はその長ずる所にあらざりしが如し。則ち早く自ら計をなし、區々たる論策を作るを輟め、大いに詩に奮はば、その成功何ぞ當に今日の名聲に止るのみならんや。人或は謂はん、山陽は外史を著して一世を鼓舞し、大いに尊王の氣象を喚起して、遂に維新中興の遠因をなせり。若し外史を作らざる一詩人にて止まんか、何ぞ斯の大功を奏するを得ん。と。嗚呼、これ詩を知らざるもの言のみ。詩の人心を感發するは、その勢力遙かに散文に過ぐ。外史果して能く維新中興の遠因をなせりといはば、外史中の事實を敷衍して之を詩にせるもの、亦豈その遠因となる能はざらんや。且外史の如きは、その文章如何に靈妙なりとも、今日の史學

父 春水。名は惟寛。幕府の儒官。文化十三年(二四七六)歿、年七十一。

より之を見れば、小説と實録との間に横たはる一種の不可思議物たり。史の名目を以てしては、決して完璧なりといふ能はず、上乘なりといふ能はず。焉ぞ始めより純然たる詩篇たるの愈れるに若かんや。柴野博士は山陽童時の詩を見て嘆賞し、實材たらしむべし、詞人たらしむべからず。とて、山陽の父に勧めて史を學ばしめたりといへり。博士の見、亦時流を脱せずと雖も、その史を學ばしめたるは可なり、その遂に修史の業に志すに至らしめたるは、余輩が山陽の爲に再四歎惜する所なり。(近世名家文鈔)

頼山陽

十有三春秋

逝ク者ハ已ニ水ノ如シ

天地始終無ク

人生生死有リ

安ンゾ古人ニ類シテ

千載青史ニ列スルヲ得ンヤ

### 二六 蘭學事始

杉田玄白

さて、その日の解剖事終り、とてもこのことに骨骸の形をも見るべしと、刑場にありし骨共を拾ひとりて、數々を見しが、すべて舊説とは相違にして、たゞ和蘭圖に差へる所なきに、皆驚嘆せるのみなり。

歸路は、良澤、淳庵と翁との三人同行なり。途中にて語り合ひしは、偕々今日の實驗、一々驚き入る。且これまで心付かざりしは恥づべき事なり。苟も醫の業を以て互に主君主君に仕ふる身にして、その術の基本とすべき吾人の形體の眞形をも知らず、今まで一日一日とこの業を勤め來りしは面目もなき次第なり。何とぞこの實驗に基づき、凡そにも身體の眞理を辨へて醫をなさば、この業を以て天地間に身を立つるの申譯もあるべし。と、共に嘆

蘭學事始 二卷。杉田玄白著。文化十二年(二四七五)成る。明治二年刊行。杉田玄白名は翼。醫師。蘭學者。文化十四年歿、年八十五。その日 明和八年(二四三二)三月四日。良澤 前野氏。享和三年(二四六三)歿、年八十一。津庵 中川氏

ターフルア  
ナトミア  
和蘭語の人體  
解剖書。解體  
新書の原書。

息せり。良澤も「げに、尤も千萬同情の事なり。」と感じぬ。その時、翁申せしは、何とぞこの「ターフルアナトミア」の一部新たに翻譯せば、身體内外の事分明を得、今日療治の上の大益あるべし。いかにもして通詞等の手をからず、読み分けたきものなり。」と語りしに、良澤曰く、「予は年來蘭書よみ出だし、度き宿願あれど、これに志を同じうする良友なし。常々これを慨き思ふのみにて日を送れり。各がたいよいよこれを欲し給はば、我が前の年長崎へもゆき、蘭語も少々は記憶し居れり、それを種として共々よみ掛かるべしや。」といひけるを聞き、それは先づ喜ばしきことなり。同志に力を戮せ給はらば、憤然として志を立て、一精出し見申さん。」と答へたり。良澤これを聞き、悦喜斜めならず。然らば善はいそげといへる俗説もあり、直ちに明日私宅へ會し給へかし。如何やうにも工夫あるべし。」と、深く契約して、その日は各宿所宿所へ別れ歸りたり。

十年の長  
の時良澤四十  
九才、玄白三  
十九才。  
二十五字  
ルファベット。

その翌日、良澤が宅に集り、前日のことを語り合ひ、先づ、彼の「ターフルアナトミア」の書にうち向ひしに、誠に艦舵なき船の大海に乗り出だせしが如く、茫洋として寄るべきなく、只あきれにあきて居たるまでなり。されども、良澤は豫ねてよりこの事を心に掛け、長崎までもゆき、蘭語並に章句語脈の間の事も少しは聞き覚え、聞きならひし人といひ、齢も翁などよりは十年の長たりし老輩なれば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐ事となしぬ。翁は、いまだ二十五字さへ習はず、不意に思ひ立ちし事なれば、漸くに文字を覚え、彼の諸言をもならひしことなり。さてこの書を読み、如何様にして筆を立つべしと談じ合ひしに、とても始より内象の事は知れがたかるべし。この書の最初に仰伏全象の圖あり。これは表部外象の事なり。その名處は皆知れたる事なれば、その圖と説の符號を合はせ考ふることは、取付き



フルヘツヘン  
高まる、持ち  
上がる等の意  
ウオールデン  
ブツク  
辭書。

やすかるべし。圖の初とはいひ、かたがた先づこれより筆を取り  
始むべしと定めたり。即ち「解體新書形體名目篇」これなり。そのこ  
ろは「テ」の「ヘツト」の、又「アルス」「ウエルケ」等の助語の類も、何れが何  
やら心に落付きて辨へぬ事ゆゑ、少しづつは記憶せし語ありて  
も、前後一向にわからぬ事ばかりなり。譬へば「眉」といふものは目  
の上に生じたる毛なり」と有るやうなる一句、彷彿として、長き日  
の春の一日には「明らめられず。日暮るゝまで考へ詰め、互ににら  
み合ひて、僅か一二寸の文章、一行も解し得る事ならぬことにて  
有りしなり。

また或日、鼻の所にて「フルヘツヘンド」せしものなりとあるに  
至りしに、この語わからず。これは如何なる事にてあるべきと考  
へ合ひしに、いかにもせんやうなし。その頃「ウオールデンブツク」  
といふものなし。やうやく長崎より良澤求め歸りし簡略なる一

連城の玉 秦  
の昭王が十五  
城と交換せん  
としたりとい  
ふ趙の惠王所  
藏の名玉。

小冊ありしを見合はせたるに、「フルヘツヘンド」の釋註に、木の枝  
を斷ちたる迹、その迹「フルヘツヘンド」をなし、また庭を掃除すれ  
ば、その塵土聚まり「フルヘツヘンド」といふ様によみ出だせり。  
これは如何なる意味なるべしと、又例の如くこじつけ考へ合ふ  
に、辨へ兼ねたり。時に、翁思ふに、木の枝斷りたる跡癒ゆれば堆うづたか  
なり、又掃除して塵土あつまればこれもうづたかくなるなり。鼻  
は面中に在りて堆起せるものなれば、「フルヘツヘンド」は堆とい  
ふことなるべし。然ればこの語は「堆」と譯しては如何といひけれ  
ば、各之を聞きて甚だ尤もなり、「堆」と譯さば正當すべしと決定せ  
り。その時のうれしさは、何にたとへんかたもなく、連城の玉をも  
得し心地せり。

此の如き事にて推して譯語を定めり。其の數も次第次第に増  
しゆく事となり、良澤のすてに覺え居し譯語書き留をも増補し

けるなり。その中にも「シンネン」などいへる事出でしに至りては、一向に思慮の及びがたき事も多かりし。これらは亦往々ゆづは解くべき時も出来ぬべし。先づ符號を付け置くべしとて、丸の内うちに十文字を引きて記し置きたり。其の頃知らざることば、轡し十文字と名づけたり。毎會いろいろに申し合はせ、考へ案じて、解すべからざる事あれば、その苦しきの餘り、それもまた「くつわ十文字」「くつわ十文字」と申したりき。然れども爲すべき事は固より人に在り、成るべきは天あまにあり。の喩の如くなるべしと、此の如く思ひを勞し、精を研り、辛苦せしこと一ヶ月に六七回なり。その定日は怠りなく、わけもなくして各相集り會議して讀み合ひしに、實に不味者あじわは心とやらにて、凡そ一年餘も過しぬれば、譯語も漸く増し、讀むに隨ひ自然と彼の國の事態も了解する様にて、後々はその章句の疎そき所は、一日に十行も、その餘も、格別の勞苦なく解し

得るやうにもなりたり。尤も毎春參向さんかうの通詞どもに聞き糺せし事もあり。又その間には解屍かいしの事もあり。獸畜を解きて見合はせしも度々のことなりき。

この會業怠らずして勤めたりし中、次第しだいに同臭どうしゅうの人も相加はり寄りつどふ事なりしが、各志す所ありて一樣ならず。翁おきなは一たび彼の國の解剖の書を得、直ちに實驗し、東西千古の差ちがひあることを知り明らかめ、治療の實用にも立て、世の醫家の業にも、發明ある種にもなしたく、一日もはやくこの一部を用立つ様になし見度しと志を起せし事ゆゑ、他に望む所もなく、一日會して解する處はその夜翻譯して草稿を立て、それに就きてはその譯述の仕かたを種々様々に考へ直せし事、四年の間、草稿は十一度まで認めかへて板下いたかに渡すやうになり、遂に「解體新書」翻譯の業成就したり。

蘭學事始 二  
卷。回想録。  
杉田玄白が死  
歿の三年前八  
十三才の時の  
作。

抑江戸にてこの學を創業して、腑分といひ古りしことを新たに「解體」と譯名し、かつ社中にて誰いふとなく蘭學といへる新名を首唱し、我が東方ほんとう閩州もんこうしゅう自然と通稱となるにも至れり。是れ今時のごとく隆盛となるべき最初嚆矢なり。今を以て考ふれば、これまで二百年來、彼の外科法は傳はりしなれども、直ちに彼の醫書を譯するといふ事は絶えてなかりしが、この時の創業不可思議にも、凡そ醫道の大經大本たる身體内景の書、その新譯の起始となりしは、不用意を以て得る所にして、實に天意とやいふべし。

(蘭學事始)

一外國語を曉得するは一新世界を發見することなり。

(ゲーテ)

島崎藤村 名  
は春樹。文學  
者。明治五年  
生。

### 二七 春を待ちつゝ

島崎藤村

フランスの旅にある頃、私はパリの客舎に身を置いて、遠く自分の國を振返つて見るやうな靜かな時を見つけることがよくあつた。わが國における十九世紀といふものに興味を持ち始めたのも、あの旅であつた。

もしわが國における十九世紀研究ともいふべきものを書いてくれる人があつたら、いかに自分はそれを讀むのを樂しむだらう。明治時代とか、徳川時代とかの區劃はよくされるが、過ぎ去つた一世紀を纏めて考へて見ると、そこに別様の趣が生じて來る。まづ本居宣長の死あたりからその時代の研究を讀みたい。萬葉の研究、古代詩歌の精神の復活、國語に對する愛情と尊重の念、それらのものがいかばかり當時に目ざめて來た國民的意識の

本居宣長 醫  
師。國學者。伊  
勢松坂の人。  
鈴の屋と號  
す。享和元年  
(二四六一)  
歿、年七十二。

喜多川歌麿 浮世繪の大家。文化二年(二四六五)歿、年五十三。  
皆川淇園 儒者。畫家。名は恩。文化四年(二四六七)歿、年七十四。  
上田秋成 國學者。和歌、文章をよくす。文化六年(二四六九)歿、年七十八。  
式亭三馬 小説家。通稱四宮太助。文政五年(二四八二)歿、年四十八。  
十返舎一九 小説家。本名は重田貞一。天保二年(二四九一)歿、年五十七。

基礎となつたかを讀みたい。一方には、あの時代の初において、喜多川歌麿も歿し、皆川淇園も歿し、上田秋成も歿し、十八世紀風の特殊な藝術が、次第に式亭三馬とか、十返舎一九とか、爲永春水とか、或は歌川派の畫家の群とかの寫實的傾向に變つて行つたことを讀みたい。一方には聖堂を學問の中心として、文藝・趣味・道徳の上に支那の憧憬があると思へば、一方には蘭學の研究などが非常な勢で起つてゐる十九世紀の初期を考へると、新舊のものが雜然同棲してゐる。それを委しく讀んで見たい。組織的な西洋の文物を受入れようとしてから、まだ漸く五六十年だ。兎も角もその短期の間に今日の新しい日本を仕上げたといふ人もあるが、それは餘り卑下した考へ方と思ふ。少くも百年以前の前半期をその準備の時代であつたと見なければなるまい。前野良澤とか、桂川甫周とか、杉田玄白とか、大槻玄幹とか、その他、足立左内、高

爲永春水 小説家。佐々木氏。通稱越前屋長次郎。天保十三年(二五〇二)歿、年五十四。  
前野良澤 前出。  
桂川甫周 醫師・蘭學者。幕府に仕ふ。文化六年(二四六九)歿、年五十九。  
杉田玄白 前出。  
大槻玄幹 醫師・仙臺藩に仕ふ。又幕府の醫書和解御用。天保八年(二四九七)歿、年五十三。  
足立左内 大阪鐵砲組同心。  
高橋作左衛門

橋作左衛門・伊藤圭介・足立長雋、あゝいふ人達が、來るべき時代の爲に地ならしをしていつた跡を委しく讀んで見たい。頼山陽もあの時代には見のがせない代表的の人物であつたらう。あの人の書いたものは随分混りけの多いものとしても、一代の人心を引付けたことは争はれまい。けれども、山陽にはまだ餘程十八世紀風の残つた所がある。渡邊崱山・高野長英・吉田松陰等になつてくると、何となくそこに武士的新人の型を見る。その情熱においてはより熱烈であり、その思想においてはより實行的であり、その學問においてもより新しいものとなつて來てゐる。反抗・憤怒・悲壯な犠牲精神、あの人達の性格を考へると、どうしても十九世紀でなければ見られないやうな激しい動搖と、神経質と、新時代の色彩を帯びたものがある。そんなことなどが詳しく書いてあつて、それを讀むことが出來たらばと思ふ。わが國の十九世紀

東岡と號す。大阪御定番同心。曆學、地理學に精し。文政十二年(一四八九)歿。年四十六。伊藤圭介 尾張藩の醫師。植物學の大家。理學博士。男爵。大學名譽教授。明治三十四年歿。年九十九。足立長筒 醫師・蘭學者。天保七年(一四九六)歿。年六十一。頼山陽 前出。渡嶋岸山 前出。高野長英 本姓後藤氏。蘭醫。嘉永三年(一五二〇)

歿、年四十七。吉田松陰 萩の藩士。名は矩方、通稱寅次郎。尊王の志士。安政六年(二五一九)歿、年三十。長谷川二葉亭 小説家。名は辰之助。明治四十二年歿、年四十八。山田美妙齋 小説家。名は武太郎。硯友社同人、二葉亭と共に言文一致運動に功あり。明治四十年歿、年四十三。ゴンクウル (1822-1896) 佛國の小説家。テカタン 廢類・凋落等と譯す。

は、舊いものが次第に廢れていつて、新しいものがまだ眞實に生れなかつたやうな時だ。すべてのものが統一を欲して叫びをあげてゐたやうな時だ。その中で士族といふ一大階級が滅落していつた。幾何の悲劇がそこに醸されたらう。それを讀んで見たい。長谷川二葉亭、山田美妙齋などの始めた言文一致の仕事、國語の統一といふ上から論じたのも讀みたい。新しい詩歌が僅かに頭を擡げたのも漸く十九世紀の末のことである。

異郷の旅に萌した私の心持は、歸國の後、長く變らずにあつた。前世紀とは言つても、あの時代に起つて來てゐることは、皆私達に直接關係の深いもののみである。或意味からいへば、私達はそこから出發してゐる。あの暗い時代をもつと探つて見るといふのは、今日の私達に取つても興味深いことではなからうか。ゴンクウルには日本の浮世繪に關した名著がある。あゝいふ

著述が單なる異國趣味でなしに、十八世紀の藝術に寄せた深い興味から作られたといふのは、面白い事だと思ふ。もし我が國の十九世紀研究ともいふべきものを書いてくれる人があるなら、過ぐる二つの世紀の間の藝術の比較だけでも、もつと私達の目をあけてくれることが多からうと思ふ。あの歌麿などが、あれほどデカタンの傾向のあつた人なのにもかゝらず、あの畫にあらはれて居る線や色彩から私達の受取る感じは、あの熟し切つたやうな人物の形態や髪や口脣などから私達の受取る感じは、十八世紀でなければ見られないものといふ氣もする。十九世紀の藝術となると、もつと神經質なものがあるやうな氣がする。さういふ比較を讀んで見たい。私達が北齋の畫に見つけるグロテスクの美とも言ひたいものは、一茶の俳句や南北の脚本に見つけるものと、何處か共通したやうな性質のものであるか、奈何か。

北齋 葛飾氏。名は爲一。浮世繪師。嘉永二年(二五〇九)歿、年九十。  
グロテスク 奇怪な。  
一茶 小林氏。俳人。通稱彌太郎。信濃の人。文政十年(二四八七)歿、年六十五。  
南北 鶴屋南北。江戸の劇作家。文政十二年歿、年七十五。  
ムーヴマン (佛語)運動。

さういふことも読んで見たい。過去の藝術が靜的な物の表現であるといふことは、よく私達の教へられる所である。さういふ判断に従へば、北齋の畫に現れて居るやうな動きを、あのムーヴマンをどう見たらいいのだらう。江戸時代の藝術家が概して淡泊であり、洒脱であるといふことも、よく私達の教へられる所である。その見方に従へば、小説作者としての馬琴、畫家としての北齋、戯曲家としての南北、詩人としての一茶、あの人達に見るやうな執拗と濃情とをどう考へたらいいのだらう。さういふことも精しく読んで見たい。

文學の上から考へて見ても、私達は三馬や一九などの書いたものを一概に軽く見る先入主な考へ方に捉へられて、はつきりした特色も掴めない。或は前世紀の初期の特色は、南北の戯曲などの方に色濃く現れてゐるやうにも思へる。詩人としての一茶

桂園派 香川景樹の歌風を繼ぐもの。

は確に十九世紀初期の人で、その自我を高調したといふ點から見ても、人間の煩惱を憚らずに歌ひ出したといふ點から見ても、あの蕪村などに比べて遙かに近代的であると言へよう。私達は前世紀の初の詩歌を見渡して、桂園派の諸歌人の歌よりも、千蔭の流を汲む人達のそれよりも、一茶の俳句の方により多く時代の特色を見得るやうな氣もする。しかし、かういふことは、今俄かに言つて了へるものでもない。景樹の歌の中にも、かなり私達の心持に近いものがある。さういふことが精しく書いてあつて、それを讀むことが出来たらばと思ふ。

若しさういふ研究を書いてくれる人があるなら、寫生に關したことも讀みたい。文學の上に寫生の唱へられたのは明治になつてからのことのやうであるが、それは洋畫の方法から刺戟された寫生論の組織立てられたまでであつて、寫生そのものは、私

鹽學 岡山  
氏。寫生畫に  
巧にして、そ  
の流を岡山派  
といふ。寛政  
七年(二四五  
五)歿、年六  
十三。  
四條派 寫生  
畫派の一派。  
松村月溪には  
じまる。

北村透谷 文  
學者。名は門  
太郎。東京の  
人。明治二十  
七年歿、年二  
十七。

達の根深い傳統の一つと言つてもいゝほど、かなり古くからあつたことを讀みたい。鹽學をめぐつて流れて來た四條派の畫風を擧げるまでもなく、繪畫以外の小説にも、戯曲にも、俳句にも、前世紀の初の藝術の多くが寫生の方法を取入れてゐることを讀みたい。

善かれ悪かれ、私達は父をよく知らなければならぬ、その時代をよく知らなければならぬ。若し私の讀みたいと思ふやうな研究を書いてくれる人があるなら、何程の題目をそこに見出し得るか知れないやうな氣もする。それは當時の人の心を結晶したやうな文學や美術の作品の比較にのみ止まるまい。あの諧謔と諷刺とに満たされて居るやうな三馬一九、その他の作者の戯作の中に、當時の平民の道德と虚無的な傾向とを探らうと試みたものは北村透谷であつた。あゝ、いふことも精しく讀んで見

たい。意氣とか粹とかの美の觀念が、當時の民衆の間から生れて來て居ることも注目し値する。武士の階級が次第に墮落して俠客なぞの輩出するやうになつた時、何程當時の一般の人の心が、經濟的にも道德的にも、また精神的にも解放を求めて行つたか、それがまた滑稽文字ともなり戯作ともなつて、奈何に當時の文學の上にあらはれて來て居るか、さういふことも讀みたい。

契沖眞淵・宣長、その他先覺者の大きな功績は、古語の研究によつて、幾世紀に互る支那の模倣的な風潮から自國の言葉を救つた所にあらず、一大反抗の精神を喚起した所にあらず。あの人達の遺した仕事の大きかつたことに氣づいたのも、やはり私はフランスの旅にあつて我が國を顧みた時であつた。前世紀の初には既に宣長も歿して居ることを思ふと、恐らく當時はその使徒達の時代であつたらう。その中での代表とも見るべき平田篤胤

契沖 國學  
者。攝津の人。  
大阪高津の圓  
珠庵住僧。元  
祿十四年(二  
三六一)歿、  
年六十二。  
平田篤胤 砂  
田の人。本姓  
大和田。平田  
篤胤の養子と  
なる。天保十  
四年(二五〇  
三)歿、年六  
十八。

は、國學を神道にまで持つて行つたやうな人で、あの人の歩いた道は、宣長あたりよりずっと窮屈なものといふ氣がするが、當時の人の心に刺戟を與へたことは争はれまい。私は前世紀の初に起つて來た保守的な精神を、單に頑固なものとはばかり見ずにもつと別な方面から研究されたものを読みみたい。それが盛な愛國運動となつて行つた跡を読みみたい。この保守的な精神は、吉田松陰等によつて代表されるやうな世界探求の精神と全く腹違ひのものであつたらうか。何と言つても、前世紀での大きな出來事の一つは明治の維新であらうが、舊制度の打破、民族の獨立、外國勢力への對抗といふことにかけて、前世紀の初から流れて來たこの二つの精神が相交又し、相刺戟した跡を読みみたい。今日私達の眼前に展開しつゝあるやうな世界主義と、その反動の大勢とは、早くも前世紀に産聲を揚げた雙生兒であることを読みみたい。

私は少年時代を振返つて見て、自分の物心づく頃から明治二十年頃までの間は、かなり暗かつた時代のやうに思ふ。恐らく西南戦争以前の十年間は、もつと暗かつたらう。私達は、明治維新と共に開けて來た時代の輝いた方面のみを見るに慣らされて、その慘澹たる光景には兎角眼を塞ぎがちであつた。さういふ真相をも読みみたい。私達がたゞ結果に於て知り得るやうな父の時代をもつとよく読みみたい。明治の初に生れて來たものは、文學でも美術でも、徳川時代の末にすら比較し難いほど見劣りのする粗末なものばかりだ。明治維新の齎したものは、その一面に於て、こんな深刻な影響のあることを想ひ見なければならぬ。封建時代の遺物といふ名の下に、あらゆる文化が蹂みにじられはしなかつたらうか。僅かに黙阿彌の脚本があつて前世紀の中程を飾るのみで、詩も隠れ、繪畫も潛み、あらゆる藝術は一時姿を晦まし



たかのやうに見える。さういふ破壊の動いて行つた跡が正しく判断されてあるものを讀みたい。

實際、私達は斯ういふ時代から出發して來てゐる。一概に過去を黄金時代のやうに考へ、今日を頽廢墮落の極と見るやうなことは、私は取らない。今日の青年の激しい精神の動搖を思ふものは、もつとその由來する所を自分等の内部に尋ねて見なければなるまい。(春を待ちつゝ)

春暮れて後夏になり、夏果てて秋の來るにはあらず。春はやがて夏の氣を催し、夏より既に秋は通ひ、秋はすなはち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり、梅も苔みぬ、木の葉の落つるも、先づ落ちて芽ぐむにはあらず、下より萌し、つはるに堪へずして落つるなり。(徒然草) 一五五段

## 二八 高瀬舟

森 鷗 外

森鷗外 名は林太郎。醫學博士。文學博士。大正十一年歿、年六十一。

高瀬舟 底扁平にして淺水に適する小舟。

高瀬川 賀茂川の分流。更に二つに分れ、一は鳥羽にて桂川に入り、一は伏見にて淀川に入る。

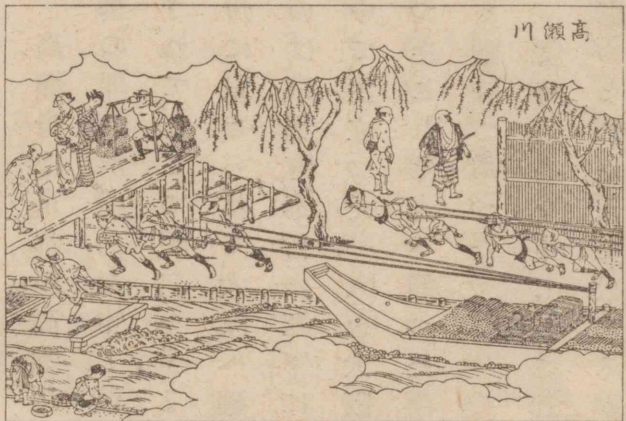
高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼出されて、そこで暇乞をすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にゐる同心で、此の同心は罪人の親類の中で、主立つた一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた。黙許であつた。

當時遠島を申し渡された罪人は、勿論重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盜をするために人を殺し火を放つたといふやうな、獐惡な人物が多數を占めてゐたわけでは

ない。高瀬舟に乗る罪人の過半は、所謂心得違のために、思はぬ科

を犯した人であつた。

さういふ罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つゝ東へ走つて、賀茂川を横ぎつて下るのであつた。此の舟の中で、罪人と其の親類の者とは夜どほし身の上を語りあふ。いつもいつも悔んでも還らぬ繰言である。護送の役をする同心は、傍で



高瀬舟の圖

それを聞いて、罪人を出した親戚眷族の悲惨な境遇を細かに知ることが出来た。所詮、町奉行の白洲で表向の口供を聞いたり、役

所の机の上で口書を読んだりする役人の夢にも窺ふことの出  
來ぬ境遇である。

同心を勤める人にも、いろいろの性質があるから、此の時只うるさいと思つて、耳を掩ひたく思ふ冷淡な同心があるかと思へば、又しみじみと人の哀を身に引受けて、役柄ゆゑ氣色には見せぬながら、無言の中に私かに胸を痛める同心もあつた。場合によつて非常に悲惨な境遇に陥つた罪人と其の親類とを、特に心弱い、涙脆い同心が幸領して行くことになる、其の同心は不覺の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行の同心仲間て、不快な職務として嫌はれてゐた。

いつの頃であつたか、多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執つて

白河樂翁 松  
平定信。奥州  
白河の城主。  
寛政時代の名  
老中。文政十  
二年（二四八  
九）歿、年七  
十二。

寛政 光格天皇の御代。  
(四九一四六)  
知恩院 京都東山にあり。  
浄土宗の本山。

ゐた寛政の頃でもあつたであらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない、珍らしい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助といつて、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類はないので、舟にも只一人て乗つた。

護送を命ぜられて、一しよに舟に乗込んだ同心羽田庄兵衛は、たゞ喜助が弟殺しの罪人だといふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて来る間、この瘦肉の、色の蒼白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるやうな、温順を装つて権勢に媚びる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思つた。そして舟に乗つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の舉動に、細かい注意をしてゐた。

其の日は夕方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪廓をかすませ、やうやう近寄つて来る夏の温かさが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、賀茂川を横ぎつた頃からは、あたりがひつそりとして、只舳に割かれる水のさゝやきを聞くのみである。夜舟で寝ることは、罪人にも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙つてゐる。其の額は晴やかで、目には微かなかゝやきがある。

庄兵衛はまともには見てゐぬが、始終喜助の顔から目を離さ

ずにある。そして不思議だ、不思議だと、心の内で繰返してゐる。それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しさうで、若し役人に對する氣兼ねがなかつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌ひ出すとかしさに思はれたからである。

庄兵衛は心の中に思つた。これまで此の高瀬舟の宰領をしたことは幾度だか知れない。しかし載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な様子をしてゐた。それに此の男はどうしたのだらう。遊山船にでも乗つたやうな顔をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしや其の弟が悪い奴で、それをどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。この色の蒼い瘦男が、その人の情といふものが全く缺けてゐる程の、世にも稀な悪人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。

やいや、それにしては何一つ辻褃の合はぬ言語や舉動がない。此の男はどうしたのだらう。庄兵衛がためには、喜助の態度が、考へれば考へる程わからなくなるのである。

暫くして、庄兵衛はこらへ切れなくなつて呼掛けた。

「喜助、お前は何を思つてゐるのか。」

「はい。」

といつてあたりを見廻した喜助は、何事をお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して庄兵衛の氣色を伺つた。

庄兵衛は、自分が突然問を發した動機を明かして、役目を離れた應對を求める分疏をしなくてはならぬやうに感じた。そこから云つた。

「いや、別にわけがあつて聞いたのではない。實はな、己は先刻コトからお前の島へ往く心持が聞いて見たかつたのだ。己はこれまで此の舟で大勢の人を島へ送つた。それは随分いろいろな身の上の人だつたが、どれもこれも島へ往くのを悲しがつて、見送りに来て一しよに舟に乗る親類のものと、夜どほし泣くに極つてゐた。それにお前の様子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのかい。」

喜助はにっこり笑つた。

「御親切に仰しやつて下さつて、有り難うございます。なる程島へ往くといふことは、外の人には悲しい事でございます。其の心持は私も思ひ遣つて見る事が出来ます。しかしそれは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまで私の致して參つたや

うな苦みは、どこへ參つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしやつらい所でも、鬼の栖む所ではございます。私はこれまで、どこいつて自分のゐて好い所といふものがございませんでした。今度お上で島にゐると仰しやつて下さいます。そのゐると仰しやる所に落ちてゐることが出来ますのが、先づ何よりも有り難い事でございます。それに私はこんなにか弱い體ではございますが、ついで病氣を致したことはございませんから、島へ往つてから、どんなつらい仕事をしたつて、體を痛めるやうなことはあるまいと存じます。それから今度島へお遣り下さるにつきまして、二百文の鳥目を戴きました。それをこゝに持つてをります。」

かういひ掛けて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ附けられるものには、鳥目二百文を遣はすといふのは、當時の掟であつた。

喜助は語を繼いだ。

「お恥づかしい事を申し上げなくてはなりませんねが、私は今日まで二百文といふお足を、かうして懐に入れて持つてゐたことはございませぬ。どこかで仕事に取附きたいと思つて、仕事を尋ねて歩きまして、それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりません。それもお金で物を買つて食べられる時は、私の工面の好い時で、大抵は借りたものを返して、又後を借りたのでございませぬ。それがお牢に這入つてからは、仕事をせずには食べさせて戴きます。私はそればかりでも、お上に對して濟まない事を致してゐるやうでございませぬ。それにお牢を出る時に、此の二百文を戴きましたのでございませぬ。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、此の二百文は私が使はずには持つてゐるこ

とが出来ます。島へ往つて見ますまでは、どんな仕事が出来るか分かりませんが、私は此の二百文を島でする仕事の元手にしようと思つてをります。」

かういつて、喜助は口を噤んだ。庄兵衛は、「うん、さうかい。」

とは云つたが、聞く事毎に餘り意表に出たので、これも暫く何もいふことが出来ずに、考へ込んで黙つてゐた。

庄兵衛はかれこれ初老に手の届く年になつてゐて、もう子供が四人ある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇といはれる程の儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために着るものの外、寝巻しか拵へぬ位にしてゐる。しかし不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意

はあるが、裕かな家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が満足する程手元を引締めて暮して行くことが出来ない。動もすれば月末になつて勘定が足りなくなる。すると女房が内證で里から金を持つて来て帳尻を合はせる。それは夫が借財といふ事を毛蟲のやうに嫌ふからである。さういふ事は所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衛は五節句だからといつては、里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だといつては、里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を填めて貰つたのに氣が附いては、好い顔はしない。格別平和を破るやうな事のない羽田の家に、折々波風の起るのは、是が原因である。

庄兵衛は今喜助の話聞いて、喜助の身の上をわが身の上に引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡してなくしてしまふと云つた。いかにも哀な、氣の毒な境

遇である。しかし一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に果してどれ程の差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば算盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有り難がる二百文に相當する貯蓄だに、こつちはないのである。

さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。其の心持はこつちから察して遣ることが出来る。しかしかにかに桁を違へて考へて見ても不思議なのは、喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で仕事を見つけるのに苦しんだ。それを見つげさへすれば、骨を惜しまずに働いて、やうやう口を糊することの出来るだけで満足した。そこで牢に入つてからは、今まで得難かつ

た食が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて、生れてから知らぬ満足を覺えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違へて考へて見ても、こゝに彼と我との間に大いなる懸隔のあることを知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一ぱいの生活である。然るにそこに満足を覺えたことは殆ど無い。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。しかし心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようといふ疑懼が潜んでゐて、折々妻が里方から金を取出して來て穴填めをしたことなどがわかると、此の疑懼が意識の閾の上に頭を擡げて來るのである。一體此の懸隔はどうして生じて來るだらう。只上邊だけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるからだ

といつてしまへばそれまでである。しかしそれは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなれさうにない。この根柢はもつと深い處にあるやうだと、庄兵衛は思つた。庄兵衛は只漠然と、人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、此の病がなかつたらと思ふ。其の日其の日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又其の蓄がもつと多かつたらと思ふ。此の如くに先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏み止まることが出来るものやら分らない。それを今日の前で踏み止まつて見せてくれるのが此の喜助だと、庄兵衛は氣が附いた。庄兵衛は今さらのやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。この時庄兵衛は空を仰いでゐる喜助の頭から毫光がさすやうに思つた。(鷗外全集)



二九 文學復興の時期

中古王朝の時  
代 平安朝時  
代を指す。第  
四課參照。  
鎌倉室町の時  
代 鎌倉時代  
は後鳥羽天皇  
の文治二年  
(一八四六)よ  
り後醍醐天皇  
の建武二年  
(一九九五)に  
至る一五〇年  
間。  
室町時代は後  
醍醐天皇の延  
元元年(一九  
九六)より後  
陽成天皇の慶

國史を繙き西史を手にするものは、必ず文化の進歩に於て東  
西同一の現象あるを認むべし。先づ我が國に於ては文學の花期  
金世と稱すべきは中古王朝の時代に在りしが、鎌倉室町の時代  
を経て一旦絶滅に垂んとし、徳川氏の世に及んで再び大いに其  
の光彩を放てり。之と等しく、希臘羅馬の文學は一時舊世界の精  
華たりしが、西羅馬の顛覆とともに文學も其の基礎を失ひしか  
ば、中世紀數百年が間は歐洲を通じて無文無學の暗世なりき。而  
してかの文學復興の日は遂に今日の歐洲文明を喚起する首途  
とはなれり。

東西文化の進歩斯の如く相類似し、其の開化に及ぼせる影響  
亦等しく莫大なりといへども、彼と此とは其の規模もとより大

長八年(二二  
六三)に至る  
二六八年間。  
西羅馬の顛覆  
西紀四七六年  
ルネーサンス  
文學復興。

小を異にし、其の時世の事情亦多少の異同あるを免れず。姑く余  
をして東西のルネーサンスを比較せしめよ。

歐西文學の復興は社會の變動に伴ひて、思想の自由重要な  
因子となれり。蓋し中世期に在りては宗教の束縛最も甚だし  
くして、毫も之に背戾せる學説を許さず。故に人絶えて新奇の説  
に進む事能はずして、飽くまでも宗門の教誡を信ぜざるべから  
ず。營に經典のみならず、僧侶の一言一行といへども實に神聖犯  
すべからざるものなりしが故に、一般人心は遂に伸張する期な  
くして、社會は全く考察の力を失へり。故に哲學は死し、文學は息  
み、世運の進歩全く遏止せられたり。此の時に當りてかの十字軍  
は此等の歐人をして全く他種の開化人と相接せしめしかば、其  
の結果は人をして狹陋の見を開き、頑迷の夢を醒し、自由の意思  
を發揮せしめて、次第に宗門を輕んずるの風を養はしめ、教會の

關ヶ原の戰  
慶長五年（二  
二六〇）徳川  
家康と石田三  
成が關ヶ原  
（岐阜縣伊吹  
山麓）に於て  
天下を争ひし  
戰役。

勢力漸く減退するに至れり。是に於てか腐敗せる當時を棄てて文化燦然たる古代に遡らんとする傾向を生じ、宗教の信仰心衰へたると同時に、希臘羅馬の古哲學を研究するもの益増加せり。これ即ち文學復活の大勢にして、各自其の思考・言論を恣にし得たるを以て、數百年來壓抑せられたる潛勢力俄に其の活動を起して、文學の隆時遂に巨多の偉人を生成せるなり。

故に此の時に當りては、社會一般の状態已に大變せるものにして、啻に文學のみ復活せしに非ず。宗教の羈絆解け、封建の制度やぶれ、譬へば凝結閉塞せし中世の時期始めて一陽の來復に會ひたる觀あり。茲に於て古哲學は復興し、古文學は復興し、社會一般の事すべて復活の氣運に際會せるなり。

顧みて我が國文學復活の状態は如何なりしかといふに、關ヶ原の戰はもとより十字軍の如き效果ありしものにあらず、又室

町の暗黒時代には人心を支配する宗教の一大抑壓存在せしに非ず。（宗教の勢力はやゝありたれども）我が所謂暗黒時代は天下の戰亂に際して世人が文筆を棄てたるによれり。故に文學を抑壓するものは戰爭のみ。世に戰爭を絶ちて時運昌平に向へば其の勃興復活の勢もとより遏止すべからざるなり。然れどもこの復活は心思の自由を得たるに原因せず、はた新知識の之を促したるにも非ず、社會は依然たる社會にして、封建の制度は却つて其の鞏固を加へたる時に於て起れり。其の復活未だ俄に恃むべからざる知るべきなり。

社會の進歩を妨害し、百物の生長を遏むるものは封建の制度に如くはなし。何となれば封建制の精神は舊態を永遠に保持するに在ればなり。但わが徳川氏は文學に向つてはただ寛容なりしが故に、他の藝術に比しては文學は割合に進歩をなせり。然れ

ども其の進歩は如何にありとも、之を圍繞する百物悉く封建的なる以上は、到底封建時代の影響を脱却する能はざるなり。かの和學者が古文學を復興して遂に古人に超出する能はざりしが如き、又其の他の文學が儒教主義を敷衍して千篇一律、人をして其の單純に倦ましめしが如き、皆封建制の烙印を被れるものとす。之を西洋の文學が單に古文學の復興に止まらずしてよく發達大成せるに比すれば、其の得失甚だ明瞭なり。要するに彼が文學は復活時に於て社會人心とともに一變し、我が文學は同一社會殊に封建制の下に在りて復活せり。復活の事は相似たりと雖も、其の結果に得失ある多くは之がためなり。

かく論じ來れば、我が國文學が封建守舊的雰圍氣中に發育せると、西洋の文學が百物一新の社會に生長せると其の趣大いに異なるを知るが故に、この東西復活時の比較は始めより適當を

回々教。マホ  
メット教。猶  
太教と基督教  
に基づける一  
神教。

失へるものなるを知るべし。而して之と同時に眞正の復活時代といふべきものは明治維新後に外ならざる事をさとるなり。

明治維新の後は西洋の復活時代に於けるが如く、社會の状態已に大いに一新せり。人民思想の更に高尚に更に濶大となれるも亦相同じ。而して新たに西洋の開化と相接して彼が文學を玩味する事を得るは、西歐人が嘗て回々教徒の開化と十字軍頭に接したると其の事情太だ相似たるに非ずや。東西の長短こゝに比較せらるべく、材料の範圍は全世界に擴張せられたり。此の時に當りて奮つて古文學を研究し、しかも完全を古に定めずして、大成を未來に求むれば、文學の黄金時代は決して遠きに非ざるべし。文學復興の時期は徳川の初世に非ずして、實に明治の初年に在り。何ぞ旃を勉めざる、何ぞ旃をつとめざる。

三〇 臣 節

抑、我が國は皇室を宗家とし奉り、天皇を古今に互る中心と仰ぐ、君民一體の大家族國家である。故に國家の繁榮に盡くすことは、即ち天皇の御榮えに奉仕することであり、天皇に忠を盡くし奉ることは、即ち國を愛し國の隆昌を圖ることに外ならぬ。忠君なくして愛國はなく、愛國なくして忠君はない。あらゆる愛國は、常に忠君の至情によつて貫かれ、すべての忠君は常に愛國の熱誠を伴なつてゐる。固より外國に於ても愛國の精神は存する。然るにこの愛國は、我が國の如き忠君と根柢より一となり、又敬神崇祖と完全に一致するが如きものではない。

實に忠は我が臣民の根本の道であり、我が國民道德の基本である。我等は、忠によつて日本臣民となり、忠に於て生命を得、こゝ

六のあけ  
一正足族あ敷  
忠君即ち  
愛國即ち  
忠

織田信長 武將。天正五年右大臣に任ぜらる。天正十年(二二四二)歿、年四十九。  
豊臣秀吉 武將。天正十三年關白に任ぜらる。慶長三年(二五八)歿、年六十三。

萬葉集 第三課參照。大伴家持の歌 萬葉集卷十八に出づ。

にすべての道德の根源を見出す。これを我が國史に徴するに、忠君の精神は常に國民の心を一貫してゐる。戰國時代に於ける皇室の式微は、寔に畏れ多い極みであるが、併しこの時代に於ても、なほ英雄が事をなすに當つては、その尊皇の精神の認められな限り、人心を得ることは出来なかつた。織田信長、豊臣秀吉等がよく事功を奏するを得たことは、この間の消息を物語つてゐる。即ち如何なる場合にも、尊皇の精神は國民を動かす最も力強いものである。

萬葉集に見える大伴家持の歌には、

大伴の 遠つ神祖の その名をば 大來目主とおひも  
ちて 仕へし官 海行かば 水漬くかばね 山行かば  
草むすかばね 大皇の 邊にこそ死なめ かへりみは  
せじと言立て

橋諸兄 歌人。左大臣。天平寶字元年（一四一七）歿、年七十四。ふる雪の歌 萬葉集卷十七に出づ。  
 楠木正成 吉野朝の忠臣。建武中興に大功あり。延元元年（一九九六）淡川に戦死、年四十三。源實朝 頼朝の子。歌人。鎌倉幕府第三代將軍。承久元年（一八七九）歿、年二十八。

月照 京都清水寺の僧。安政五年（二五二一）薩摩湯に入水、年四十六。  
 平野國臣 名は次郎。幕末の勤王志士。福岡藩士。元治元年（二五二四）歿、年三十七。  
 梅田雲濱 名は源次郎。尊王攘夷論者。若狭の人。安政六年（二五二九）歿、年四十四。

とある。この歌は、古より我が國民胸奥の琴線に觸れ、今に傳誦せられてゐる。橋諸兄の

ふる雪の白髪までに大皇につかへまつれば貴くもあ  
 るか

の歌には、白髪に至るまで大君に仕へ奉つた忠臣の面目が躍如として現れてゐる。又楠木正成の七生報國の精神は、今も國民を感奮興起せしめてゐる。又我が國には古より、或は激越に或は沈痛に忠君の心を歌に託して披瀝したものが少くない。即ち源實朝の

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心我あらめ  
 やも

僧月照の  
 大君の爲には何か惜しからむ薩摩の瀬戸に身は沈む

とも

平野國臣の

數ならぬ身にはあれども希はくは錦の旗のもとに死  
 にてむ

梅田雲濱の

君が代を思ふ心の一寸に我が身ありとも思はざり  
 けり

等の如きそれである。

忠は、國民各自が常時その分を竭くし、忠實にその職務を勵むことによつて實現せられる。畏くも教育ニ關スル勅語に示し給うた如く、獨り一旦緩急ある場合に義勇公に奉ずるのみならず、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉己を持ち、博愛衆に及ぼし、學を修め、業を習ひ、智能を啓發し、徳器を成就し、更

橘守部 通稱  
元輔。國學者。  
歌人。伊勢の  
人。嘉永二年  
(二五〇九)歿、  
年六十九。  
待問雜記 守  
部の著。後篇  
共三卷。

に公益を廣め、世務を開き、國憲を重んじ、國法に遵ふ等のことは、  
みなこれ、大御心に應へ奉り、天業の恢弘を扶翼し奉る所以であ  
り、悉く忠の道である。橘守部は待問雜記に、

世人直に大宮に事ふるのみを奉公といへども、此の照す日  
月の下に、天皇に不事人やはある。武士の官司を將ます、かけ  
まくも畏き御あたりをはじめ、下がしもに至るまで、只高き  
卑き差等こそあれ、咸く君に仕る身にしあれば、物を書くも  
君のため、疾を治すも君のため、田を佃るも君のため、商ひす  
るももとより君の御爲なれど、卑賤身は、遙に下に遠離れれ  
ば、只近く世人のために、勞くほどの、天皇への事はなきなり。  
と述べてゐる。まことに政治にたづさはる者も、産業に従事する  
者も、將又、教育學問に身を獻げる者も、夫々ほどほどに身を盡く  
すことは、即ち皇運を扶翼し奉る忠の道であつて、決して私の道

ではない。

このことは、明治天皇の御製に、

ほどく／＼にこゝろをつくす國民のちからぞやがてわ  
が力なる

國のため身のほどく／＼に盡さなむ心のすゝむ道を學  
びて

と仰せられてあるによつて明かである。自己の職務を盡くすこ  
とが即ち天皇の大御業を扶翼し奉る所以であるとの深い自覺  
に立ち、

入リテハ恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治メ出テテハ一己ノ利害  
ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族  
ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ

と仰せられた聖旨のまにまにつとめ勵むことは、即ち臣民たる

我が國の  
の特色

ものの本務であり、日本人としての尊いつとめである。我が國に於ては、孝は極めて大切な道である。孝は家を地盤として發生するが、これを大にしては國を以てその根柢とする。孝は、直接には親に對するものであるが、更に天皇に對し奉る關係に於て、忠のなかに成り立つ。

我が國民の生活の基本は、西洋の如く個人でもなければ夫婦でもない。それは家である。家の生活は、夫婦兄弟の如き平面的關係だけではなく、その根幹となるものは、親子の立體的關係である。この親子の關係を本として近親相倚り相扶けて一團となり、我が國體に則とつて家長の下に渾然融合したものが、即ち我が國の家である。従つて家は固より利益を本として集つた團體でもなく、又個人的、相對的の愛などが本となつてつくられたものでもない。生み生まれるといふ自然の關係を本とし、敬慕と慈愛

我が國の  
の特色

とを中心とするのであつて、すべての人が、先づその生まれ落ちると共に一切の運命を託するところである。

我が國の家の生活は、現在の親子一家の生活に盡きるのではなく、遠き祖先に始まり、永遠に子孫によつて繼續せられる。現在の家の生活は、過去と未來とをつなぐものであつて、祖先の志を繼承發展させると同時に、これを子孫に傳へる。古來我が國に於て、家名が尊重せられた理由もこゝにある。家名は祖先以來築かれた家の名譽であつて、それを汚すことは、單なる個人の汚辱であるばかりでなく、一連の過去、現在及び未來の家門の耻辱と考へられる。従つて武士が戰場に出た場合の名乗の如きは、その祖先を語り、祖先の功業を語ることによつて、名譽ある家の名を辱しめないやうに、勇敢に戦ふことを誓ふ意味のものである。

又古より家憲、家訓乃至家風の如きものがあつて、子々孫々に

繼承し發展せしめられ、或は家實なるものが尊重保存せられ、家の繼承の象徴とせられ、或は我が國民一般を通じて、祖先の靈牌が嚴肅に承け繼がれてゐる如きは、國民の生活の基本が家にある、家が自然的情愛を本とした訓練精進の道場たることを示してゐる。かくの如く家の生活は、單に現在に止まるものでなく、祖先より子孫に通ずる不斷の連續である。従つて我が國に於ては、家の繼承が重んぜられ、法制上にも家督相續の制度が確立せられてゐる。現代西洋に於て、遺産相續のみあつて家督相續がないのは、西洋の家と我が國の家とが根本的に相違してゐることを示してゐる。

親子の  
情

親子の關係は自然の關係であり、そこに親子の情愛が発生する。親子は一連の生命の連續であり、親は子の本源であるから、子に對しては自ら撫育慈愛の情が生まれる。子は親の發展である

から、親に對しては敬慕報恩の念が生まれる。古來親子の關係に於て、親の子を思ふ心、子の親を敬慕する情を示した詩歌や物語や史實は極めて多い。萬葉集にも山上憶良の子に對する愛を詠んだ歌がある。

瓜食めばの歌  
第三課萬葉集  
鈔にて既習。

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲ばゆ  
いづくより 來りしものぞ 眼交に もとなかゝりて  
安寝しなさぬ

反歌

銀も金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも  
この歌は、まことに子を思ふ情を短い中によく表はしてゐる。  
又憶良がその子古日の死を悲しんで、

稚ければ道ゆきしらじ幣はせむ冥途の使負ひてとほ  
らせ

稚ければの歌  
萬葉集卷五に  
出づ。





忠孝一

佐久良東雄 勤王家・歌人。常陸の人。萬延元年（二五二〇）歿、年五十。  
乃木大將夫妻 名は希典、日清・日露兩役に勳功ありて伯爵となる。大正元年九月十三日歿、年六十四。夫人静子同日歿、年五十四。その子二人 勝典中尉。保典中尉。

忠と一つとなるところに、我が國の道德の特色があり、世界にその類例を見ないものとなつてゐる。従つてこの根本の要點を失つたものは、我が國の孝道ではあり得ない。武士の名乗がその家の皇室に出づることを名乗り、又家憲・家訓が皇室に對し奉る關係をその遠い源とした如きは、全く同じ道理に出づるものと見るべきである。佐久良東雄の

すめろぎにつかへまつれと我を生みし我が垂乳根は  
尊くありけり

といふ歌は、孝が忠に高められて始めてまことの孝となることを示すものである。乃木大將夫妻がその子二人までも國家のために獻げて、而も家門の名譽としたのも、家國一體・忠孝一本の心の現れである。かく忠孝一本の道によつて臣民が盡くす心は、天皇の御仁慈の大御心と一となつて君民相和の實が擧げられ、我

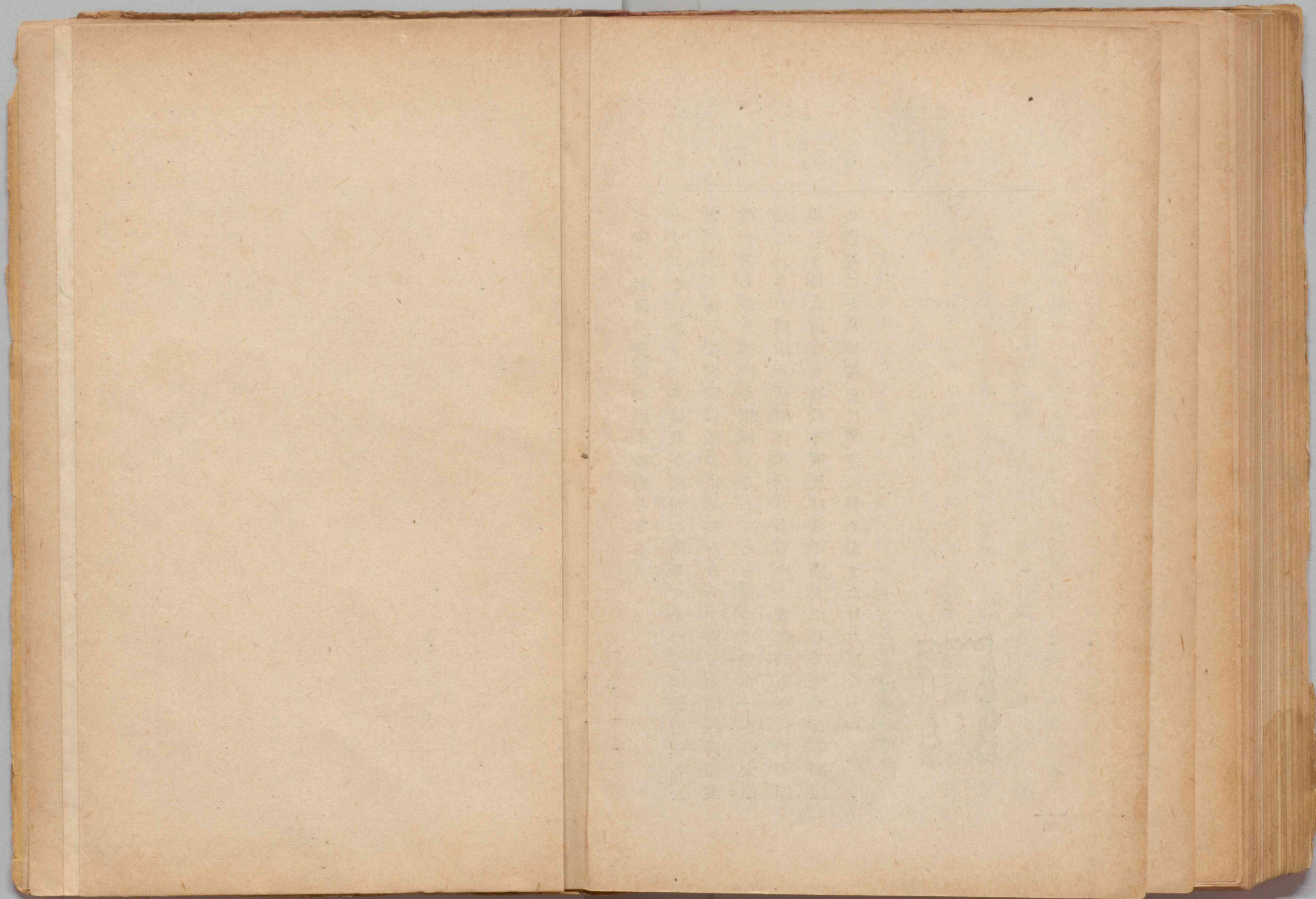
忠孝一本  
まこととゆへに  
なすべし

が國の無限の發展の根本の力となる。

まことに忠孝一本は、我が國體の精華であつて、國民道德の要諦である。而して國體は獨り道德のみならず、廣く政治・經濟・産業等のあらゆる部門の根柢をなしてゐる。従つて忠孝一本の大道は、これらの國家生活・國民生活のあらゆる實際的方面に於て顯現しなければならぬ。我等國民はこの宏大にして無窮なる國體の體現のために、彌、忠に彌、孝に努め勵まなければならぬ。

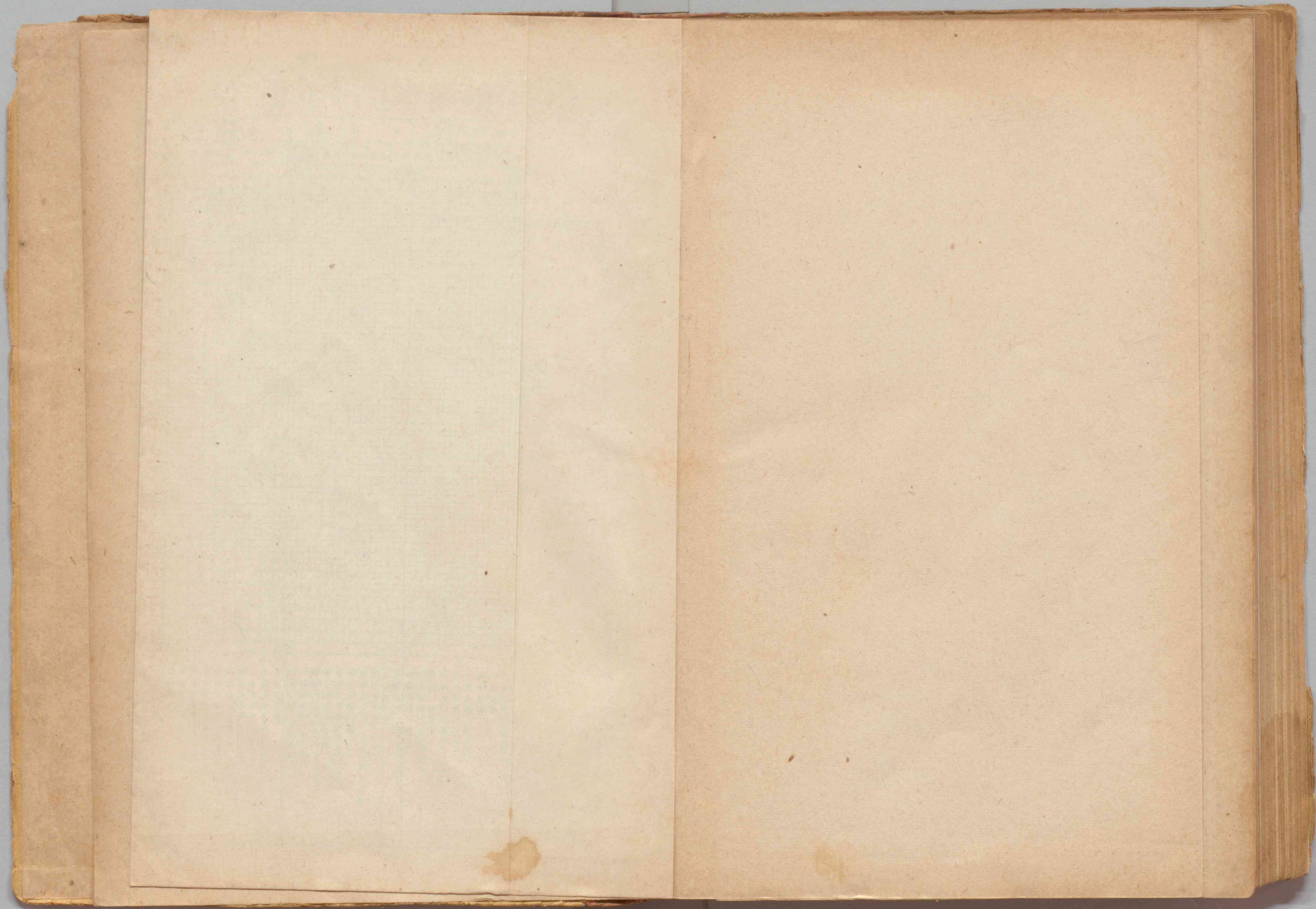
（文部省國體の本義）











日本文學年表 (近世—現代)

備考 一、作者の生存年限を示せる横線は、方眼一箇を五年としてあらはしたり。

時代	江	戸	時	代	現
天皇	後堀成 (二四六)	後水尾 (二七七)	明正 (二九九)	後光明 (三〇四)	西元 (三〇四)
武家	後醍醐 (二四六)	後光厳 (二七七)	後光厳 (二九九)	後光厳 (三〇四)	西元 (三〇四)
年號	文祿 (一六二二)	慶長 (一六二四)	元和 (一六二六)	貞享 (一六八四)	享保 (一七二〇)
元紀	2250	2300	2350	2400	2450
西曆	1590	1640	1690	1740	1790
著	巴 齋 隆 子 正 三 山	因 宗 樹 藤	流 長	有 也 太 郎	村 藤
名	錦 西 芭 突	吟 夢	睡 茂	角 其 雪 嵐	六 許 山
作	門 衛 左 門 石 白	徠 徂 巢 鳩 貞	滿 春 實 海 笑	一 滿 在 雲 出	一 滿 在 雲 出
家	門 衛 左 門 石 白	徠 徂 巢 鳩 貞	滿 春 實 海 笑	一 滿 在 雲 出	一 滿 在 雲 出
年	1590	1640	1690	1740	1790
在	1590	1640	1690	1740	1790
世	1590	1640	1690	1740	1790
間	1590	1640	1690	1740	1790
著	俳 諧 御 座 (一三三三)	〔漢 學〕	〔漢 學〕	〔漢 學〕	〔漢 學〕
作	〔漢 學〕	〔漢 學〕	〔漢 學〕	〔漢 學〕	〔漢 學〕
其	〔漢 學〕	〔漢 學〕	〔漢 學〕	〔漢 學〕	〔漢 學〕
他	〔漢 學〕	〔漢 學〕	〔漢 學〕	〔漢 學〕	〔漢 學〕

不許複製

昭和十二年七月廿二日印  
昭和十二年七月廿六日發  
昭和十三年一月二十日訂  
昭和十三年一月廿四日訂  
正再版發行  
正再版印刷

著者 垣內松三

發行兼印刷者 株式會社 文學社  
代表者 小林竹雄

發兌 株式會社 文學社  
東京市神田區美土代町十八番地  
電話 神田三五一番  
銀座東京三八七八番

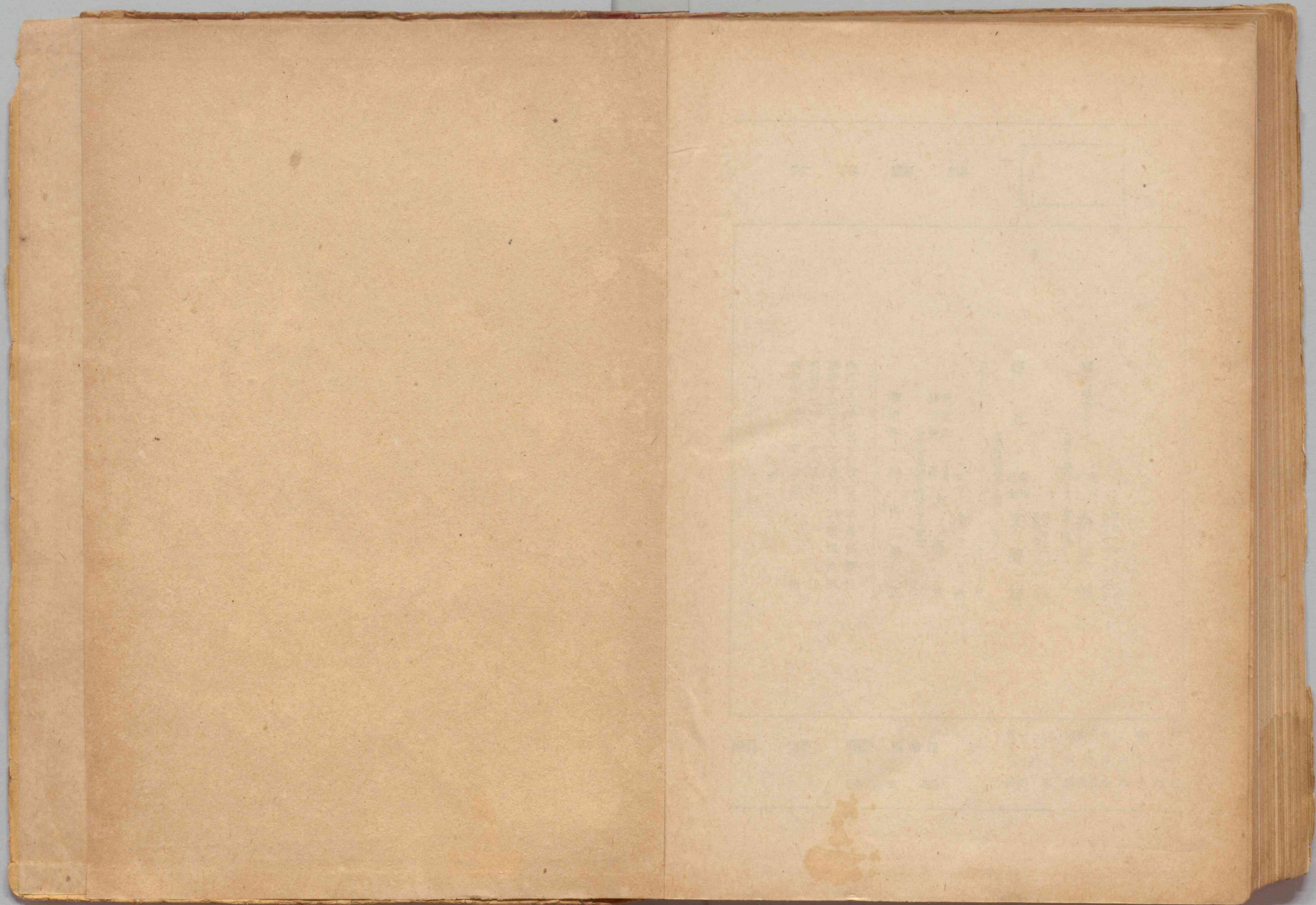
關西販賣所 株式會社 盛文館  
大阪府西區北區二丁目十八番地  
電話 土佐堀一五二三番  
銀座大阪七四三番

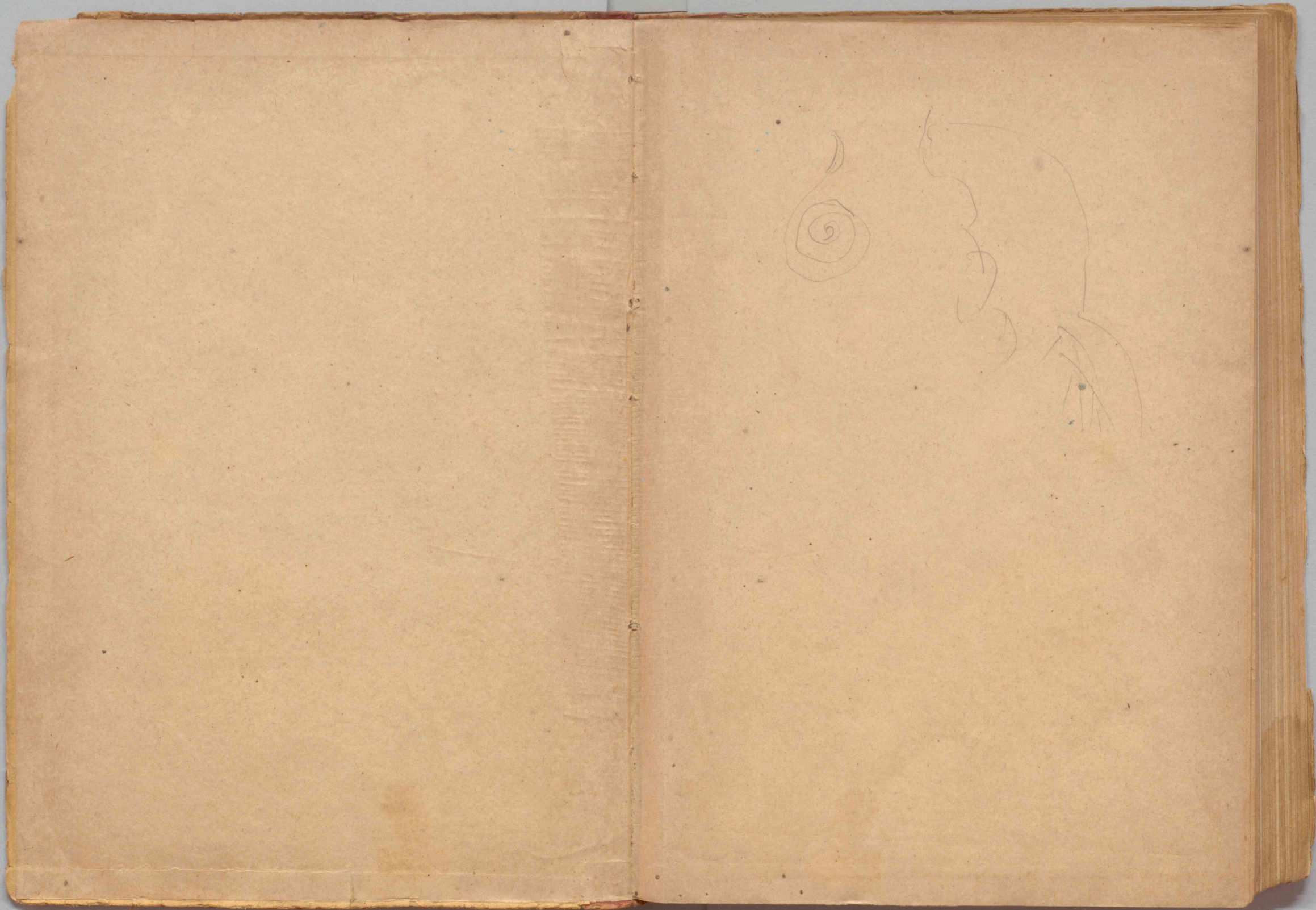
國文鑒新制版

(全五册)

一卷定價各壹圓  
三卷定價各九十八錢  
四卷定價各八十八錢









広島大学図書

2000044855

